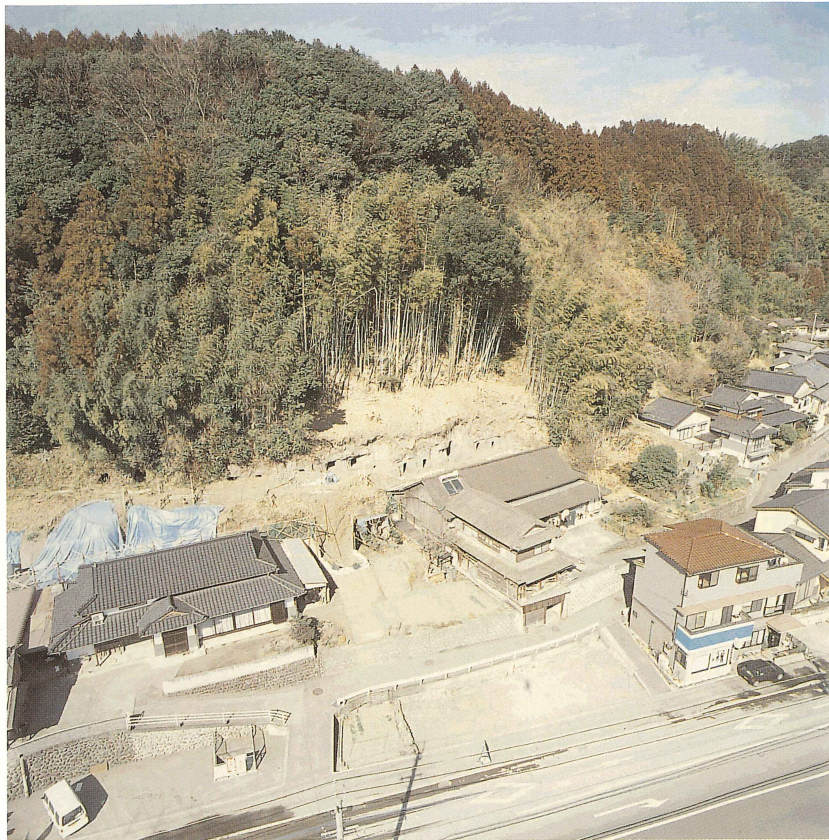


北友田横穴墓群

— 片山地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2005

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序 文

本書は、大分県教育委員会が片山地区急傾斜地崩壊対策工事に伴い、大分県日田土木事務所の依頼を受けて実施した日田市北友田横穴墓群の発掘調査報告書です。

日田市は大分県西部、九州のほぼ中央に位置しており、国指定文化財である穴観音古墳をはじめ、旧石器時代から中世・近世にかけての数多くの遺跡が点在し、近世には九州天領の中心地として栄えるなど、古い歴史と文化をもつ地域です。

今回調査した北友田横穴墓群は、日田市北部を流れる花月川右岸の丘陵斜面上に位置しています。ここでは古墳時代から中世にかけての墳墓を確認し、それぞれの時代の埋葬形態を明らかにすることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護並びに地域の先人の生活を理解する資料として、さらには、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成 17 年 3 月 31 日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 伊藤 正行

例 言

- 1、本書は平成14・15年に実施した片山地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う北友田横穴墓群の報告書である。
- 2、調査は、大分県教育委員会が大分県日田土木事務所の委託を受け実施した。
- 3、遺跡・遺構の実測と撮影は調査担当者の甲斐寿義・安井由加梨と吉田和彦・王川剛司（別府大学大学院）が行った。遺物の実測及びトレースは大分県教育庁埋蔵文化財センターで行い、遺物写真は槇島隆二が行った。
- 4、本書で用いた方位はすべて真北である。
- 5、出土した人骨の自然科学的分析を九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に依頼し、玉稿を得た。
- 6、本書の執筆・編集は、甲斐寿義が行った。
- 7、本遺跡の出土遺物並びに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管している。
- 8、表紙の写真については日田市教育委員会文化課の協力を得た。

目 次

第1章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査団の構成	1
第2章	遺跡の立地と環境	
1、	地理的環境	2
2、	歴史的環境	3
第3章	北友田横穴墓	
第1節	報告に当たって	5
第2節	発掘調査の成果	6
1、	調査経過と概要	6
第3節	片山第1地区の調査結果	7～11
1、	立地・調査前の状況	7
2、	調査の成果	8～10
(1)	西側調査区	8
(2)	東側調査区	8～10
第4節	片山第2地区の調査結果	11～38
1、	立地・調査前の状況	11～12
2、	調査の成果	13～38
(1)	第1支群	13～25
(2)	第2支群	26～28
(3)	第3支群	28～29
(4)	第4支群	29～38
第4章	まとめ	39
	附篇	42～51

図版目次

第1図	北友田横穴墓群周辺の遺跡	2	第21図	1-3号墓出土遺物実測図5	23
第2図	各部位の名称及び横穴墓の分類表	4	第22図	北友田横穴墓群1-4・5号墓実測図	24
第3図	北友田横穴墓群調査区周辺の地形	6	第23図	1-4号墓出土遺物実測図	25
第4図	北友田横穴墓群西側調査区各横穴墓配置図	7	第24図	1-5号墓出土遺物実測図	25
第5図	北友田横穴墓群1号墓実測図	8	第25図	北友田横穴墓群第2支群実測図	26
第6図	北友田横穴墓群2号墓実測図	8	第26図	2-1・2号墓出土遺物実測図	28
第7図	北友田横穴墓群3号墓実測図	9	第27図	北友田横穴墓群3-1号墓実測図	28
第8図	北友田横穴墓群4号墓実測図	9	第28図	3-1号墓出土遺物実測図	29
第9図	北友田横穴墓群5号墓実測図	10	第29図	北友田横穴墓群第4支群遺構配置図	29
第10図	北友田横穴墓群各横穴墓群全体配置図	11	第30図	北友田横穴墓群4-1・2号墓実測図	30
第11図	北友田横穴墓群第1支群遺構配置図	12	第31図	4-1号墓前庭部土層図	31
第12図	北友田横穴墓群第1支群1・2号墓実測図	12	第32図	北友田横穴墓群4-1号墓実測図	31
第13図	1-1号墓出土遺物実測図	15	第33図	4-1号墓出土遺物実測図	32
第14図	北友田横穴墓群1-2号墓玄室実測図	16	第34図	4-2号墓出土遺物実測図	33
第15図	1-2号墓出土遺物実測図	17	第35図	北友田横穴墓群4-3・4号墓実測図	34
第16図	北友田横穴墓群1-3号墓実測図	18	第36図	4-3号墓出土遺物実測図	35
第17図	1-3号墓出土遺物実測図1	19	第37図	4-4号墓出土遺物実測図1	36
第18図	1-3号墓出土遺物実測図2	20	第38図	4-4号墓出土遺物実測図2	37
第19図	1-3号墓出土遺物実測図3	21	第39図	北友田横穴墓群第4支群西側前庭部出土遺物実測図	38
第20図	1-3号墓出土遺物実測図4	22			

表目次

第1表	横穴墓番号変更表	5
第2表	遺物観察表	40・41

写真図版目次

図版1	片山第1地区横穴墓・片山第2地区横穴墓	52
図版2	片山第2地区横穴墓	53
図版3	片山第2地区出土遺物	54
図版4	片山第2地区出土遺物	55
図版5	片山第2地区出土遺物	56

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

北友田横穴墓群は、大分県日田市大字友田に所在する。この遺跡の調査は、片山地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う緊急発掘調査として実施した。片山地区は朝日ヶ丘から花月川に向けて伸びる丘陵先端部を切り取り造成された住宅地で、防壁等の対策の必要な急傾斜地崩壊危険箇所指定されている場所である。県日田土木事務所が平成10年度より片山地区急傾斜崩壊対策工事の計画を開始したのに伴い、県土木建築部企画検査室から事前の分布調査の依頼があり、これを受けた県教育委員会文化課では、平成11年度当初に分布調査を行った。その結果、当地区が周知遺跡である北友田横穴墓群であり、開口した横穴墓が多数存在することを確認した。そこで県日田土木事務所と協議して、工事の進捗に応じて、現状保存が困難な横穴墓については順次本調査を実施することとなった。初年度の調査は、平成14年5月にすでに開口している調査区西端の横穴墓について実施した。しかし、平成15年1月には、小型の横穴墓1基が工事中に発見されたため、3月に再度緊急調査を実施することとなった。この横穴墓は平成15年度の工事予定地へ続いており、また、平成15年度工事予定地内にも開口した横穴墓も存在することから、県日田土木事務所と協議して平成15年度工事着工前に確認調査を実施することとなり、工事用重機を使用し平成15年11月に調査を実施した。その結果、小型の横穴墓周辺には埋没した横穴墓が存在する可能性があり、また、開口している横穴墓の前庭部でも多量の遺物を確認したため、本調査を実施することとなった。

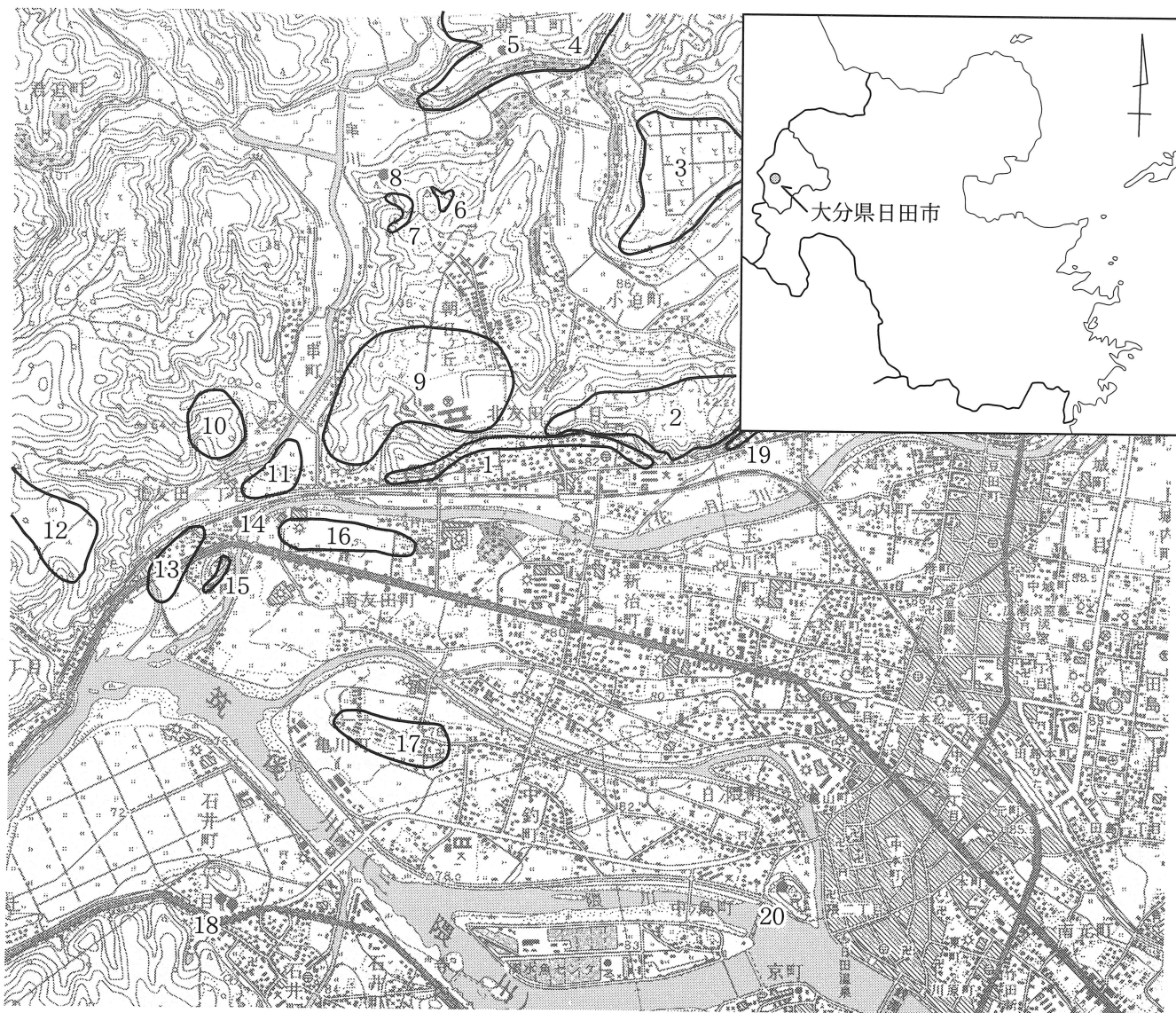
第2節 調査団の構成

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	大分県教育委員会教育長	石川公一 (平成14年度)	
	大分県教育委員会教育長	深田秀男 (平成15年度)	
	大分県教育庁文化課課長	岩男康治 (平成14年度)	
	同 課長	今永一成 (平成15年度)	
	同 参事兼課長補佐	麻生裕治 (平成14・15年度)	
	同 参事兼課長補佐	清水宗昭 (平成14・15年度)	
	同 担当主幹	高橋信武 (平成14年度)	
	同 担当主幹	栗田勝弘 (平成15年度)	
	調査員	同 副主幹	後藤一重 (平成14年度)
		同 副主幹	甲斐寿義 (平成14・15年度 調査担当)
同 主査		槇島隆二 (平成14年度)	
同 主査		井川康成 (平成14年度)	
調査委員	同 嘱託	安井由加梨 (平成15年度)	
	田中 良之 (九州大学大学院教授)		

第2章 遺跡の立地と環境

1、地理的環境

北友田横穴墓群の所在する日田市は、九州のほぼ中央、大分県西部に位置する。県内でも有数の商業・観光都市であり、県西部地域の政治・経済の中心でもある。市域は、標高120m～200m前後の阿蘇IV火砕流堆積面が筑後川水系により開析される過程で形成された盆地であり、中心部には標高が約65m～100m前後の筑後川水系が形成した沖積地が広がる。その周囲には、北に最高位の地形となる一尺八寸斜面、北部と南部には玖珠盆地南方の猪牟田カルデラから噴出した火砕流で形成された耶馬溪火砕流台地面が展開する。これらの山々に源を持つ大小70あまりの河川は盆地中心部で集合し、筑後川（三隅川）となり筑後平野へと続く。日田地方は古代より豊後の領域にあったが、この筑後川を媒体とした交流が盛んなことから北部・西部九州とのつながりが強く、また、古来より筑前・筑後・豊前・豊後に至る交通の要衝であり、江戸時代は幕府の直轄地である天領となるなど、その地理的・歴史的環境が独自の気風と文化を生み現在に至っている。気候はいわゆる内陸山地型であるが、内陸盆地という独特の地形から日中の気温差が大きく、また、空気の移動が少ないことから、昼間気温が上昇し夜になると放射冷却が進み冷え込むため、夏の暑さと冬の寒さは独特である。



1	北友田横穴墓群	5	天満1・2号墳	9	片山遺跡	13	三郎丸遺跡	17	徳瀬遺跡
2	吹上遺跡	6	尾部田遺跡	10	友田坂本遺跡	14	三郎丸古墳	18	ガランドヤ古墳
3	小迫辻原遺跡	7	小迫横穴墓	11	大内田遺跡	15	星隈横穴墓群	19	吹上横穴墓群
4	朝日宮ノ原遺跡	8	小迫古墳	12	穴原遺跡	16	萩鶴遺跡	20	日隈古墳

第1図 北友田横穴墓群周辺の遺跡

2、歴史的環境

日田盆地の歴史は古く、旧石器時代まで遡る。以後、現在に至るまで通称「原（はる）」と呼ばれる台地上や花月川中流域等の沖積地の微高地に数多くの遺跡が存在する。北友田横穴墓群の所在する花月川右岸の台地上にも吹上遺跡（註1）をはじめ小迫辻原遺跡（註2）、朝日宮ノ原遺跡（註3）など重要な遺跡が存在する。ここではこの花月川右岸の北部台地周辺に展開する古墳時代前後の遺跡について略述する。

まず、弥生時代であるが、盆地全体をみると前期末頃から集落の大半が台地の縁辺部に集中して分布するようになる。この北部台地でも、吹上原台地では、弥生時代中期から古墳時代のはじめの遺跡であり日田盆地の拠点集落と考えられている吹上遺跡、辻原台地では弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の環濠集落である小迫辻原遺跡や弥生時代後期～古墳時代初頭の墳墓群である草場第二遺跡、弥生時代後期後半の本村遺跡などが出現する。また、朝日ヶ丘には弥生時代後期終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である尾部田遺跡（註4）が、宮原台地では弥生時代中期～後期にかけての集落遺跡である朝日宮ノ原遺跡の存在が知られる。次に古墳時代であるが、この時代は律令期の枠組みが成立する時代であり、6世紀には日田地域に「比多国造」が設定されたとみられ、盆地全体がひとつの政治的領域としてみなされていたことが推定されている（註5）。このような領域が形成される過程でその中心であったろうと推定される「豪族居館」が小迫辻原遺跡に出現する。この遺跡においては、弥生時代後期の環濠集落から「豪族居館」の出現という一連の動きが看取でき、「ムラ」から「クニ」へと発展する過程を垣間見ることができる。また、花月川流域の沖積地の荻鶴遺跡では鍛冶遺構が確認される（註6）など、沖積地においても微高地では開発が開始されたことが窺える。古墳時代後期になると、宮原台地には天満古墳群（註7）、花月川右岸の堤防脇には古墳時代後期の複室構造の横穴式石室である三郎丸古墳（註8）が、また台地の斜面に北友田横穴墓群をはじめ小迫横穴墓群（註9）や吹上横穴墓群（註10）、独立山丘である星隈山の東側崖面には星隈横穴墓群（註11）などが登場するなど盛んに墳墓が築造されるが、そこには前方後円墳を中心とした墳墓の階級的構造の存在が認められる。このことは律令期における郷単位のまとまりがこの時期に形成されたことを示しており、のちの律令期における巨理郷がこの一帯にあたる。なお、天満古墳群については、比多国造の墓の最有力候補と考えられている。7世紀後半には日田評が設定され、日下部氏が評督・評造に任命されたであろうことが「久須評」木簡の存在から類推される（註12）。その後、豊後国に属することになり、律令期には日田郡となる。『延喜式』には、鞆編・石井・在田・巨理・夜開の五郷がこの日田郡内に存在したことが知られている。この時期において、小迫辻原遺跡では「大領」と読める墨書土器を出土した竪穴住居やコの字状に配列された建物群が発見され、郡司クラスの館、あるいはその関連施設の存在が推定されている。この遺跡では中世の武士の屋敷と見られる遺構も確認されている。なお中世の遺跡としては朝日宮ノ原遺跡で木棺墓などの墓地が検出されている。

以上、北友田横穴墓群が存在する北部台地周辺の遺跡について古墳時代の前後を中心に略説したが、この一帯は弥生時代後期の環濠集落から始まり、古墳時代になると「豪族居館」が登場し、後期には比多国造墓の最有力候補の一つである天満古墳群の出現、律令期においては郡衙関連施設が登場するなど、日田盆地において古墳時代前後の最も中心的勢力が展開した場所のひとつであったことを窺い知ることができる。

（註1）村上久和『吹上遺跡Ⅰ・Ⅱ』日田市教育委員会 1980・1981他

（註2）田中裕介「小迫辻原遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報Ⅴ』1988他

（註3）土居和幸「朝日宮原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』日田市教育委員会1986・1987

（註4）若杉竜太「後迫遺跡」『日田市埋蔵文化財調査報告書第35集』日田市教育委員会2002

（註5）田中裕介「上野第1遺跡」『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』大分県教育委員会2001

（註6）土居和幸

（註7）吉田博嗣「天満古墳群」『平成9年度額埋蔵文化財年報』日田市教育委員会1999

（註8） 註6に同じ

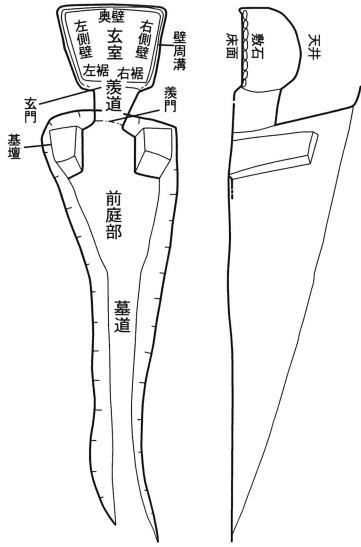
（註9）小柳和弘「小迫墳墓群」『九州横断自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』大分県教育委員会1995

（註10）土居和幸・永田裕久「吹上遺跡－6次調査の概要」日田市教育委員会1995他

（註11） 註6に同じ

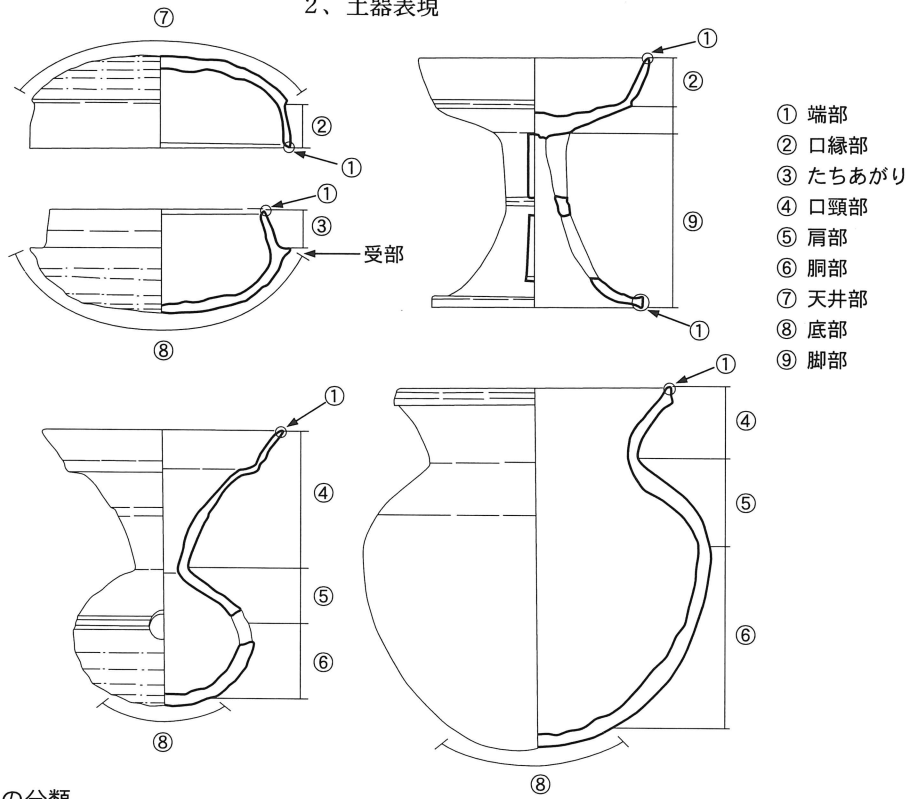
（註12）西別府元日「古代」『日田市史』日田市1990

1、横穴墓の名称



1、2は「上ノ原横穴墓」より転載

2、土器表現



- ① 端部
- ② 口縁部
- ③ たちあがり
- ④ 口頸部
- ⑤ 肩部
- ⑥ 胴部
- ⑦ 天井部
- ⑧ 底部
- ⑨ 脚部

3、横穴墓平面形の種類

平面形の種類

	方 形				妻入り(長方形)			平入り(長方形)			小形
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
1	正方形	隅丸 方形	不整 隅丸 方形	不整 方形	長方形	隅丸 長方形	不整 長方形	長方形	隅丸 長方形	不整 長方形	巾着形
2	胴張り 方形	胴張り 隅丸 方形	円形		胴張り 長方形	胴張り 隅丸 長方形	楕円形	胴張り 長方形	胴張り 隅丸 長方形	楕円形	方形
3	逆台形	隅丸 逆台形			羽子板形	隅丸 羽子板形		逆台形	隅丸 逆台形		長方形
4	ハチ形				ハチ形						

天井形の種類

	寄棟形	鴨居形	切妻形	四角錐形	尖頭 アーチ形	平 形	アーチ形	ドーム形
	a	b	c	d	e	f	g	h
横断								
縦断								
上面								

「九州の横穴墓と地下式横穴墓」より転載

4、須恵器実年代比較表

実年代(西暦)	500年		550年		600年		650年	
田辺編年	TK47	MT15	TK10	MT85	TK43	TK209	TK217	TK46
小田編年	I	II	III A		III-B期	IV期	V期	

高橋・小林1990「九州須恵器研究の課題」古代文化第42巻第4号参照

第2図 各部位の名称及び横穴墓の分類表

第3章 北友田横穴墓群

第1節 報告にあたって

1、横穴墓等の名称

横穴墓の名称については、明治期に吉見百穴を巡る坪井正五郎氏の穴居説と白井光太郎氏の墓穴説の論争に始まるが、現在では有力家族墓の一形態として位置づけられている。九州においても、1974（昭和49年）の福岡県行橋市の竹並遺跡の調査後、急激な進展を見せており、その歴史的意義と文化的評価が高まってきた。今回調査した北友田横穴墓群に見られる横穴の形態は、明らかに埋葬施設であることから「横穴」と呼称するものではなく、「横穴墓」の名称を用いることとする。

つづいて、横穴墓各部の名称についてであるが、上ノ原横穴墓群で用いられた名称を踏襲するが、墓道については、今回確認できなかったため、羨門前方部の掘削部については前庭部で統一することとする。玄室平面形態・天井形・屍床については、基本的には池邊千太郎氏の分類に従って分類する（註1）。

玄室平面形態

- 1、方形・・玄室の奥行と幅がほぼ同じである。
- 2、平入り長方形・・玄室の奥行よりも幅が広いもの
- 3、妻入り長方形・・玄室の奥行が幅よりも長い
- 4、小形・・玄室と羨道の境もなく埋葬する空間を持たないもの

天井形

- 1、寄棟形
- 2、鴨居形
- 3、切妻形
- 4、四角錐方形
- 5、尖頭形
- 6、平方
- 7、アーチ形
- 8、平天井形
- 9、ドーム形

屍床

- I類 奥壁に平行して奥壁に接して造られるもの
- II類 奥壁に直行して玄室の片側に造られるもの
- III類 奥壁に直行して玄室の両側に造られるもの
- IV類 玄室を取り巻くようにコ字形に造られるもの

2、発掘調査の方法

本報告書で報告する北友田横穴墓は、基本的には開口しているものが大半を占めており、前底部についても後世の攪乱や削平のため、プライマリーな状態で検出できたものはわずかに1基だけであった。したがって、この1基については、前庭部の調査→玄室内の調査・実測という手順で調査を実施したが、開口したものについては前庭部の調査→玄室内の実測という順に調査した。前庭部については、墓前祭祀や追葬の痕跡が残されている可能性があるため、実測できるものについては縦方向に断面を残し、土層観察を行うことを原則とした。なお、遺物については、原位置で取り上げることを基本にし、玄室内の遺物については、床面の覆土や盗掘による攪乱跡については土嚢袋に採集し篩いにかけて遺物の検出を行った。

なお、埋葬人骨については埋葬順位、年齢性別を明らかにし、被葬者の性格や集団構成などを検討するために九州大学基層構造学講座の田中良之教授に取り上げ・鑑定を依頼した。

3、横穴墓番号の変更と各部の名称について

北友田横穴墓群の調査については、1993（平成5年）に調査が実施されており、5号まで横穴墓のNoが付けられている。今回の調査区は、前回調査区の西方にあたり距離が離れていることから、前回の調査からの通し番号を付けるには無理が生じるため、調査順に仮ナンバーを付けて実測・遺物の取り上げを行った。しかし、調査が、掘削工事や吹き付け工事等で現状維持できない横穴墓が対象であり、また、調査が2年にわたり番号が重複する等の状況が生じたため、報告に当たっては、番号を整理するために調査区ごとに通し番号をつけることにした。まず、調査区については、平成14年度調査区を片山第1地区、平成15年度調査区を片山第2地区とし、遺構番号は第1地区は調査区で、第2地区については支群が認められることからさらに支群ごとに番号をつけることにした。なお、横穴墓の名称及び土器表現については、第2図の通りである。

第1表 横穴墓番号変更表

片山第1地区		仮No	新No
仮No	新No	3号	第1支群3号
1号	1号	4号	第1支群4号
2号	2号	5号	第1支群5号
3号	3号	6号	第2支群1号
4号	4号	7号	第2支群2号
5号	第4支群5号	8号	第4支群1号
片山第2地区		9号	第4支群2号
仮No	新No	10号	第4支群3号
1号	第1支群1号	11号	第4支群4号
2号	第1支群2号	12号	第3支群1号

（註1）池邊千太郎 2001「豊後地域における横穴墓の様相」『九州の横穴墓と地下式横穴墓 第1分冊』九州前方後円墳研究会

第2節 発掘調査の成果

1、調査経過と概要

北友田横穴墓群は、日田市北部を流れる花月川右岸の吹上原台地から朝日台地の南斜面に約1.5kmにわたりいくつかのグループで構成される。この横穴墓群については、昭和48年(1973)と昭和52年(1977)に急傾斜地対策事業に伴う発掘調査が実施され、横穴墓20基に須恵器、玉類、人骨が検出され、平成5年にも大分県教育委員会が急傾斜地対策事業に伴い調査を実施し、6基の横穴墓と刀子、鉄鎌を検出している(註1)。

今回の調査対象となった横穴墓は北友田横穴墓群の西端に位置するもので、朝日台地の南端部が舌状にせり出す南側斜面にあたる。この斜面にはテラス状の地形が残り開口した横穴墓が並ぶ。台地の先端部はほぼ垂直な斜面となるが、これは宅地造成の際に台地先端部が切り取られたもので、この崖面にも横穴墓の存在が確認できる。本調査はこれらの横穴墓の内、急傾斜地崩壊対策工事に伴う掘削工事や吹き付け工事により現状維持が不可能なものについて平成14・15年に実施した。

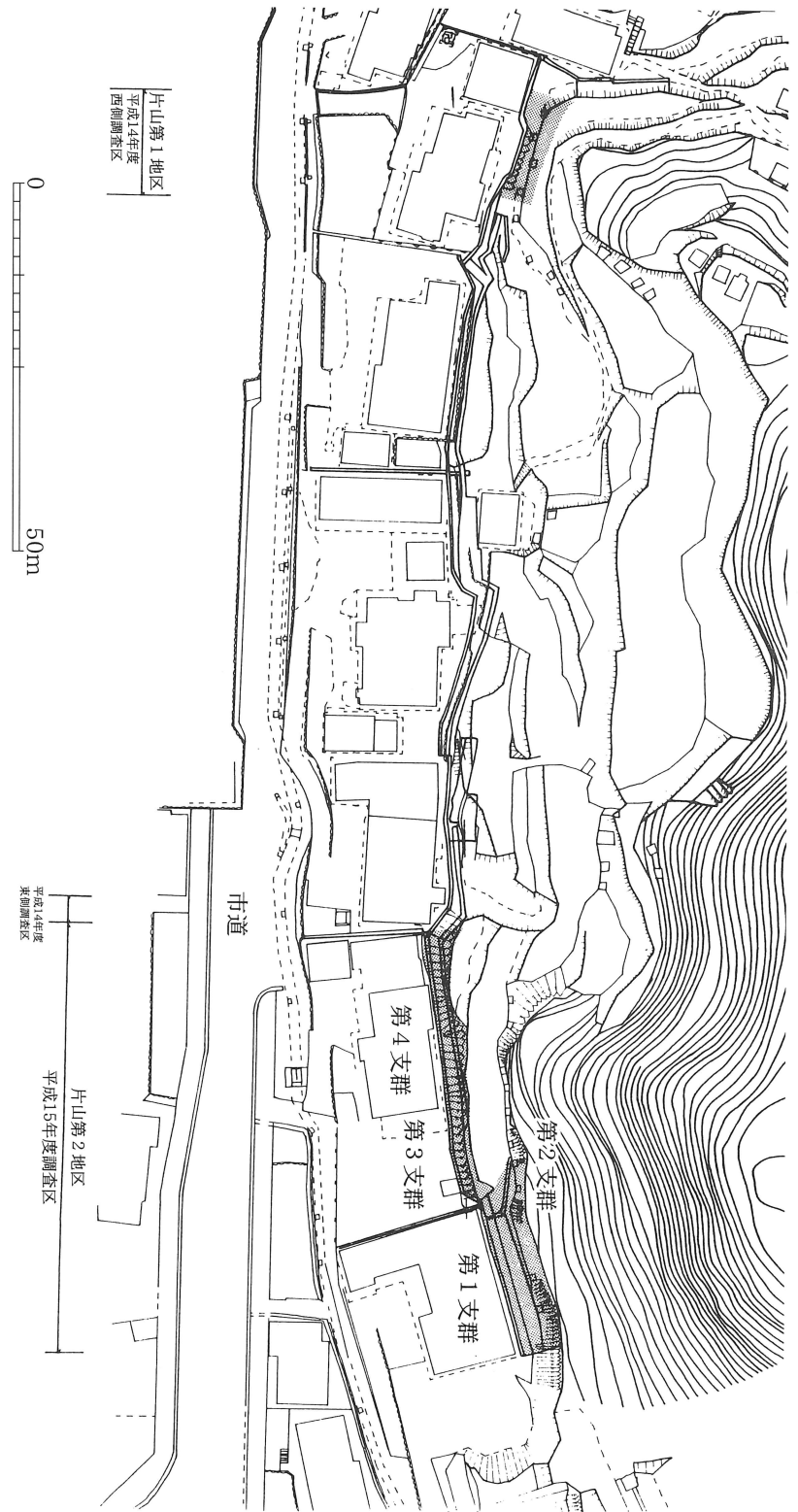
平成14年度の本調査(片山第1地区)は、2回にわたって実施した。1回目の調査は平成14年4月26日～平成14年5月8日に実施した。分布調査の際に確認した、開口した5基の横穴墓の調査で、すでに前庭部は宅地造成の際に消滅し、横穴墓も倉庫等で利用されていたため、玄室内の実測および地形測量を実施して終了した。2回目の調査は、工事予定地東端で掘削工事中に小型の横穴墓1基が発見されたため平成15年2

月26日～平成15年2月28日に緊急調査を実施した。この横穴墓は未開口の横穴墓であったが、閉塞石や羨門は調査区外へ続き、玄室の側壁も一部削られた状態であったので、玄室内の調査のみを実施し終了した。

平成15年度の調査(片山第2地区)は、前年度工事で小型の横穴墓が確認されたことから、工事予定地内に埋没した横穴墓が存在する可能性が高く、また、同年11月に確認調査を実施した結果、開口した横穴墓の前庭部でも遺物を確認したため、発掘調査を実施することとなった。調査は、平成15年12月18日～平成16年2月27日の間実施した。

まず、東端の開口した5基の横穴墓から調査を開始し、西端の宅地裏側斜面の調査へと続いた。その結果、未開口の横穴墓1基を含む12基の横穴墓を確認し、前庭部や玄室内から、人骨や古墳時代後期～中世にかけての遺物を検出した。

(註1) 玉永光洋『北友田横穴墓』大分県教育委員会1993



第3図 北友田横穴墓群調査区周辺の地形(1/1000)

第3節 片山第1地区の調査結果（平成14年度）

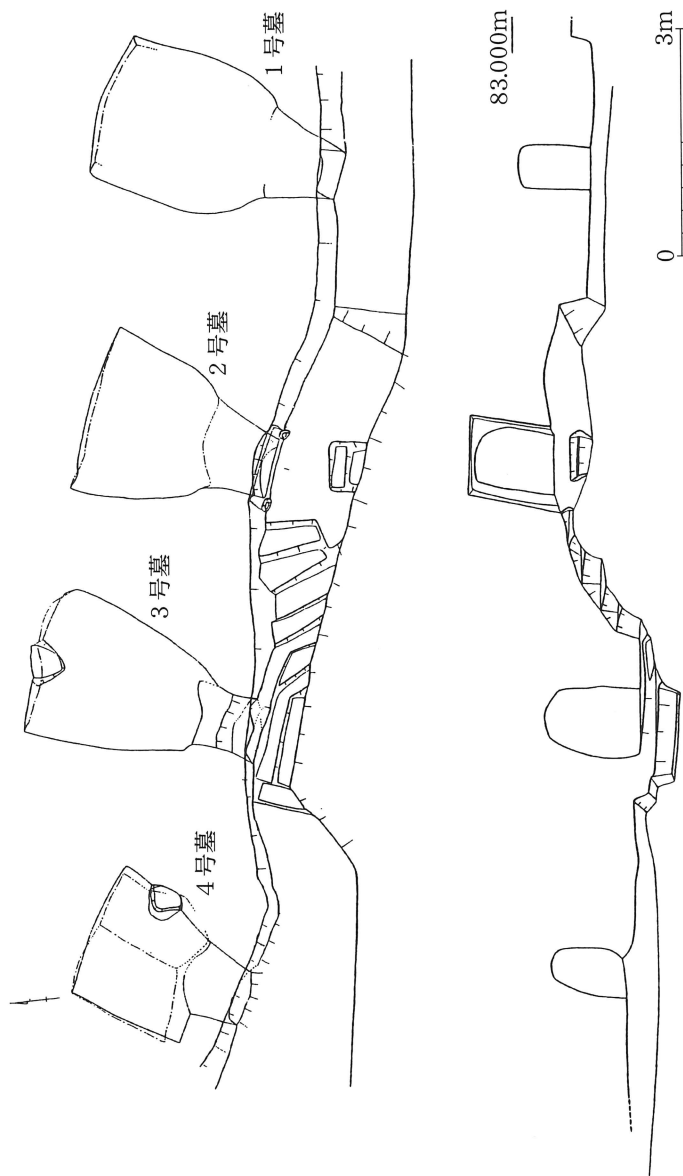
西側調査区 平成14年4月26日～平成14年5月8日

東側調査区 平成15年2月26日～平成15年2月28日

1、立地・調査前の状況

片山第1地区は、朝日台地の南西部、標高約81m～85mに位置する。台地南端部が花月川に向かって舌状に伸び、最も花月川に接近する南側斜面の西側部分にあたる。その西には小規模の解析谷が存在し、台地斜面が南斜面から徐々に北西斜面へと変化する。この、南側斜面には2～3段のテラス状の地形が残り、それに続く斜面には、開口した横穴墓が10数基確認できる。このテラス状の地形は現在、畑地として、開口した横穴墓も倉庫等で利用されていた。

今回、片山第1地区の調査対象となった横穴墓は、これらの横穴墓の中で、標高が最下位に位置するもので、西側調査区については、宅地造成のために掘削された斜面に存在する4基の横穴墓、東川調査区は工事中に発見された東端の小型横穴墓1基である。第1回目の調査対象となった西側調査区の4基については、すでに開口し、倉庫等で利用され、前庭部も宅地造成の際に掘削され消滅していた。第2回目の調査対象となった小型の横穴墓は、西側調査区より約100mほどの東に位置する。標高は、約83mで、すでに掘削されたほぼ垂直な崖面にあたる。この横穴墓は、主軸をほぼ東西方向にとり、前庭部側壁に掘り込まれているため、開口しておらず、羨道部および閉塞石は調査区外へと続くが、遺物は確認できなかった。



第4図 北友田横穴墓群西側調査区各横穴墓配置図（1/100）

2、調査の成果

(1) 西側調査区 (第4図)

4基の横穴墓を確認した。いずれも開口しており南側斜面から掘り込まれる。東から1号墓～4号墓の順に2～3m間隔で並ぶ。主軸は1号墓が主軸はN-23°-E、2号墓がN-24°-E、3号墓がN-22°-E、4号墓はN-29°-Eにとり、標高は1号墓が約82.5m、2号墓は最高位に位置し標高83m、3号墓は最下位で標高が81.6m、4号墓は約82mである。

1号墓 (第5図)

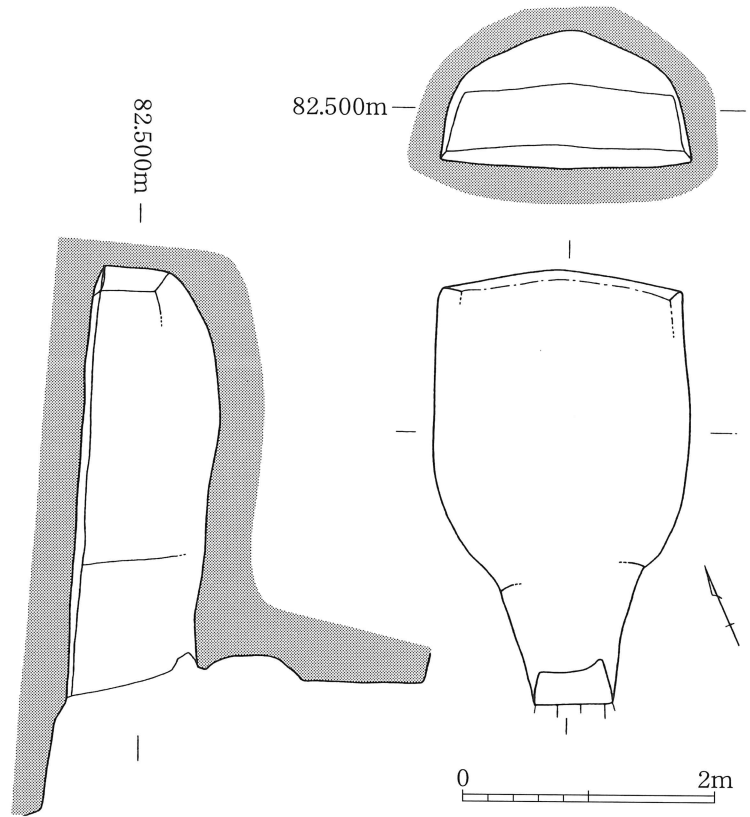
①前庭部

幅1mほどの道路状のテラスが続くが、これは後世のものであり、前庭部及び羨門はすでに宅地造成の際に掘削されており、旧状をとどめていない。

②羨道、玄室

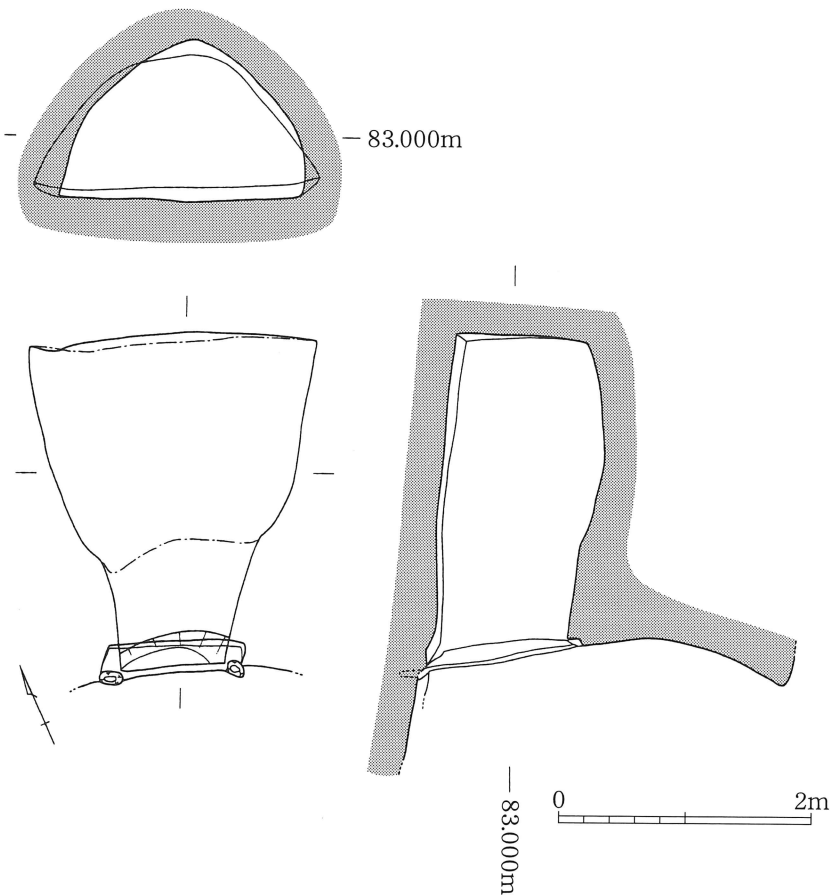
規模・構造

羨道は羨門付近がかなり改変され旧状を



第5図 北友田横穴墓群1号墓実測図(1/60)

とどめていないが、立面は台形、平面形はバチ形を呈していたと思われる。現状で長さは約1.1m、玄門幅は1.1m、玄門高は0.98mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ2.35m、高さ1.1mを測るが、玄室と羨道の境についてはわずかに稜が残るくらいで不明確である。ほぼ垂直に立ち上がる奥壁を有し、奥壁手前で最大幅1.92mを測る隅丸羽子板形を呈していたと思われる。床面はフラットで屍床は有さない。天井部はアーチ型である。

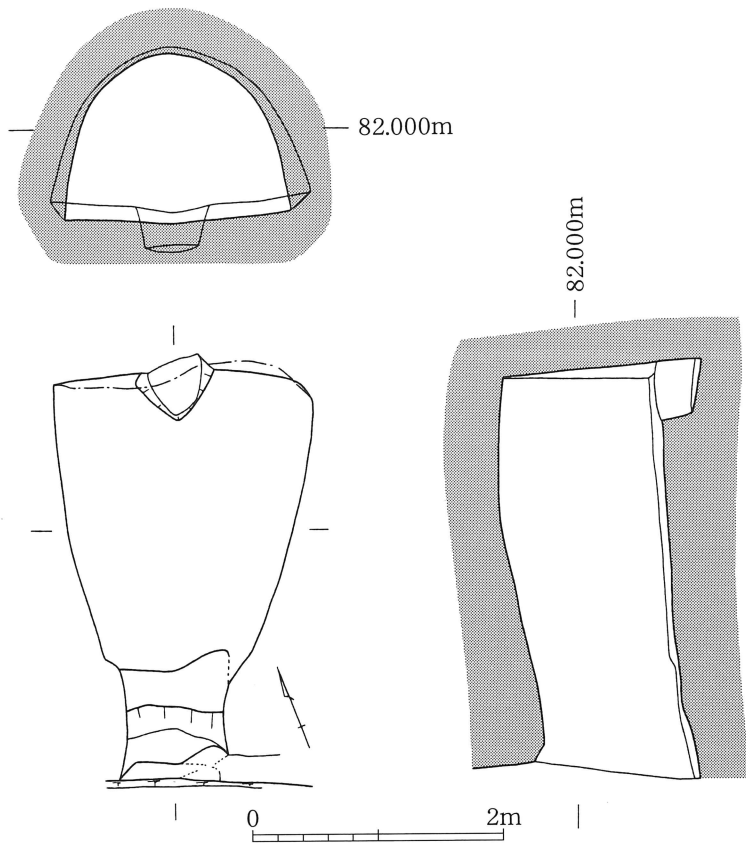


第6図 北友田横穴墓群2号墓実測図(1/60)

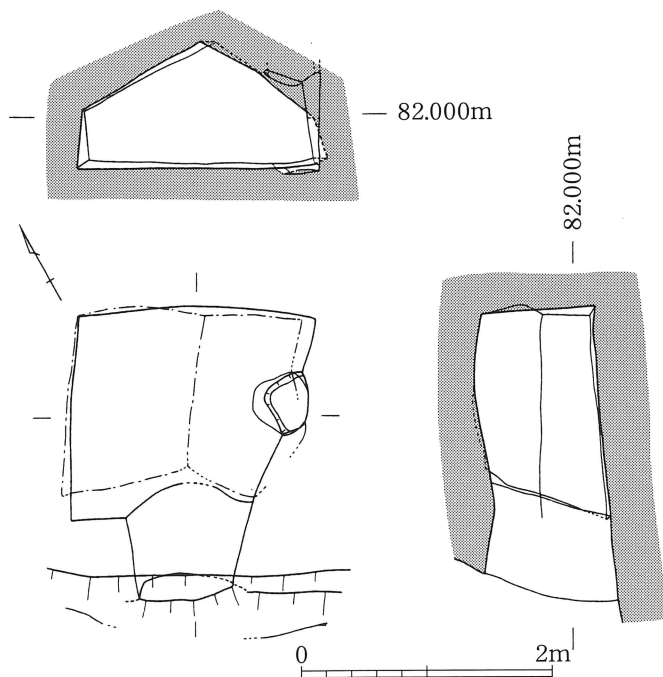
2号墓 (第6図)

①前庭部

1号墓から幅1mほどの道路状のテラスが続くが、階段状に削られるなど、1号墓同様に前庭部及び羨門もすでに宅地造成の際に掘削され旧状をとどめていない。羨門には飾縁状の堀込みが認められるが、これも



第7図 北友田横穴墓群3号墓実測図(1/60)



第8図 北友田横穴墓群4号墓実測図(1/60)

本来のものではなく、床面に柱穴が存在していることから、倉庫として使用する際に扉を付けるために掘り込まれたものであろう。

②羨道、玄室

規模・構造

1号墓同様に羨道は羨門付近がかなり改変され旧状をとどめていないが、立面は台形、平面形はバチ形を呈していたと思われる。現状で長さは約1.0m、玄門幅は1.2m、玄門高は1.1mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ1.65m、高さは玄室中央付近で約1.2mを測る。玄室と羨道の境については1号墓よりも更に不明確である。ほぼ垂直に立ち上がる奥壁を有し、奥壁手前で最大幅2.3mを測る。隅丸羽子板形を呈していたと思われる、床面はフラットで屍床は有さない。天井部はアーチ型である

3号墓(第7図)

①前庭部

2号墓階段状のテラスが続き、3号墓から階段状のテラスが下へと続く。この階段状のテラスは倉庫として使用されてからのものであり、1号墓同様に前庭部及び羨門もすでに宅地造成の際に掘削され旧状をとどめていない。

②羨道、玄室

規模・構造

羨門付近はかなり掘削されており、旧状をとどめないが、立面は台形、平面形は方形バチ形を呈していたと思われる。現状で長さは約0.9m、玄門幅は0.9m、玄門高は1.1mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ2.2m、高さは玄室中央付近で約1.4mを測る。玄室と羨道の境については不明確である。ほぼ垂直に立ち上がる奥壁を有し、奥壁手前で最大幅2.1mを測る隅丸羽子板形を呈す。奥壁の壁際には深さ0.4mの角錐状の掘込みが認められるが、後世のものであろう。床面はフラットで屍床は有さない。天井部はアーチ型である。

4号墓（第9図）

①前庭部

他と同様に幅1mほどの道路状のテラスが続くが、前庭部及び羨門もすでに宅地造成の際に掘削され旧状をとどめていない。

②羨道、玄室

規模・構造

1号墓同様に羨道は羨門付近がかなり改変され旧状をとどめていないが、立面は台形、平面形はバチ形を呈していたと思われる。現状で長さは約0.7m、玄門幅は約1.0m、玄門高は1.0mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ1.4m、高さは玄室中央やや奥壁より付近で約1.0mを測る。玄室と羨道の境については奥壁に向かって左側は明確である。ほぼ垂直に立ちあがる奥壁を有し、奥壁手前で最大幅1.3mを測る。隅丸羽子板形を呈していたと思われ、床面はフラットで屍床は有さない。天井部は切妻形であるが、平面形も天井もかなり歪な形状であることから本来隅丸羽子板形であった玄室を拡張した可能性が考えられる。

(2) 東側調査区

西側調査区で検出した小型の横穴墓は、第1回目の調査区より約100mほどの東に位置する。標高は、約83mで、すでに掘削されたほぼ垂直な崖面にあたる。この横穴墓は、主軸をほぼ東西方向にとり、前庭部側壁に掘り込まれているため、開口しておらず、羨道部および閉塞石は調査区外へ続く。

第4支群5号横穴墓（片山第2地区）

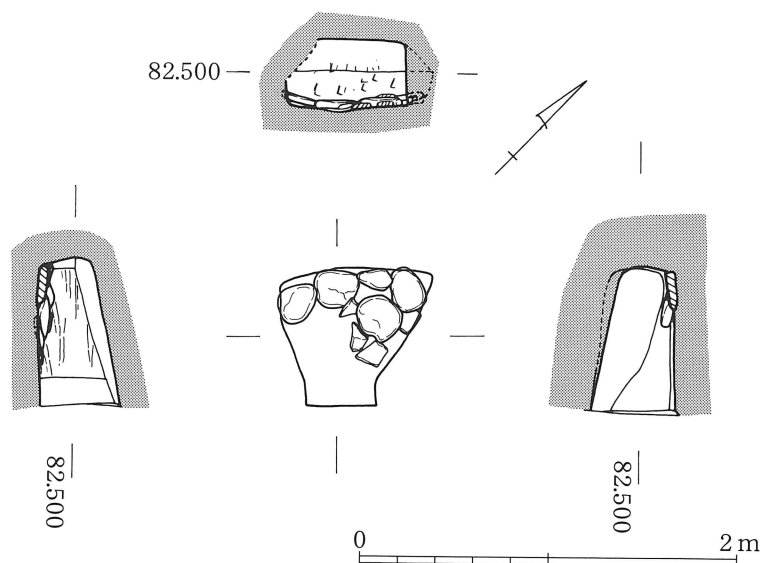
①前庭部（第10図）

前庭部側壁に掘り込まれており、側壁が調査区外へ続くことから詳細は不明である。

②羨道、玄室（第10図）

規模・構造

羨道部及び閉塞石は調査区外へと続いているため羨道部の形状は不明であるが、平面形は巾着形を呈すと思われる。玄室内には円礫が敷かれ、玄室の長さは約0.8m、高さは玄門付近が最大で0.42mを測り、主軸はN-45°-Wにとる。天井部は平形である。他の横穴墓とは違い、前庭部側壁に掘り込まれているのが特徴である。遺物は出土しなかった。



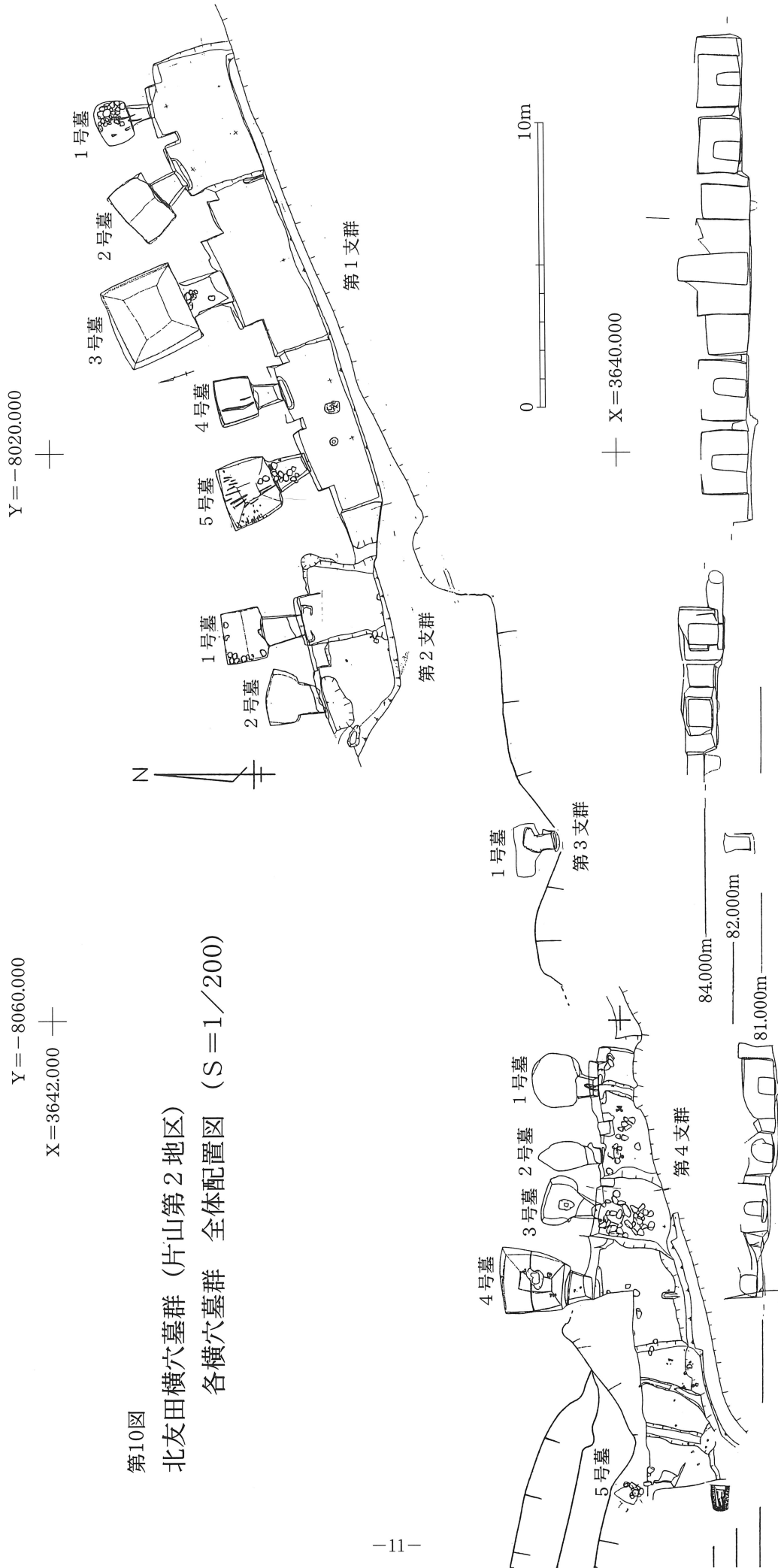
第9図 北友田横穴墓群5号墓実測図（1/40）

Y = -8060.000
 X = 3642.000

第10图

北友田横穴墓群 (片山第2地区)

各横穴墓群 全体配置图 (S=1/200)



第4節 片山第2地区の調査結果 (平成15年度)

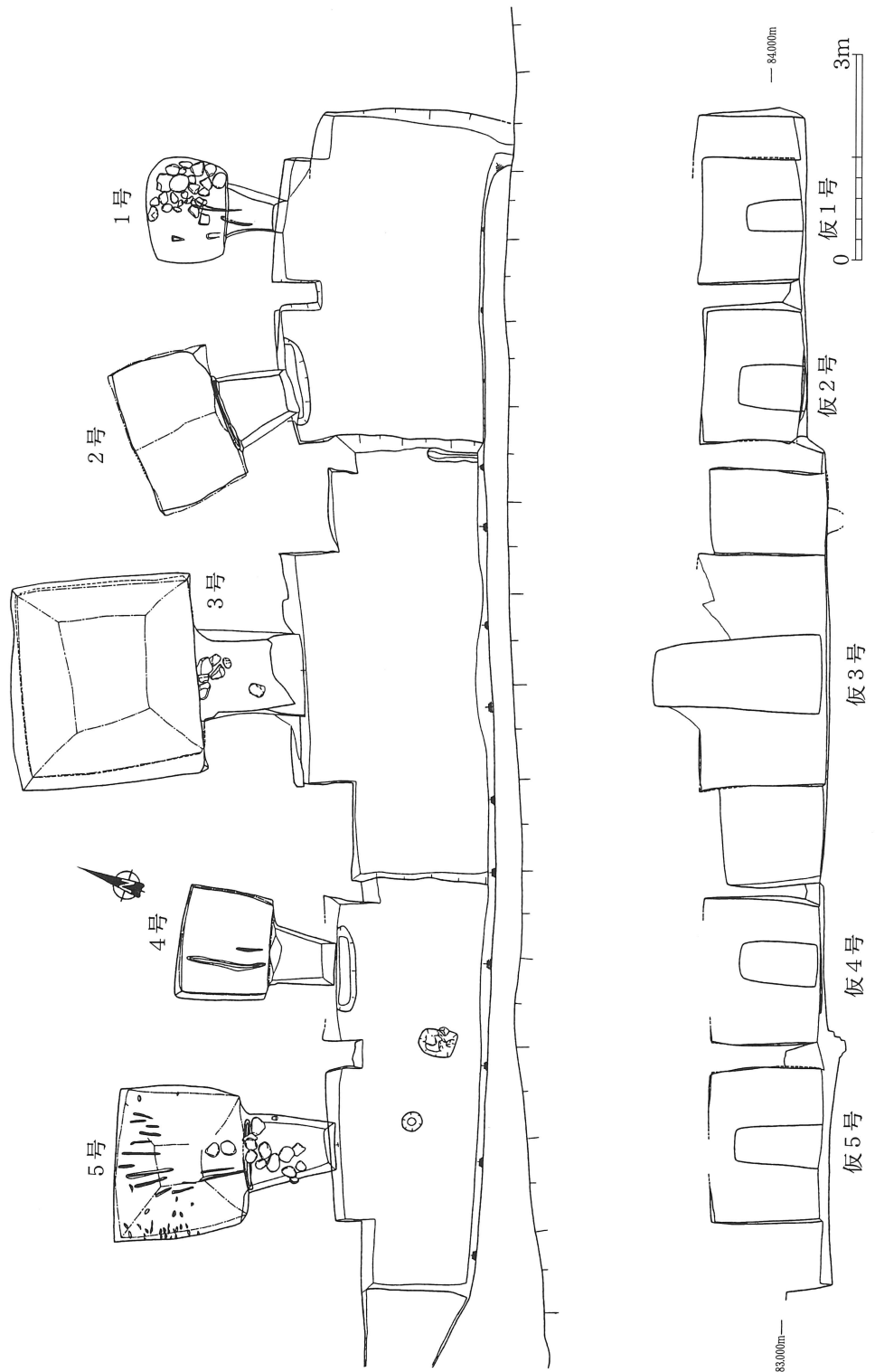
平成15年12月18日～平成16年2月27日

1、立地・調査前の状況

片山第2地区は、第1地区の延長部分で舌状先端部南側斜面の東側部分にあたる。その東は斜面が大きく北東へ入り込み、第1地区と同様に、この南側斜面には2～3段のテラス状の地形が残り、それに続く斜面には、開口した横穴墓が10数基確認できる。このテラス状の地形は現在、畑地として、開口した横穴墓も倉庫等で利用されていた。

片山第2地区の調査対象となった横穴墓は、これらの横穴墓の中で、工事で掘削される1段目の横穴墓およびテラス部分、掘削や吹き付け工事で現状維持が困難な2段目の横穴墓及びテラス部分である。まず2段目については、テラス部分は畑地として使用され、横穴墓はすでに開口し倉庫等で利用されていた。この横穴墓については、そのテラスの共有から1ないし5基程度支群を形成している様子が窺えた。最下位に位置する横穴墓は、調査前はいずれも崩落した土砂により斜面が埋没していたため、肉眼では確認できなかったが、調査区西端でわずかに残存したテラスを確認したためその存在が明らかとなった。

これらの横穴墓も2段目の横穴墓群同様に支群を形成していた。調査中は、調査を実施した順に仮ナンバーを設定し遺物の取り上げや実測を実施したが、報告にあたっては支群ごとにグルーピングし、2段目東側から第1群(5基)、第2支群(2基)、1段目東側から第3支群(1基)第4支群(4基)と設定した。

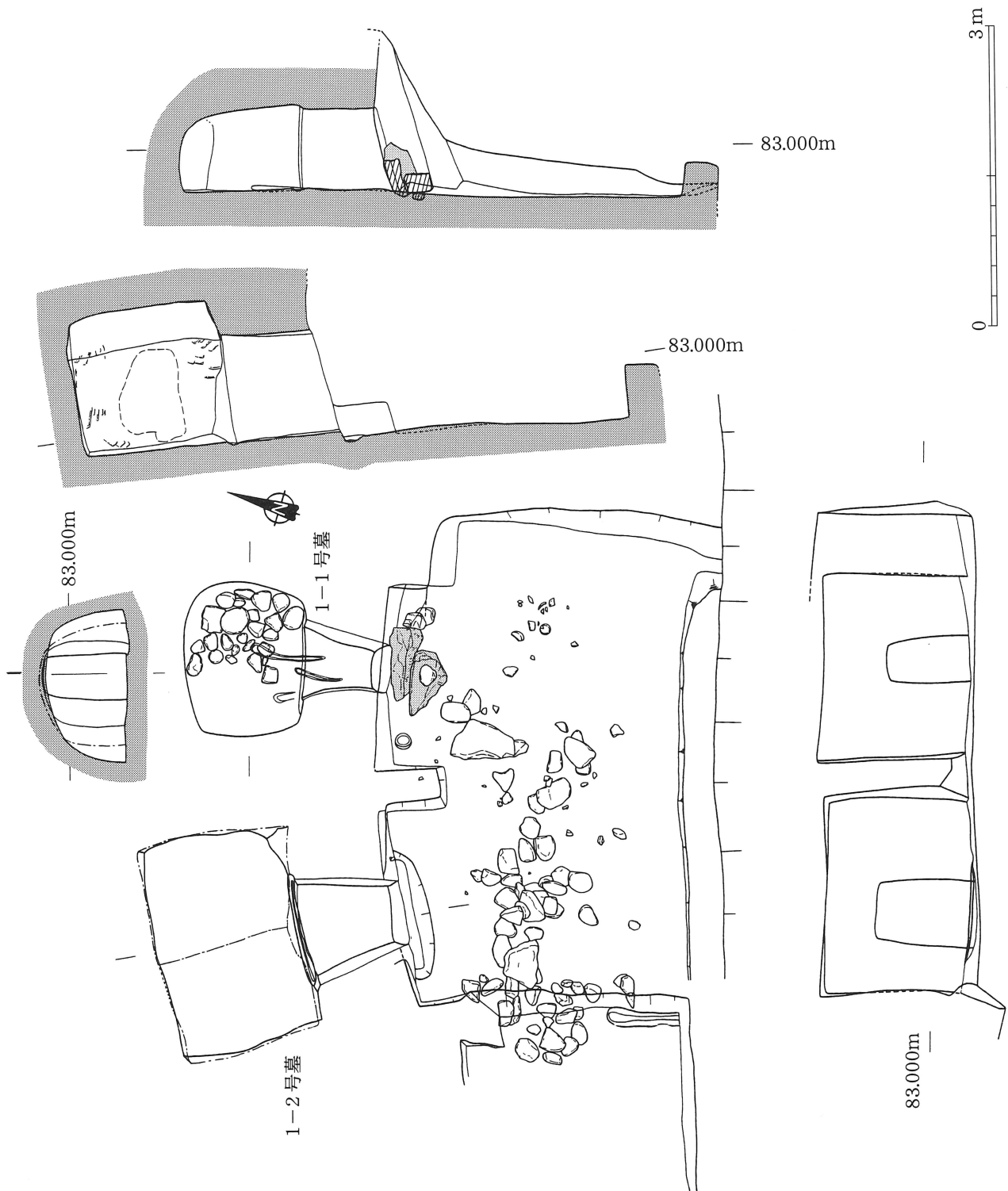


第11図 北友田横穴墓群第1支群遺構配置図 (1/100)

2、調査の成果

(1) 第1支群 (第11図)

調査区東側2段目のテラス上に展開するいずれも開口した5基の横穴墓で構成される。東から連続して1号墓～5号墓の順に並ぶ。主軸は1号墓がN-17°-W、2号墓がN-27°-W、3号墓がN-19°-W、4号墓はN-11°-W、5号墓はN-19°-Wにとる。標高は1号墓が約82.5m、2号墓は最高位に位置し標高83m、3号墓は最下位で標高が81.6m、4号墓は約82m、5号墓が約86mである。いずれも飾縁を有しており、第1支群では最大規模の3号墓を中心に左右に2基ずつ横穴墓が配置される。テラスは現状で全長約17m、幅約5mで、平面形は方形、立面は削平が激しく側壁高は不明であるが逆台形を呈していたものと思われる。前庭部については、段差との関係から1・2号及び4・5号はそれぞれ共有しており、3号だけが単独し



第12図 北友田横穴墓群第1支群1・2号墓実測図 (1/60)

た前庭部を有している状況が認められた。なお、遺物の出土状況であるが、表土下ではほぼ全域にわたって玄室内に敷いていた円礫を掻き出した状況が認められ、遺物はその下から出土している。これらの遺物については、一部をのぞいてほぼ散乱した状態であり、プライマリーな状況はほぼ認められなかった。

1号墓

①前庭部（第12図）

2号墓と共有する前庭部である。全長約4.5m、幅約2.4mを測る。2号との間にほとんど段差が認められず前庭部については明確に区切ることができないが、遺物等の分布から固有のスペースを保持していたと思われる。1号墓の羨門部にはわずかに飾縁の痕跡が残っており、現状から幅約1.9m、奥行0.6m、高さ約1.5mの飾縁が存在したことが予想される。羨門部は、ほぼ12°の角度で立ち上がり羨門を過ぎるとほぼ垂直になる。上部幅・底面幅共に約1.9m、高さ1.5mを測る。羨門の立面は縦長の方形で壁はほぼ中央に穿れており、羨門高は0.7m、幅は0.45mを測る。閉塞石は凝灰岩の1枚石であるが、上半部は取り除かれており前庭部で検出した。床面はほぼフラットである。

②羨道、玄室（第12図）

規模・構造

羨道の立面は台形、平面形はバチ形を呈しており、全長は約0.9m、玄門幅は1.2m、玄門高は1.2mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ1.8m、幅は奥壁付近で最大となり1.54m、高さは玄門付近が最大で約1.3mを測る。平面形は平入隅九方形で、天井部はアーチ型よりも平型に近い。玄室内には屍床は有せず、川原石の円礫を敷くが、左側壁側半分は取り除かれている。床面はほぼフラットである。

③出土遺物（第13図）

前庭部

玄室内に敷かれた円礫の一部が散乱するなど、攪乱された状況が認められたが、前庭部中央西側で坏類の一括埋置が、羨門部西側には二段重ねの坏身が認められるなど、部分的に墓前祭祀の状況が確認できた。出土した遺物であるが、1～13は須恵器、14～16は土師器である。須恵器であるが、1～7は坏蓋で、いずれも肩部や、端面内面には段差は認められないが、1・4・5・6にはヘラ削りが残り、3の天井部はカキ目仕上げである。1・2にはヘラ記号が認められる。8～12は坏身である。いずれも受け部は短く内傾して伸びるが、8・9の底部は丸みを帯び、10～12の底部は底部が平らになり、体部と底部の境が明確になる。13は大甕の胴部片である。内面には同心円の当て具痕が残り、外面は平行タタキ後、カキ目が施される。14・15は高坏の坏部と脚部である。坏部の胴部下面にはミガキが施され、脚部には明瞭な稜が認められる。これらの遺物の時期は出土した坏蓋にはヘラ削りの残るものが存在することから、6世紀後半・末～7世紀初頭（TK209段階）の範疇に納まるもので、他の遺物についても同様であろう。

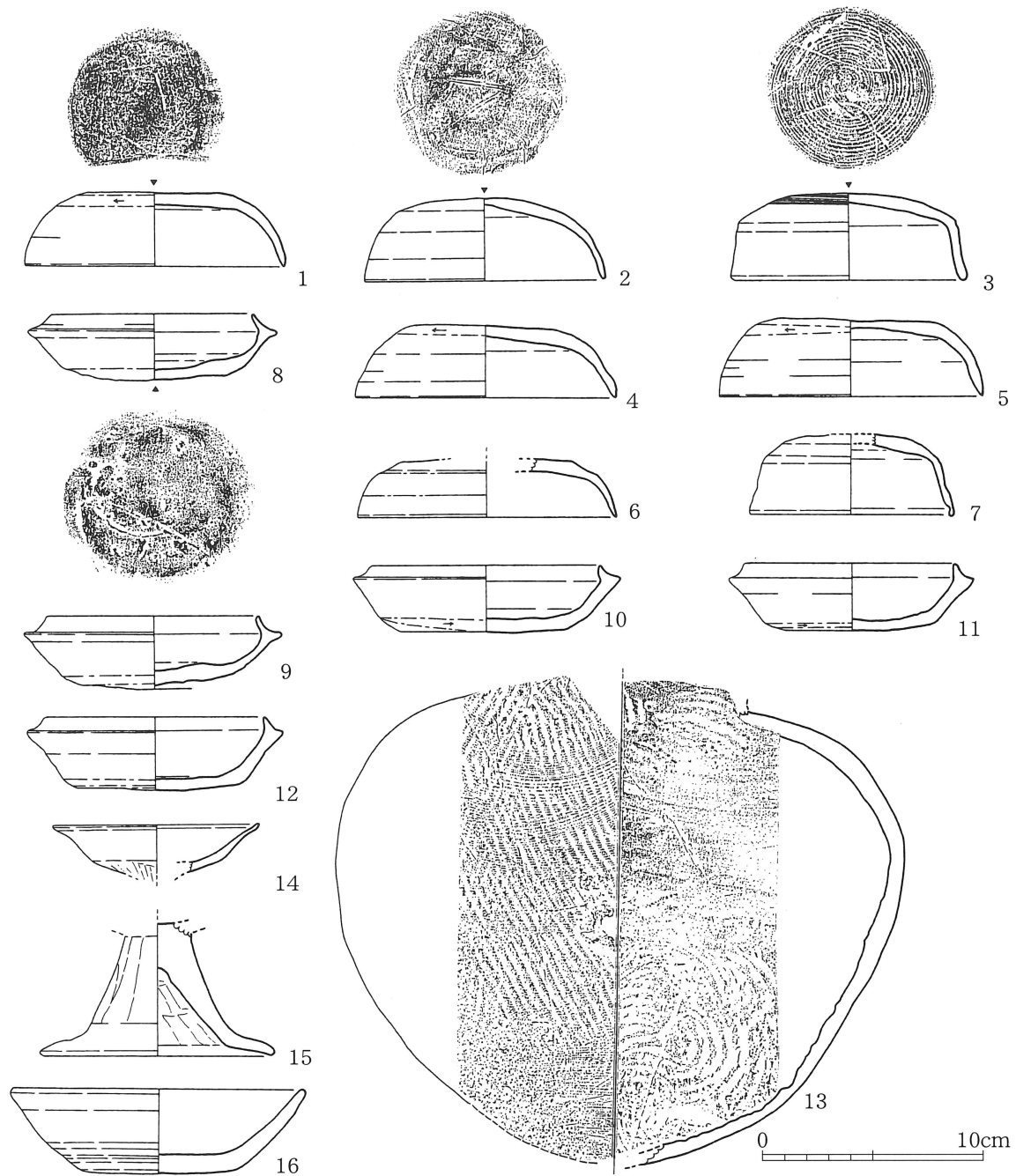
玄室内

16は、玄門付近で検出した土師質土器の坏である。開口していたため、土砂やごみが混入しており、プライマリーな出土状態ではないため、この横穴墓に伴う可能性は低いが、古墳時代以降、転用墓として再利用された際に埋置された可能性も残る。ヘラ切り離しであり、ミガキも認められないことから9世紀後半ごろのものであろう。

2号墓

①前庭部（第12図）

1号と共有する前庭部であり、1号との間にほとんど段差がないことから明確に区切ることが難しい。2号墓の飾縁も痕跡が確認されるだけであるが、現状から幅約2.1m、奥行0.8m、高さ約1.5mの飾縁が存在したことが予想される。羨門部は、ほぼ8°の角度で立ち上がり羨門を過ぎるとほぼ垂直になる。上部幅・底面幅共に約1.9m、高さ1.45mを測る。羨門の立面は縦長の台形で壁の中央やや左よりに穿れており、羨門高は0.95m、幅は0.7mを測る。閉塞石は存在せず、床面は玄室方向にやや下る。なお、遺物の出土状況であるが、表土下ではほぼ全域にわたって玄室内に敷いていた円礫を掻き出した状況が認められ、遺物はその下から出土している。これらの遺物については、一部をのぞいてほぼ散乱した状態であり、プライマリーな状況はほぼ認められなかった。



第13図 1-1号墓出土遺物実測図(1/3)

②羨道、玄室(第14図)

規模・構造

羨道の立面は台形、平面形はバチ形を呈しており、全長約1.1m、玄門幅1.2m、玄門高1.1mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ1.4m、幅は奥壁付近で最大となり約2.2m、高さは奥壁付近が最大で約1.45mを測る。平面形は平入隅丸逆台形で、天井部は切妻型、玄室内には屍床は有せず、川原石の円礫を敷くが、右側壁側半分の大半分は取り除かれている。床面は奥壁に向かってわずかに上る。

③出土遺物(第15図)

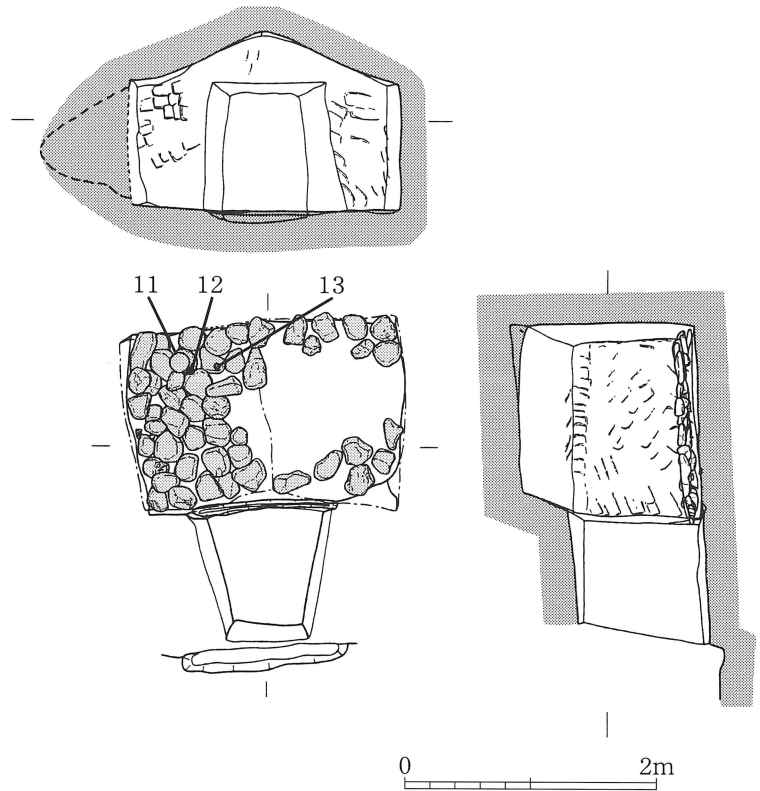
前庭部

前庭部ほぼ中央で、掻き出された円礫を東西方向に带状に検出した。遺物は礫の間や下に散布しており、1号墓のように遺物の一括埋置は認められなかった。1~3は坏蓋である。いずれも口縁端部内面には返りが付く。1・2には宝珠形の、3には丸い疑宝珠のつまみが頂部に付く。4については天井部が丸みをもつことから坏蓋と判断したが、ヘラ切り離しでもあり坏身の可能性もある。5は坏身であろう。4に比べると体部が垂直に近い状態で立ち上がり、ヘラ記号が残る。6は大

甕の頸部か。頸部外面にはヘラ描文様が施された後に2条の沈線を巡らす。7～9は高坏の坏部、10は脚である。脚の外面には縦方向の削りが施される。これらの遺物の時期については、出土した坏蓋に返りが付くこと、坏身には高台が付されていないことから7世紀前半ごろの一群であろう。

玄室内

玄室内には、多量の土砂やごみが流入していた。遺物は床面に敷いた円礫のやや上方で、人骨片と共に出土した。人骨については取り上げが困難な状態であった。11～13は玄室内で出土した磁器類である。1は白磁碗である。内面に櫛描き文様が施されており、森田編年のV類に属す12世紀ごろのものであろう。12・13は合子であるが、同一個体ではない。いずれも景德鎮系の青白磁で、12の外面には型打成形の菊花文が施され、つまみは欠損している。白磁と同時期のものであろう。これらの遺物は、その出土状態からセット関係が確認されており、この横穴墓が中世段階において中世墓として再利用されたことを示している。



第14図 北友田横穴墓群1-2号墓玄室実測図(1/60)

3号墓

①前庭部(第16図)

前庭部は他の横穴墓と同じように同一テラス上に位置するが、約0.2m掘り込まれていることから単独の前庭部を有している。現状で長さ約2m、幅6.6mで逆台形状に掘り込まれる。中央及び右側壁付近には排水路が穿れ、左右にはピットが存在する。このピットには須恵器大甕の底部片が埋置された状態で確認できることから、供献土器を安置するために掘られたものであろう。飾縁については痕跡が確認されるだけであるが、現状から幅約3.4m、奥行0.85m、高さ約1.9mの飾縁が存在したことが予想される。羨門部は、大きく改変されており、羨門上部の状況は不明であるが、他と同様に羨門より上はほぼ垂直に立ち上がると思われる。羨門は壁のほぼ中央に穿れるが、大きく改変されており本来の形状をとどめていない。復元すると、羨門高は0.95m、幅は1.1mである。閉塞石は存在せず、床面はほぼフラットである。

②羨道、玄室(第16図)

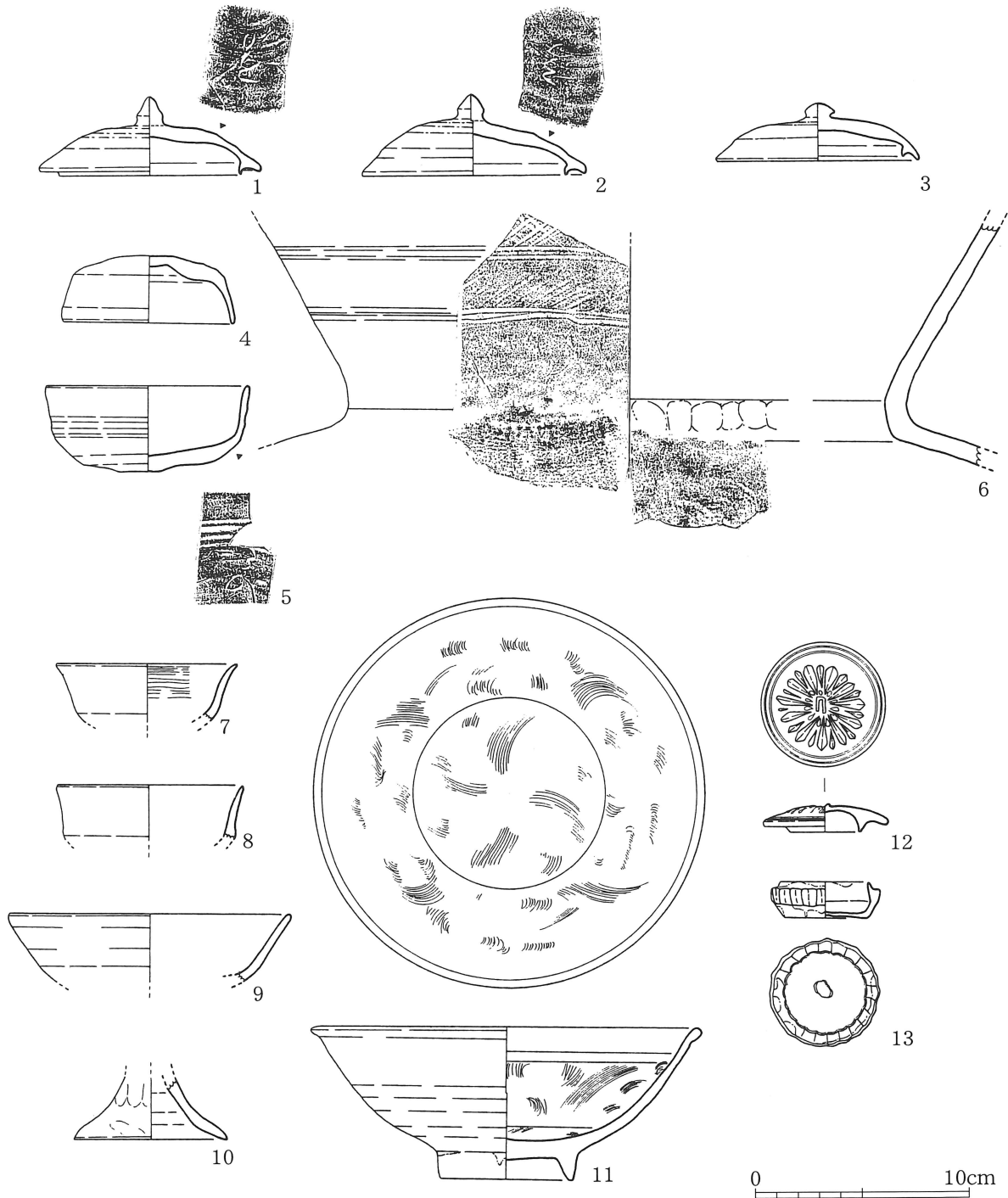
規模・構造

第1支群の中でもひととき大きな横穴墓である。羨道は大きく改変され現状をとどめていない。玄室と羨道部の境には段差が残る。玄室はほぼ正方形であり、長さ約2.8m、幅約3.0m、高さは中央付近で約2.4mを測る。天井は寄棟形であるが、棟は長さ約1.2m、幅約1.6mを測る。玄室内には屍床は有しておらず、現状では川原石の円礫は確認できなかったが、前庭部や羨道で円礫を確認できることから本来は敷かれていた可能性が高いと考える。床面は奥壁に向かってわずかに上る。

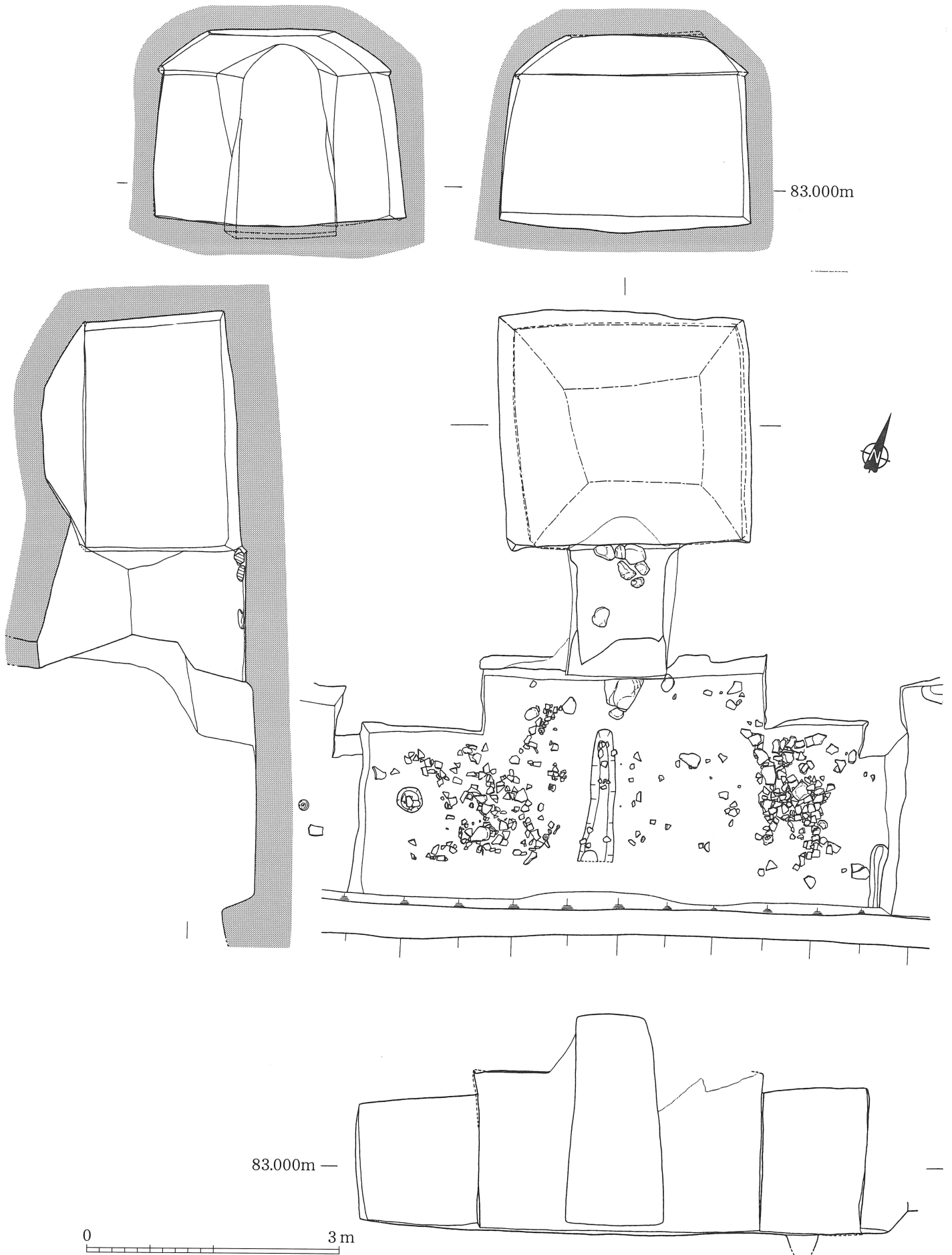
③出土遺物（第17～21図）

前庭部

表土をはぐと前庭部ほぼ全面に玄室より掻き出された円礫が散乱していた。遺物は礫の間からも検出したが、その下面から多量の須恵器や土師器などが出土した。器種も坏類、横瓶、提瓶、甗、大甕や高坏など多種にわたり、ほぼ散乱した状況であり墓前祭祀に伴う状況は確認できなかったが、わずかに前庭部に掘り込まれた東西のピットの中に、大甕の底部が一部残存していたことから、大甕を墓前に安置していた様子が窺えた程度である。1～39は須恵器である。1～13は坏蓋で、12・13にはボタン形で頂部がわずかに窪むつまみを有す。1～3の体部にはヘラ削りが残る。いずれも端部は丸く収まる。14～23は坏身である。14～20については受け部が短く立ち上がる。21～23については受け部を有さないが、ヘラ切り離しであること、底部がほぼ平らであることなどから坏身と判断した。これらの坏類については、坏蓋にはヘラ削りの残るものからつまみや端部に受けを有すものなど、6世紀後半・末～7世紀前半頃（TK43新～TK217段階）のものであろう。24～26は

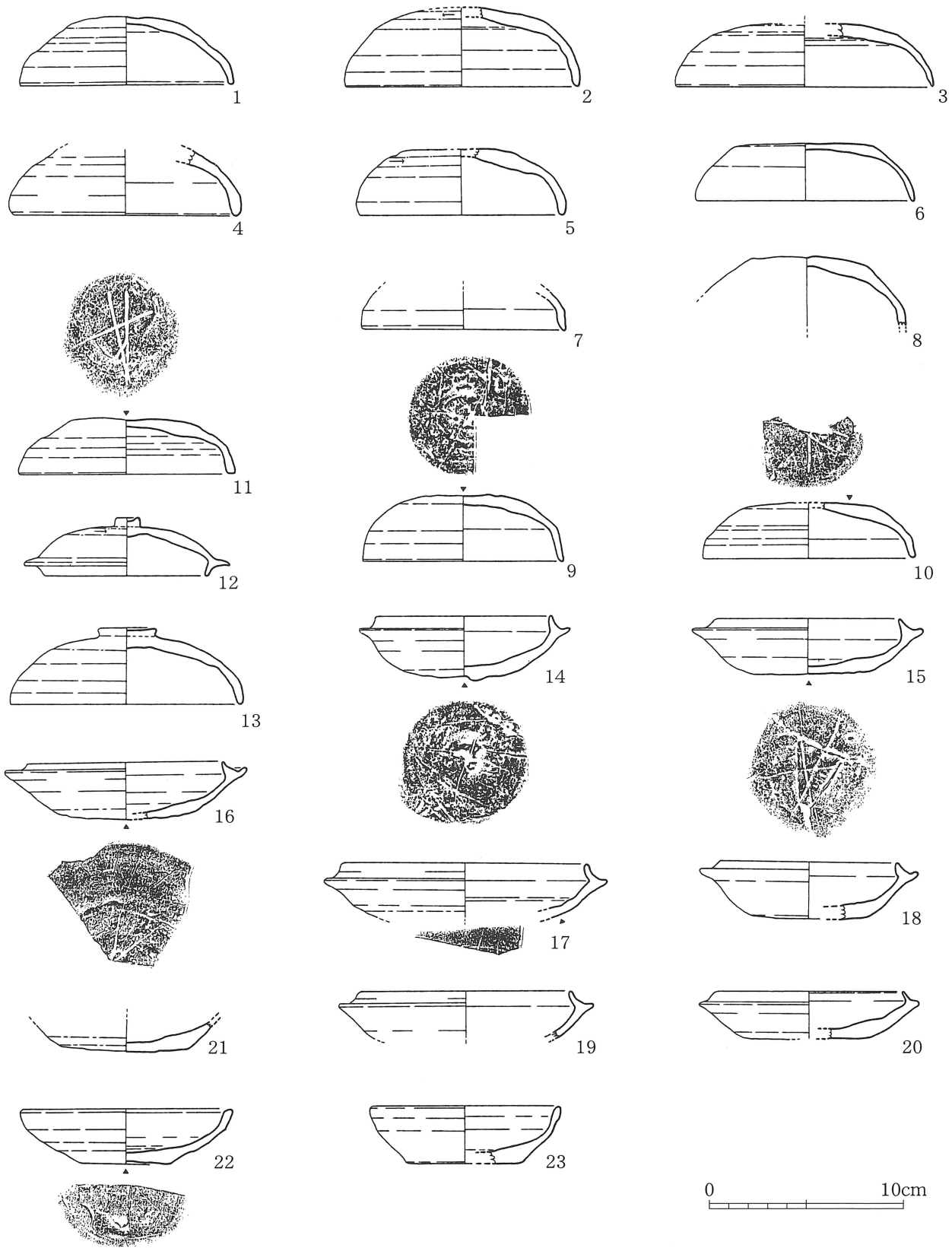


第15図 1-2号墓出土遺物実測図(1/3)



第16图 北友田横穴墓群1-3号墓实测图 (1/60)

高坏である。26は有蓋高坏で受身を有す。27は長頸壺の口縁部であろう。28は甗、29は小型の埴である。28の肩部には縦方向のヘラ描き文様が施される。30は平瓶である。胴部にはカキ目が施される。31～34は壺であるが、31・32は台付長頸壺、33・34は短頸壺である。いずれも胴部にカキ目が施され、34の口縁部は頸部で大きく屈曲し端部は外傾する。肩部には斜め方向の櫛描き文様が施された後、沈線を巡らす。35～39は大甗である。いずれも内面には同心円の当て具痕が、外面には平行タタキ痕が残り、口縁は大きく外反し、端部は外方へ屈曲させて肥厚させ、断面は方形を呈する。口縁部には、36・37に

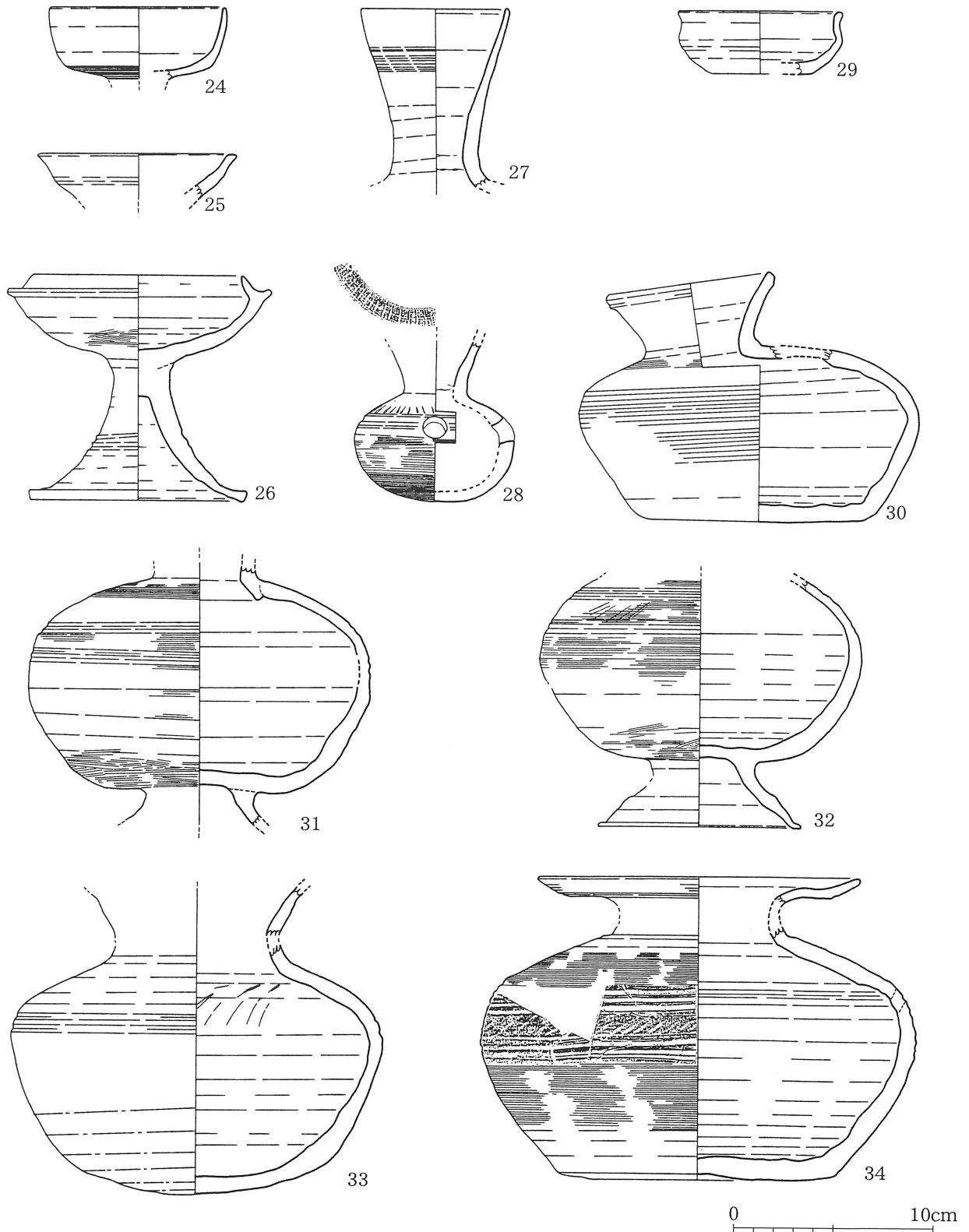


第17図 1-3号墓出土遺物実測図1 (1/3)

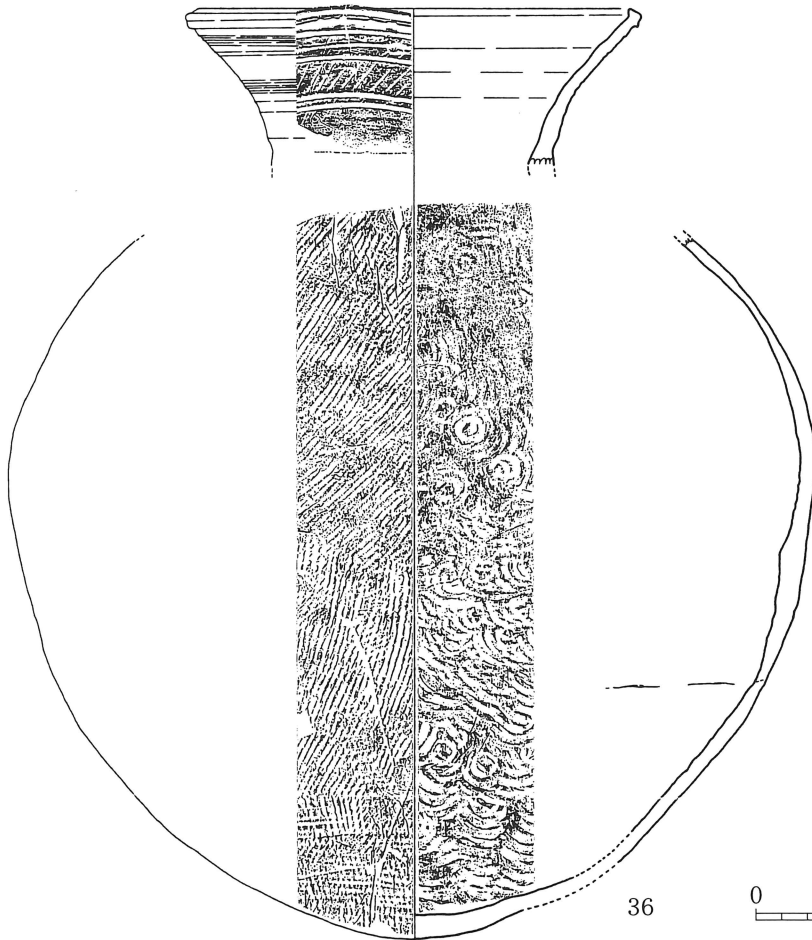
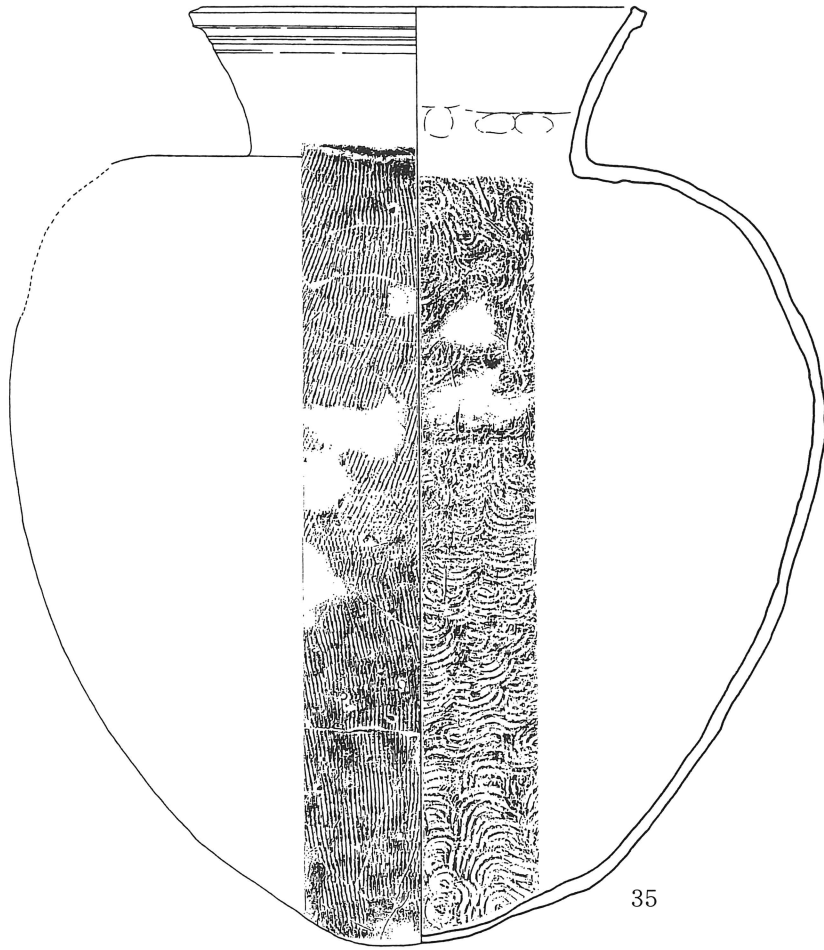
はヘラ描きによる斜め方向の櫛描き文が、38には波状文が施され、39にはヘラ記号が描かれる。40～48は土師質土器である。40・41はヘラ切り離しの坏で13～14世紀頃のものであろう。42も坏の口縁部か。43～48は高坏で、43～47は坏部、48は脚部である。49は甕の口縁部、50は弥生時代の丹塗りの壺の胴部か。これらの遺物の中で、横穴墓本来のものは須恵器及び土師器の高坏である。40～42については中世のものであり、他の横穴墓でも中世墓としての転用が認められることから、玄室内から掻き出された可能性も考えられる。

玄室内

玄室内はすでに倉庫として利用されており、遺物は確認できなかった。

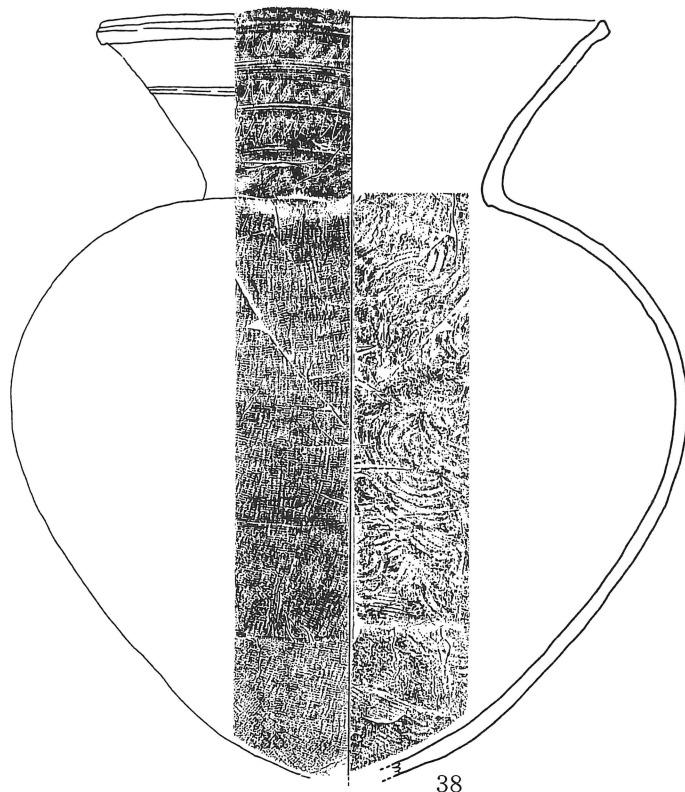
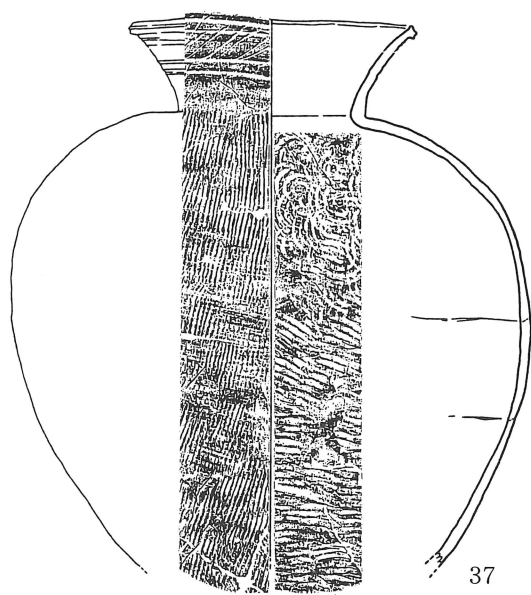


第18図 1 - 3号墓出土遺物実測図2 (1 / 3)

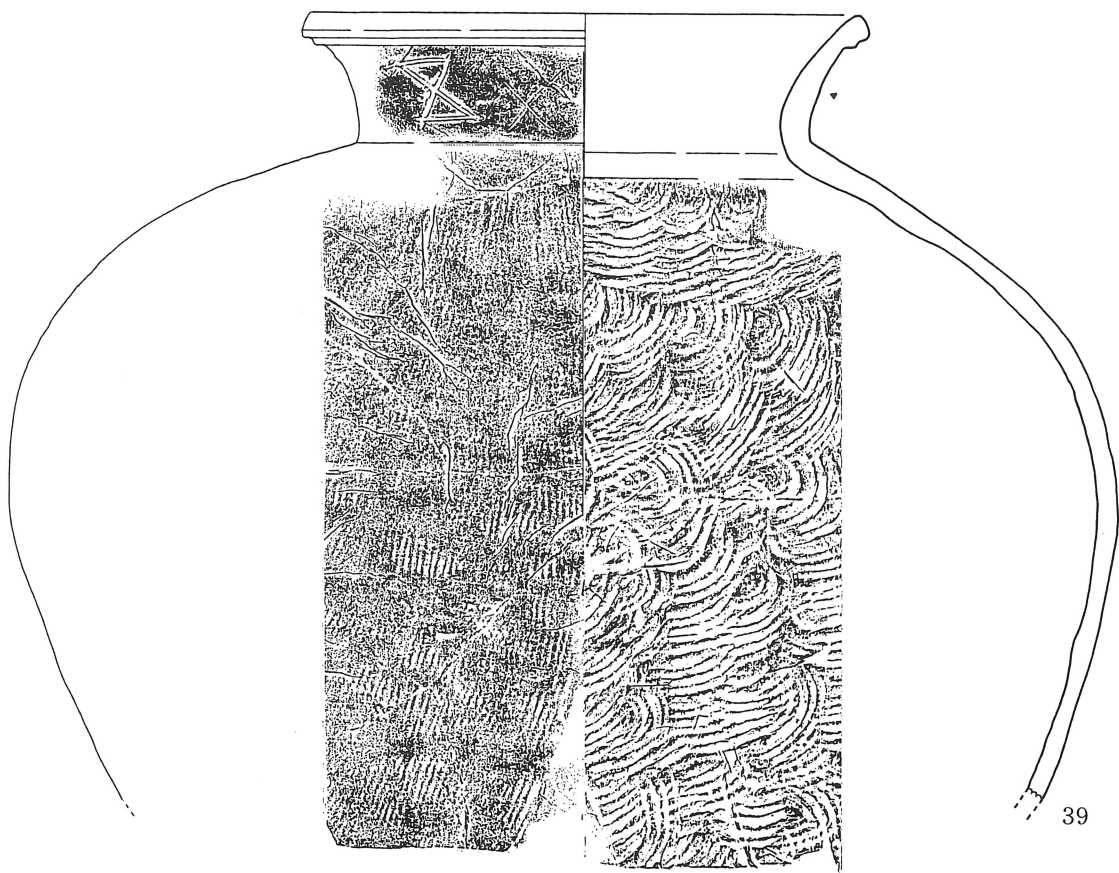


0 20cm

第19图 1-3号墓出土遗物实测图3 (1/6)

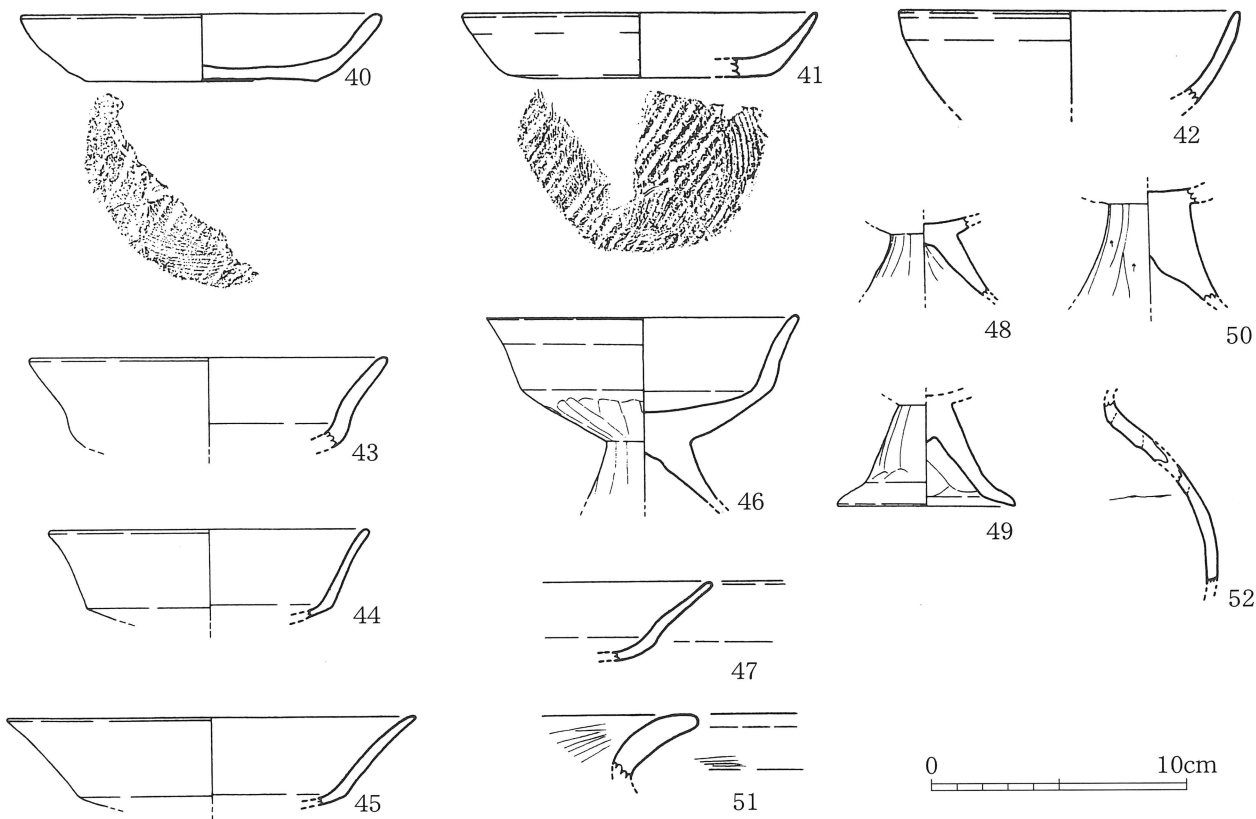


0 20cm



0 10cm

第20図 1 - 3号墓出土遺物実測図4 (37・38は1/6、39は1/3)



第21図 1-3号墓出土遺物実測図5 (1/3)

4号墓

①前庭部 (第22図)

5号と共有する前庭部であり、全長約5.9m、幅約1.85mを測る。5号との間にほとんど段差が認められず前庭部については明確に区切ることはできないが、固有のスペースを保持していたと思われる。4号墓も他の横穴墓と同じく飾縁の痕跡が認められ、現状で幅約2.0m、奥行0.55m、高さ約1.9mの飾縁が存在したことが予想される。羨門部は、ほぼ11°の角度で立ち上がる。上部幅・底面幅共に約2.1m、高さ1.75mを測る。羨門の立面は縦長の台形で壁の中央やや右よりに穿れるが、改変されており、現状での羨門高は1.15m、幅は0.65mを測る。閉塞石は存在せず、床面はほぼフラットであるが、前庭部羨門付近には閉塞石を固定するための臍が穿かれる。

②羨道、玄室 (第22図)

規模・構造

羨道の立面は台形、平面形はバチ形を呈しているが改変されている。現状で全長約1.0m、玄門幅0.9m、玄門高1.0mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ1.34m、幅は奥壁付近で最大となり約1・7m、高さは中央付近が最大で約1.2mを測る。平面形は平入隅丸逆台形で、天井部は平型、玄室内には屍床は有せず、川原石の円礫も確認できなかったが、前庭部で大量の円礫を確認したことから、本来は円礫が敷かれていたと思われる。

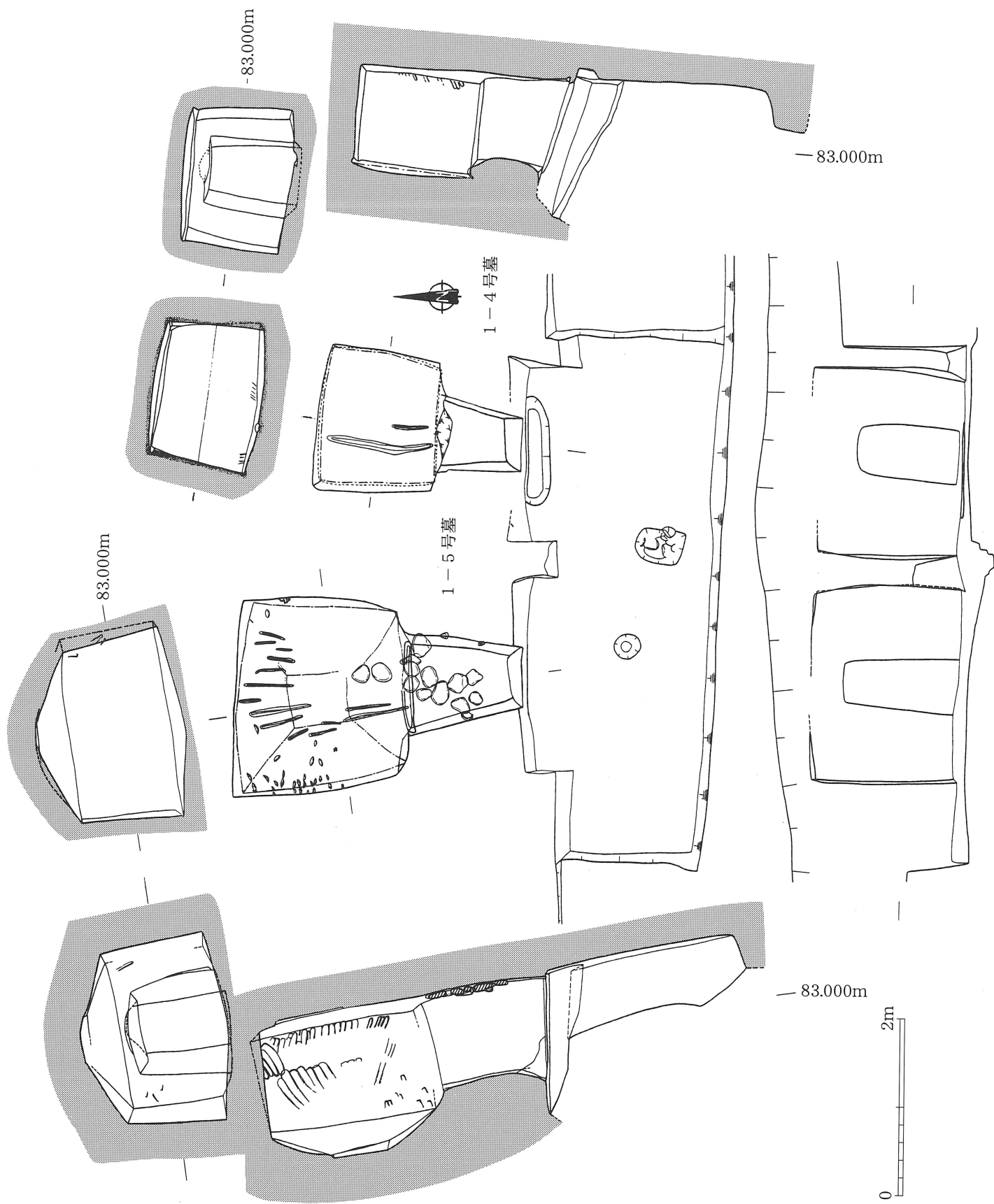
③出土遺物

前庭部 (第23図)

3号墓と同様に玄室内に敷かれた円礫が散乱するなど、攪乱された状況が認められ、プライマリーな状況は認められなかった。また、遺物も出土したが細片が多く図示できたものは1点だけであった。1は坏身である。受け部が内傾して短く立ち上がる。外面にはヘラ削りが認められる。6世紀末頃 (TK209段階) のものであろう。

玄室内

すでに倉庫として利用されており、遺物は確認できなかった。



第22図 北友田横穴墓群 1-4・5号墓実測図 (1/60)

5号墓

①前庭部 (第22図)

4号と共有する前庭部であり、4号との間にほとんど段差が認められず前庭部については明確に区切ることはできないが、固有のスペースを保持していたと思われる。他の横穴墓と同じく飾縁の痕跡が認められ、現状で幅約2.25m、奥行0.55m、高さ約1.9mの飾縁が存在したことが予想される。羨門部は、ほぼ12°の角度で立ち上がる。上部幅・底面幅共に約2.1m、高さ1.75mを測る。羨門の立面は縦長の台形で壁の中央やや右よりに穿たれるが、改変されており、現状での羨門高は1.35m、幅は0.65mを測る。閉塞石は存在せず、床面はほぼフラットである。



第23図 I-4号墓
出土遺物実測図 (1/3)

②羨道、玄室 (第22図)

規模・構造

羨道の立面は台形、平面形はバチ形を呈しているが改変されている。現状で全長約1.4m、玄門幅1.1m、玄門高1.2mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ約1.9m、幅は奥壁付近で最大となり約2.2m、高さは中央付近が最大で約1.7mを測る。平面形は平入逆台形で、天井は寄棟形であるが、棟は長さ約0.8m、幅約0.6mを測る。玄室内には屍床は有しておらず、現状では川原石の円礫は確認できなかったが、前庭部や羨道で円礫を確認したことから本来は敷かれていたと思われる。床面はフラットであり、羨道と玄室の境には臍が穿たれ、段差も認められる。

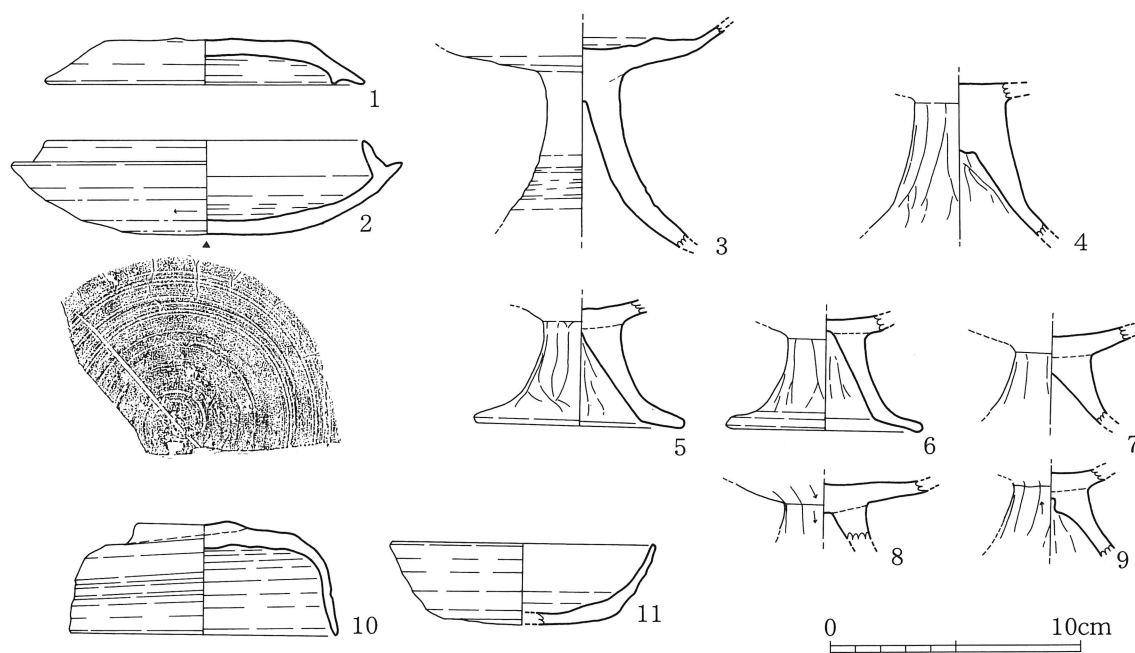
③出土遺物 (第24図)

前庭部

4号墓同様に玄室内に敷かれた円礫が散乱するなど、攪乱された状況が認められた。遺物も出土したがプライマリーな出土状況は認められなかった。1～3は須恵器、4～9は土師器である。1・2は坏蓋と坏身であるが、1は端部に返りを有しており、7世紀前半頃 (TK217段階) のものであるが、2は口径も大きく胴部に回転ヘラ削りも残ることから、6世紀後半 (TK43段階) のものであり時期差が認められる。5号墓にも当該期の須恵器が存在しないことから3号墓からの流れ込みの可能性も残る。3は高坏である。脚部に沈線を巡らす。5～9も高坏であるが、脚部外面は縦方向にケズリが施される。5は外面に赤色顔料が塗布される。

玄室内

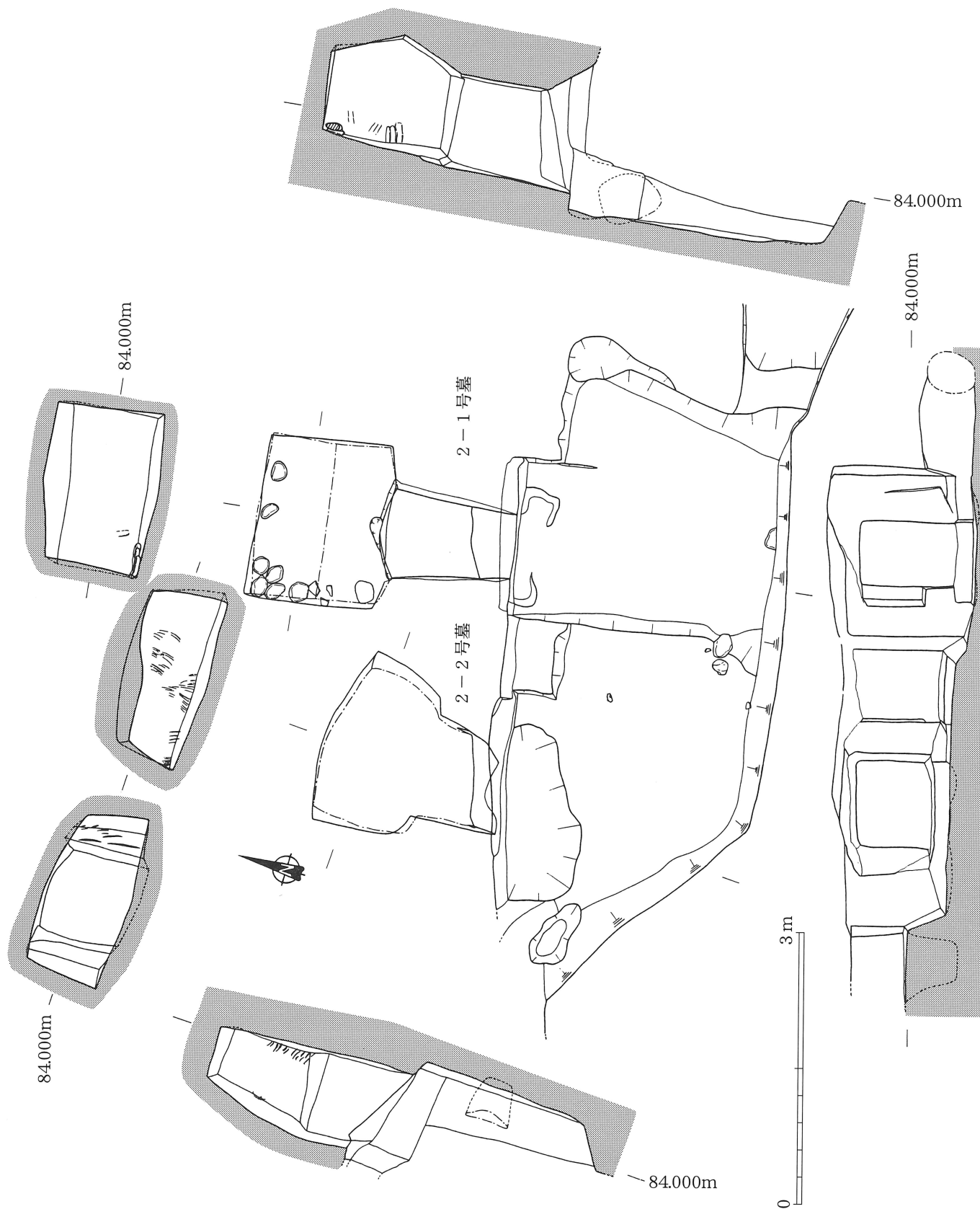
出土状況は不明であるが、玄室の中に置かれていた遺物である。玄室内の清掃の際に出土した可能性が高く、5号墓に伴うものであろう。いずれも須恵器で10は坏蓋、11は坏身である。10はヘラ切り離しのままで、歪な平坦面をなす。11は坏身であり返りは消滅している。これらの坏は、その形状から7世紀前半 (TK209～TK217段階) のものであろう。



第24図 1-5号墓出土遺物実測図 (1/30)

(2) 第2支群

第1支群の西側に展開する。第1支群よりテラス部分が約1m高く、調査区外に連続して横穴墓群が存在することから、第2支群と設定したグループである。今回対象となったのは2基であり、東から連続して1号墓・2号墓の順に並ぶ。主軸は1号墓が $N-19^{\circ}-W$ 、2号墓が $N-1^{\circ}-W$ にとる。標高は1号墓が約82.5m、2号墓は最高位に位置し標高83mである。いず



第25図 北友田横穴墓群第2支群実測図 (1/60)

れも飾縁を有しており、テラスは第1支群同様に共有しているが、それぞれの墓前において床面に段差が見られることから固有のスペースを保持していたものと考えられる。

1号墓

①前庭部（第25図）

大きく改変されており、遺存する本来の前庭部は1・2号の間にある基壇状の部分だけである。旧状をとどめていないため、その様相は不明であるが、本来は1・2号の共有する前庭部であったと思われる。全長については2号墓の前庭部が調査区外へ続くため不明であるが現状で、幅約2.3mを測る。飾縁・羨門部も大きく改変されており、本来の規模は不明である。羨門は壁のほぼ中央に穿たれている。

②羨道、玄室

規模・構造（第25図）

羨道の立面は台形、平面形はバチ形を呈しているが大きく改変されている。現状で全長約1.5m、玄門幅1.05m、玄門高1.1mを測り、玄室に向かってわずかに上るが、本来はほぼフラットであったと思われる。玄室は長さ約1.3m、幅は中央付近で最大となり約1.9m、高さは中央付近が最大で約1.3mを測る。平面形は平入長方形で、天井は横方向の寄棟形である。玄室内には屍床は有しておらず、わずかに川原石の円礫が残ることから本来は円礫が敷かれていたと思われる。床面は奥壁方向へやや上り、羨道と玄室の境には段差も認められるが、横穴墓に伴うものかは不明である。

③遺物の出土状況（第25図）

前庭部（第25図）

1群同様、玄室内に敷かれていた円礫の一部が散乱するなど、攪乱された状況が認められた。遺物量は少なく、円礫の下から土師質土器の坏が1点出土したのみである。ヘラ切り離して部分的にヘラケズリが認められ、9世紀頃のものであろう。

玄室内

玄室内からは内面に同心円の当て具痕、外面に平行タタキ痕の残る甕の胴部細片が3点出土したが、いずれも流れ込んだものであろう。

2号墓

①前庭部（第25図）

1号墓同様に大きく改変されており、旧状をとどめていない。飾縁・羨門部も大きく改変されており、本来の規模は不明である。

②羨道、玄室（第25図）

規模・構造

羨道の立面は台形、平面形はバチ形を呈しているが大きく改変されている。現状で全長約1.0m、玄門幅1.2m、玄門高1.0mを測り、玄室はほぼフラットである。玄室についても改変の跡が認められ、本来の規模は不明であるが、現状で、長さ約1.0m、幅は奥壁付近で最大となり約2.0m、高さは玄門付近が最大で約1.0mを測る。平面形は平入逆台形形で、天井は平形である。玄室内には屍床は有しておらず、前庭部で円礫を確認したことから本来は円礫が敷かれていたと思われる。床面は奥壁方向へやや上る。

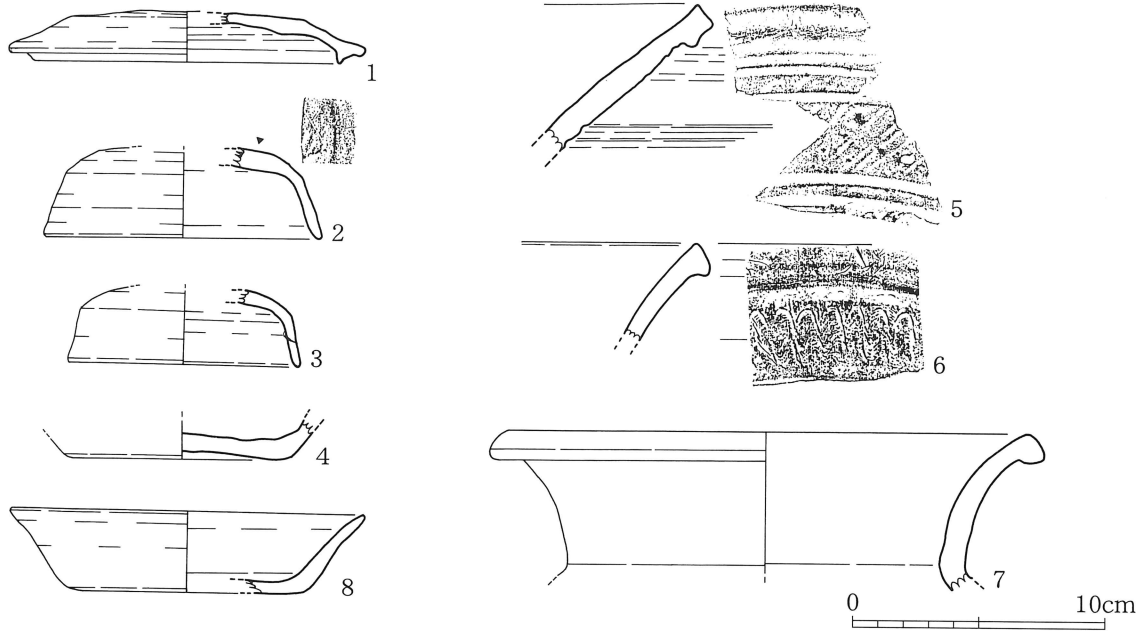
③出土遺物（第26図）

前庭部

1号同様、玄室内に敷かれていた円礫の一部が散乱するなど、攪乱された状況が認められた。出土した遺物はいずれも須恵器である。1～3は坏蓋である。1は端部に返りを有すもので、2・3については蓋としたが、全体の形状が不明であり身の可能性も残る。4は器種不明の底部であり、内面に自然釉がかかる。5～7は甕の口縁部片である。いずれも端部は外方へ屈曲させ肥厚させる。5の断面は方形であり、6・7は三角形を呈している。5の外面には斜め方向のヘラ描き文様が施された後沈線をめぐらす。6はヘラ描きの波状文が施される。

玄室内

開口していたが、流入した土砂の中から土師質土器が1点出土した。8は玄室内から出土したヘラ切り離しの土師質土器坏である。9世紀頃のものであろう。



第26図 2-1・2号墓出土遺物実測図(1/3)

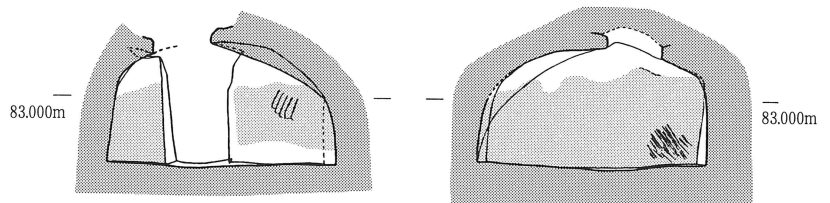
(3) 第3支群

第2支群のテラス南側斜面で検出した1基の横穴墓である。そのためいずれの支群ともテラスを共有しておらず、周囲に横穴墓が存在しないため1基であるが支群としてグルーピングした軸はN-13°-Wにとり、標高は83mを測る。前庭部についてはすでに消滅しており、その状況は不明である。

1号墓

①前庭部 (第27図)

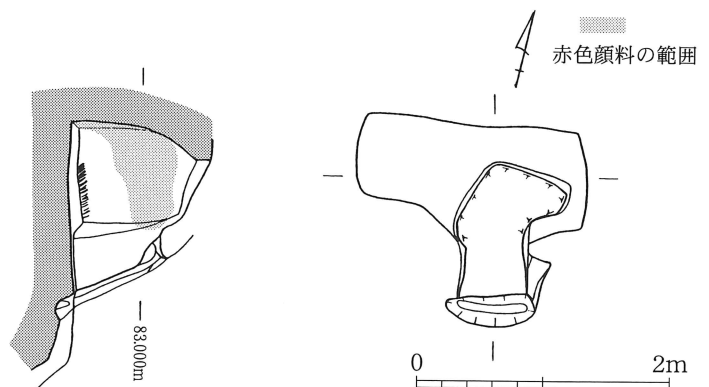
宅地造成等の削平等ですでに消滅しており、わずかに閉塞石を固定するための臍穴が認められる。また、飾縁の右側壁の痕跡がわずかに残っていることから、本来は飾縁を有した横穴墓であったと思われる。



②羨道、玄室 (第27図)

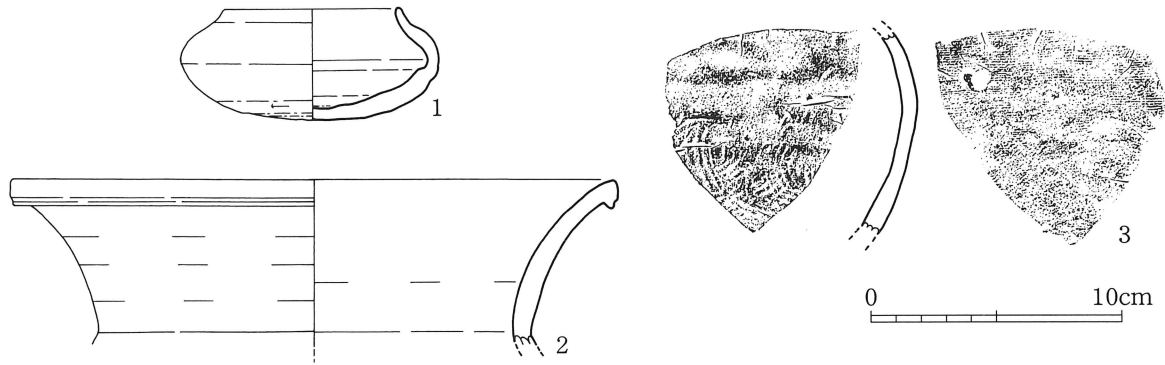
規模・構造

工事により羨道部から玄室にかけての天井部が削平される。羨道部の立面は不明であるが平面形はほぼ方形を呈しており、現状で長さ約0.7mを測る。玄門についても玄門高は不明であるが、玄門幅は約1.0mを測る。玄室は平入隅丸方形で玄室東側は比較的角度が残るが、西側は隅丸である。玄室内には全面に赤色顔料が塗布される。天井部はアーチ型で、



第27図 北友田横穴墓群3-1号墓実測図(1/60)

長さ0.9m、幅高さともに中央付近が最大で、それぞれ約1.9m、0.9mを測る。床面はほぼフラットである。



第28図 3-1号墓出土遺物実測図(1/3)

③出土遺物(第28図)

前庭部

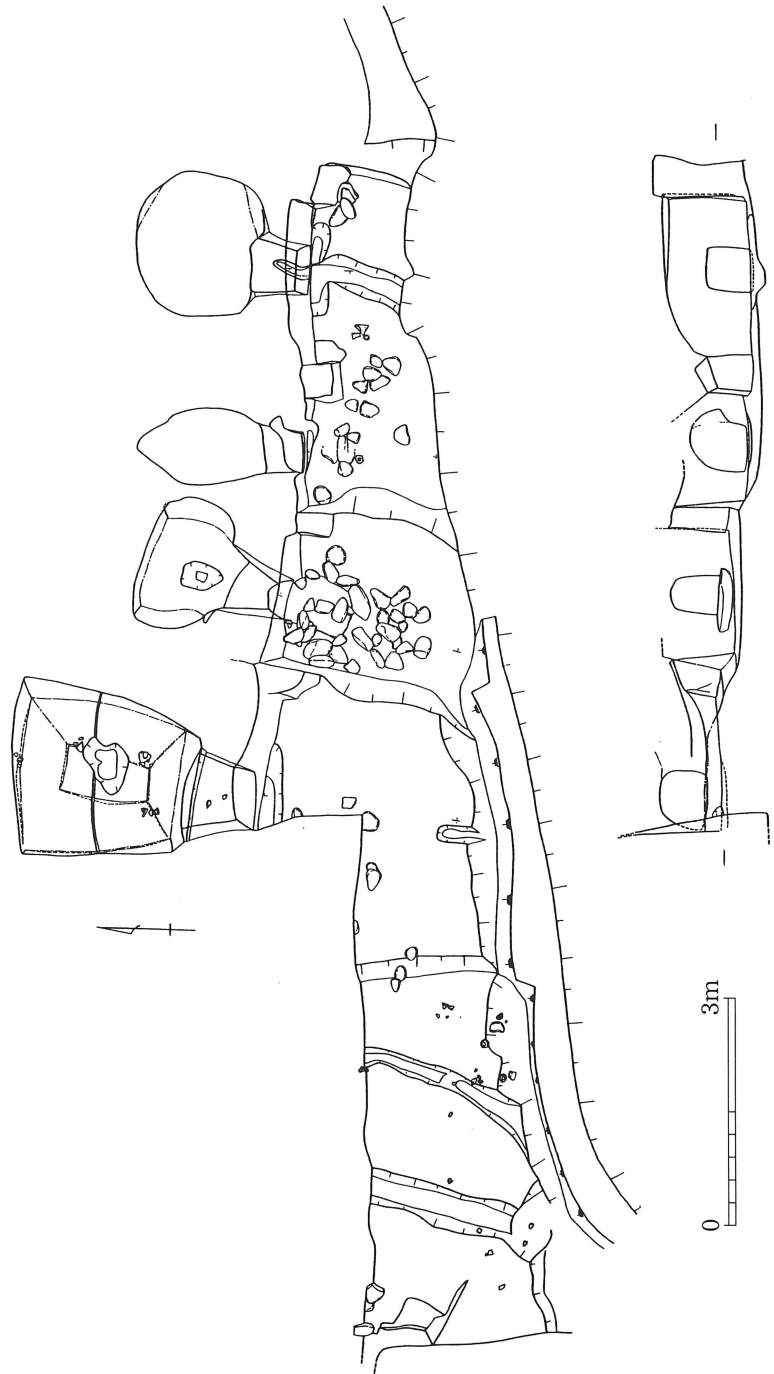
開口しており、遺物は認められなかった。

玄室内

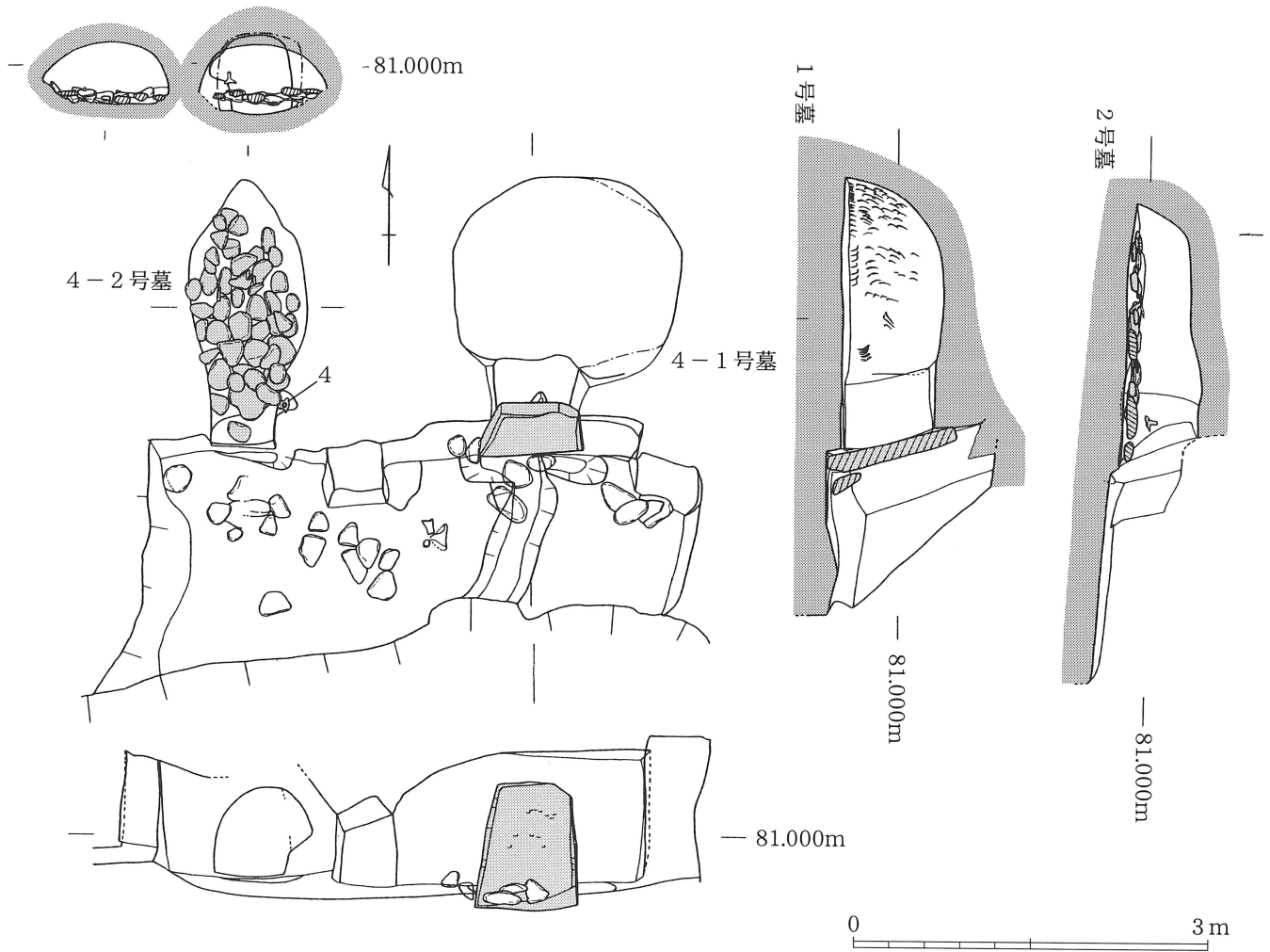
開口して土砂が流入しており、その土砂の中に遺物が存在した。一号墓の上方が2群の前庭部に当たるため、この横穴墓に伴うものか不明であるが、ここで紹介する。いずれも須恵器で、1は埴である。口縁はやや内傾して立ち上がる。2・3は甕の口縁部片と胴部片である。2の口縁端部は外方へ屈曲させ肥厚させる。3の内面には同心円の当て具痕が、外面には平行タタキ痕が残る。

(4) 第4支群

調査区西側テラス上に展開する4基の横穴墓である。このテラスは8号墓の前庭部西側側壁から始まり平成14年度に検出した小型横穴墓が掘り込まれた東側側壁まで長さ約20m、高さは西側壁で約1.3m、幅は現状で約3mを測り断面は逆台形を呈する。このテラス上の横穴墓は、今回の調査では4基確認したが、前庭部の状況から調査区外にも2~3基存在する可能性がある。そのため6~7基で一つの支群を構成していた可能性が高く第4支群とした。なお、宅地部分との比高差からこの横穴墓群では、最下段に位置する一群と思われる。検出した横穴墓は東から連続して1号墓~4号墓の順に並び、1号墓について未開口であった。主軸は1号墓がほぼ真北に、2号墓も1号墓同用にはほぼ真北、3号墓はN-



第29図 北友田横穴墓群第4支群遺構配置図(1/100)



第30図 北友田横穴墓群 4-1・2号墓実測図 (1/60)

15°-E、4号墓はN-7°-Eに-Eにとる。標高は1号墓が約82.5m、2号墓は最高位に位置し標高83m、3号墓は最下位で標高が81.6m、4号墓は約82mである。いずれも飾縁を有しており1号墓については未開口であった。テラスは幅5m、長さ15mにわたって共有しているが、それぞれの墓前において床面に段差が見られることから固有のスペースを保持していたものとする。なお、遺物等の出土状況であるが、1・2群同様に、玄室内に敷かれていた円礫が掻き出された状況が認められ、未開口の1号墓を除くと遺物は散乱した状態で出土した。

1号墓

①前庭部 (第31図)

2号墓と共有する前庭部である。全長約1.25m、幅約4.1mを測る。2号との間にほとんど段差が認められず前庭部については明確に区切ることはできないが、固有のスペースを保持していたと思われる。1号墓の羨門部にはわずかに飾縁の痕跡が残っており、現状から幅約2.1m、奥行0.4m、高さ約1.15mの飾縁が存在したことが予想される。羨門部は、ほぼ13°の角度で立ち上がる。上部幅・底面幅共に約2.1m、高さ1.0mを測る。羨門の立面は台形で壁のほぼ中央に穿たれており、羨門高は0.6m、幅は0.6mを測る。閉塞石は角が面取りされた凝灰岩の一枚石であり、人頭大の川原石で閉塞石の下面まで支える。閉塞石の前には、土師質土器の坏が3点置かれており、最終閉塞後に墓前祭祀が行われた状況が認められたが、不注意にも前庭部の土層観察の際に動かしてしまい正確な状況を把握できなかった。しかし調査時の状況や土層の観察から、最終閉塞後に閉塞石の下部を埋め(第1層)、墓前祭祀後に閉塞石の中央付近まで埋め戻した(第2・3層)ものと思われる。前庭部の床面中央には排水路が穿たれている。上半部は取り除かれており前庭部で検出した。床面はほぼフラットである。

②前庭部土層 (第31図)

前庭部の土層は、樹根等の攪乱を受けておらず、比較的明瞭な層区分が可能な状態で6層に分層できた。以下堆積順に説

明を加える。

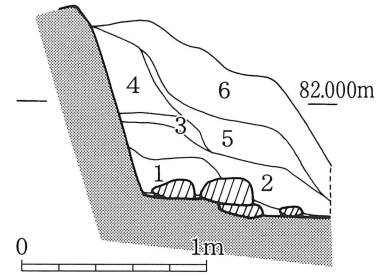
- 1層 灰黄褐色土層。凝灰岩の風化層である。最終閉塞に伴う二次堆積である。
- 2層 灰黄褐色土層。凝灰岩の風化層である。最終閉塞二次堆積である。遺物が出土した。
- 3層 灰黄褐色土層。凝灰岩の風化層である。最終閉塞に伴う墓前祭祀後の堆積である。
- 4層 灰黄褐色土層。凝灰岩の風化層である。最終閉塞後の二次堆積である。
- 5層 横穴墓埋没後の自然堆積層である。
- 6層 横穴墓埋没後の自然堆積層である。

以上のことから、最終閉塞後の墓前祭祀行為は認められたが、追葬については認められなかった。

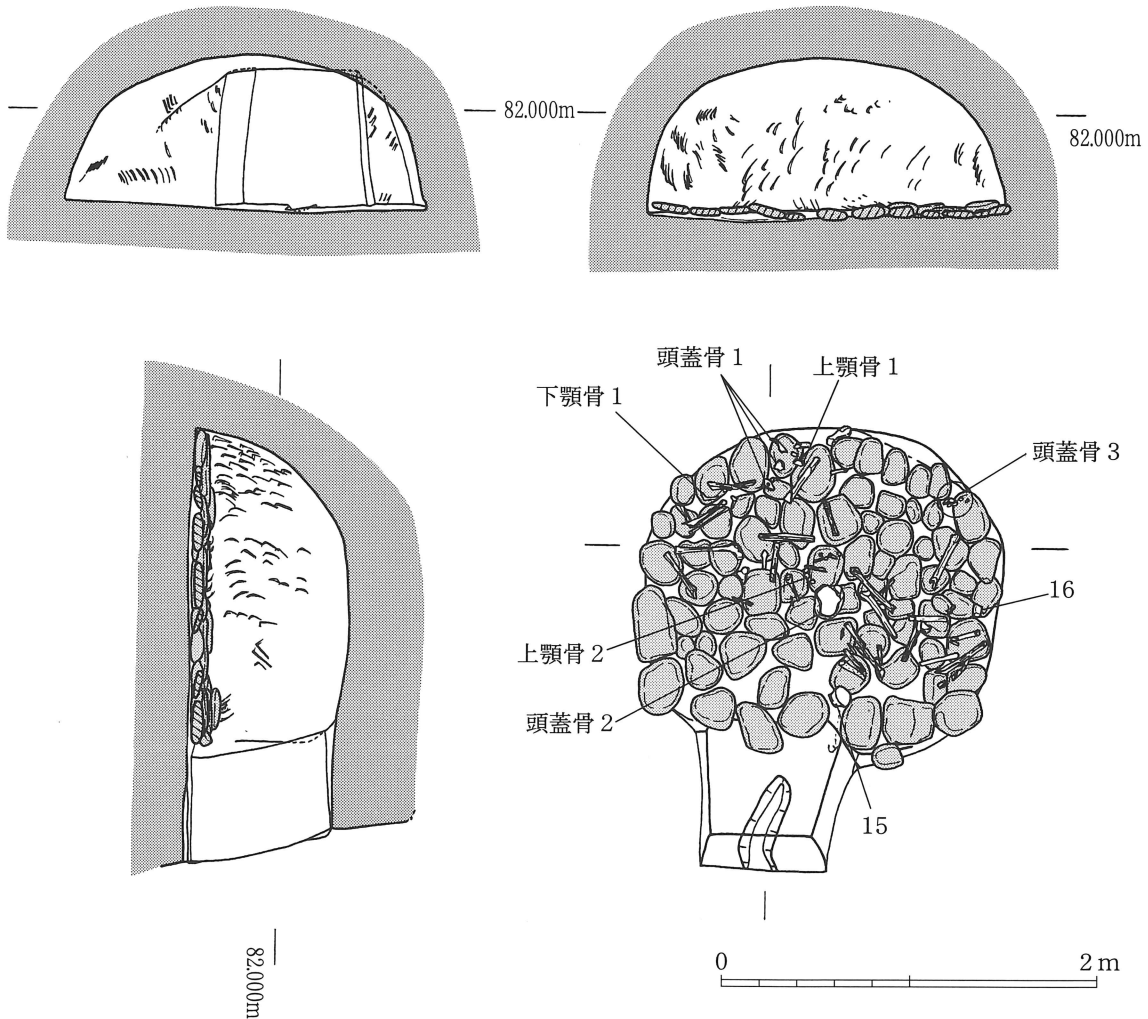
②羨道、玄室（第32図）

規模・構造

羨道の立面は台形、平面形はバチ形を呈しており、全長約1.1m、玄門幅1.2m、玄門高1.1mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ0.8m、幅は中央やや奥壁よりで最大となり約1.9m、高さは中央付近が最大で約0.8mを測る。平面形は隅丸方形で、西側よりも東側に広がる。天井部はアーチ型、玄室内には屍床は有せず、川原石の円礫を敷く。開口時には、土砂が堆積しており、人骨と土師質土器等の供献土器を玄門付近で検出した。



第31図 4-1号墓
前庭部土層図（1/40）

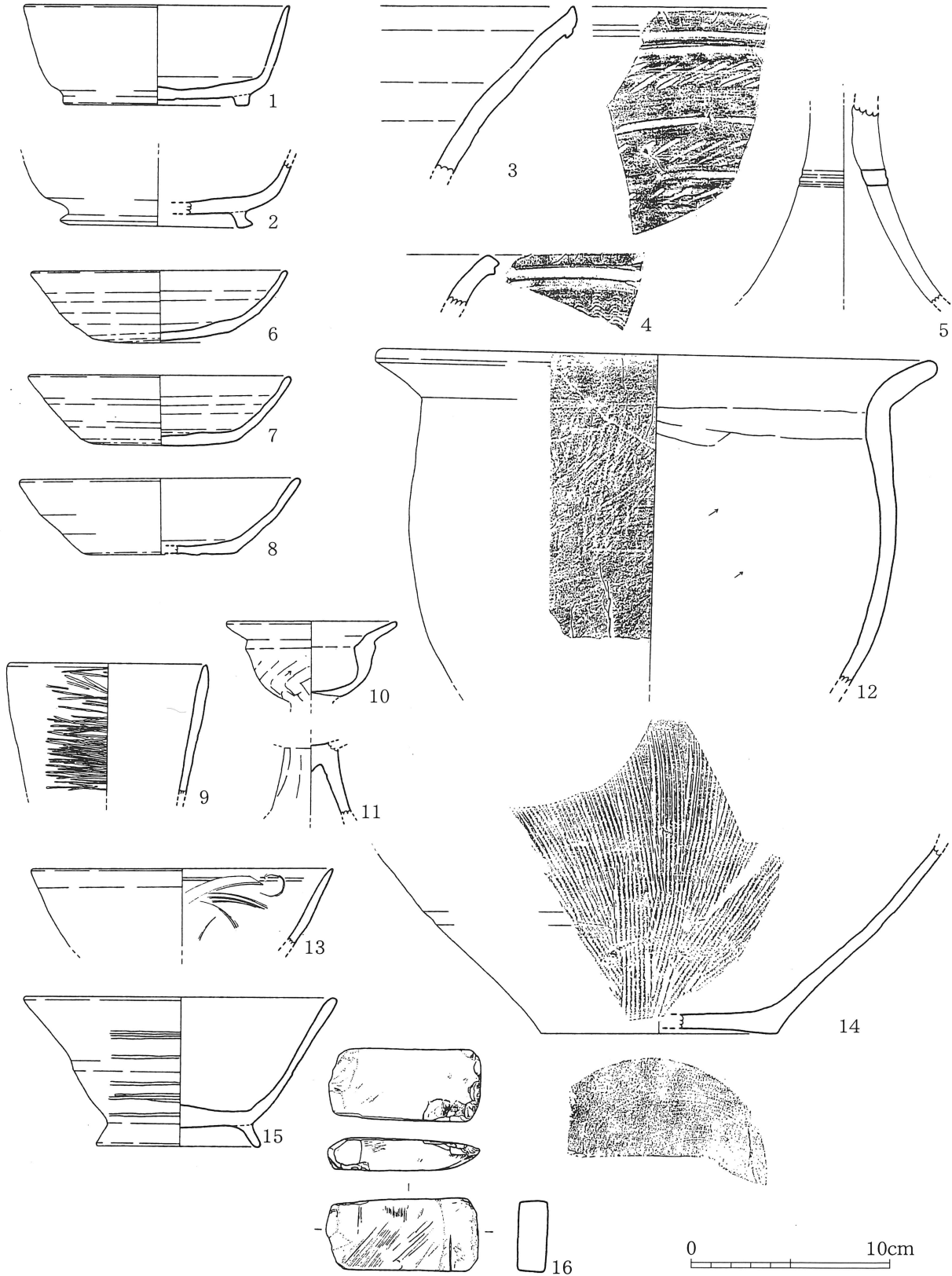


第32図 北友田横穴墓群 4-1号墓実測図（1/40）

③出土遺物（第33図）

前庭部

1号墓は開口していないため、玄室内に敷かれていた円礫が散乱する状況は認められなかった。1・2は高台付坏である。高台張り出しのない短い高台であることから7世紀後半から8世紀にかけてのものであろう。3・4は甕の口縁部か。端部の肥厚は認められない。3には斜め方向の4には波状文がヘラ描きにより施される。5は高坏であるが、長脚で2段透かしのものである。6～12は土師質土器である。6～8は土師質土器である。これらの土器は閉塞石の前に置かれた供献土器で



第33図 4-1号墓出土遺物実測図（1/3）

あり、最終閉塞に伴うものである。9は長頸壺の口縁部であろう。外面に細かなミガキが施される。10・11は高坏の坏と脚部である。坏の口縁端部は大きく外反し、脚部には縦方向のケズリが施される。12は甕である。粗めのハケ目が外面に施される。13は青磁碗の口縁部である。外面は無紋であり、内面に片切り彫りが施文されることから森田V期に属するものか。14は近世の播鉢である。以上前庭部で出土した遺物について説明を加えたが、9～13については土層上面から出土しておりこの横穴墓に伴うものではない。

玄室内

人骨が3体以上、散乱した状態で出土した。詳細については別項に譲り、ここでは遺物について説明する。15は玄門付近で検出した土師器である。壙形のタイプで外面には部分的にミガキが施される。高台は底部端に貼り付けられており、9世紀代のものであろう。15は扁平片刃石斧である。玄室東端の円礫の上に置かれていた。

2号墓

①前庭部（第30図）

1号と共有する前庭部であり、1号との間にほとんど段差がないことから明確に区切ることは難しい。2号墓の飾縁も痕跡が確認されるだけであるが、現状から幅約1.6m、奥行0.4m、高さ不明である。羨門部は、開口していたため樹根が羨道部まで達し、右上半分が崩落しており旧状をとどめないが、ほぼ13°の角度で立ち上がり、上部幅・底面幅共に約1.4mを測る。羨門は縦長の台形で壁の中央やや左よりに穿たれ、立面は羨道部の形状から隅丸台形であったと思われる。幅は0.6mを測る。閉塞石は存在せず、床面は南にやや下る。

②羨道、玄室（第30図）

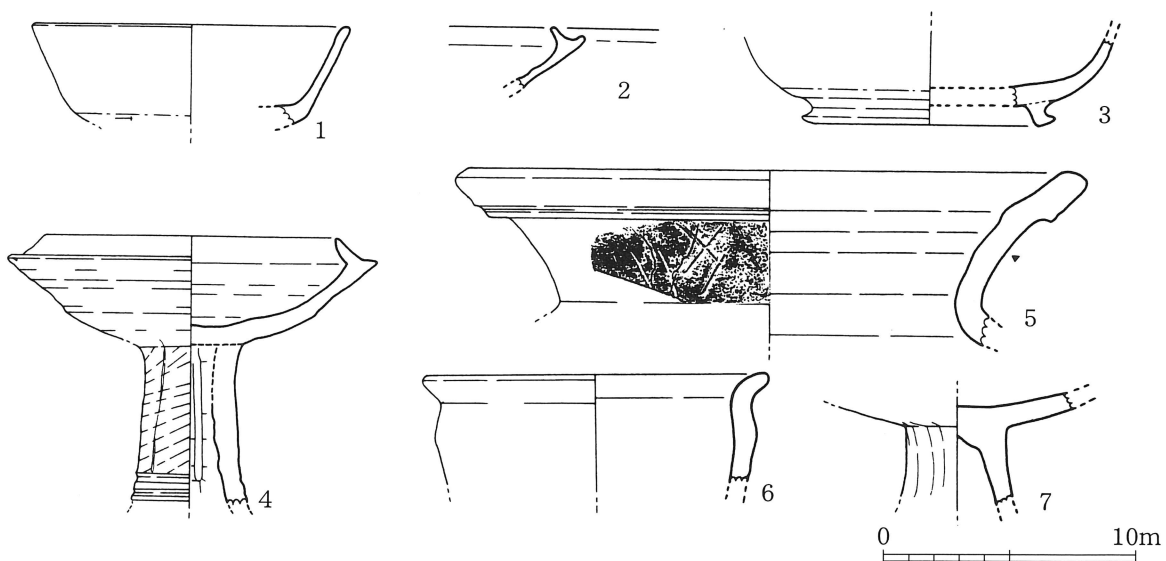
規模・構造

羨道の立面は隅丸の台形、平面形はバチ形を呈しており、全長約0.65m、玄門幅0.7m、玄門高1.1mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ0.8m、幅は中央やや奥壁よりで最大となり約1.9m、高さは中央付近が最大で約0.64mを測る。平面形は隅丸羽子板形に近いが奥壁部分が窄まる。天井部はアーチ型で玄室内には屍床は有せず、川原石の円礫を敷く。開口時には、土砂が堆積しており、遺物の混入が認められた。

③出土遺物（第34図）

前庭部

前庭部には、川原石が散乱していたが、これは玄室内のものではなく閉塞に伴うものである。2号墓の前庭部も攪乱を受けておりプライマリーな遺物の出土状況は認められなかった。1～4は須恵器である。1～3は坏身で、1は受け部が消滅しており2の受け部は内傾して短く伸びる。3は高台付坏であり、張り出しの少ない短い高台がつく。4は有蓋高坏である。



第34図 4-2号墓出土遺物実測図（1/3）

玄室内で出土したが、流れ込んだ状況であったので、ここで説明を加える。受け部は内傾して短く伸びる。6世紀末（TK209段階）のものであろう。5は大甕である。外方へ屈曲させ肥厚させる。外面にはヘラ記号が残る。6・7は土師器である。6は甕の口縁部か。7は高坏である。

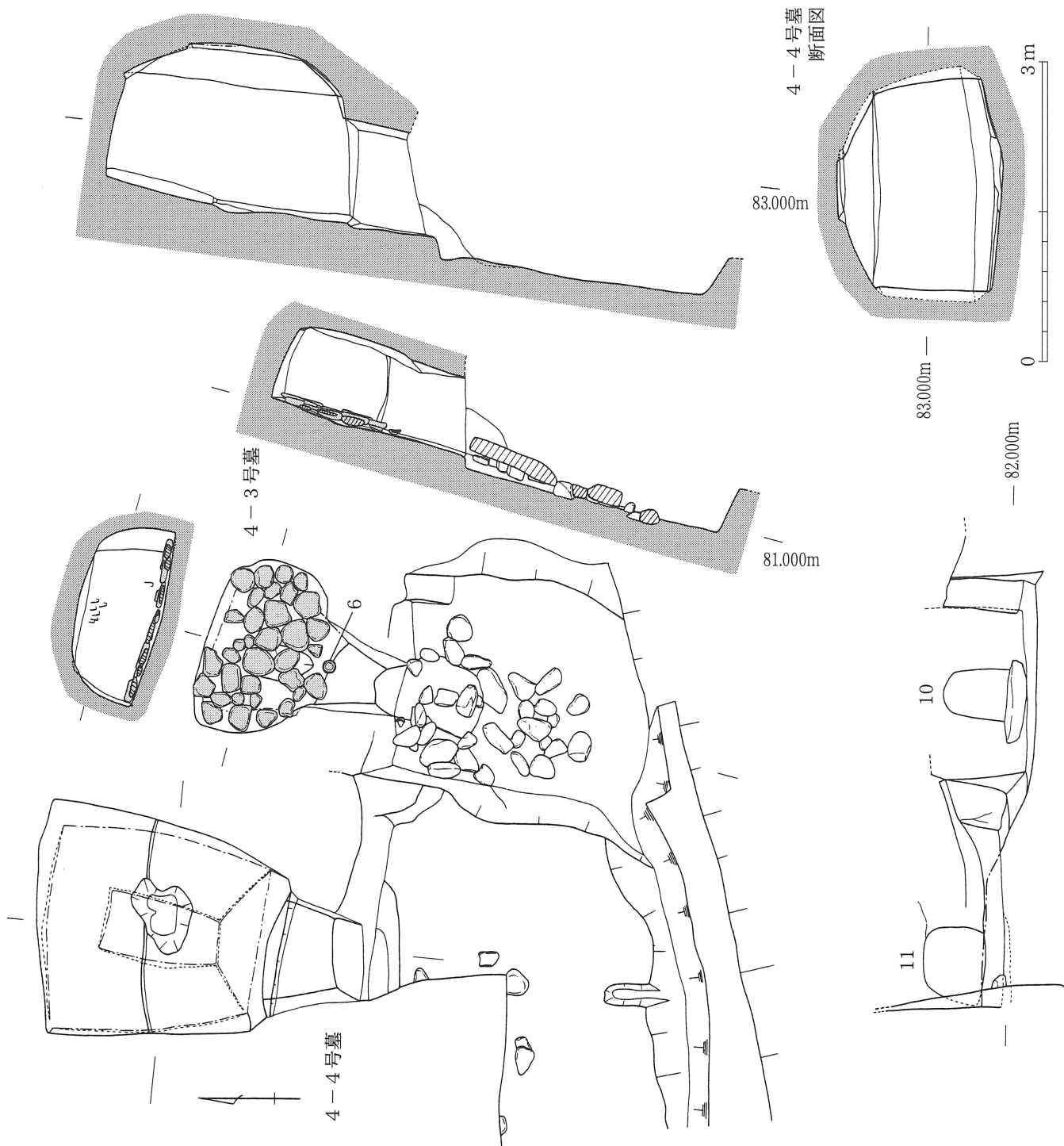
玄室内

すでに開口しており、人骨・遺物共に検出しなかった。

3号墓

①前庭部（第35図）

単独で前庭部を有しており、現状で長さ・幅ともに約1.4mである。1・2号の前庭部との境には段差があり、約0.3mの比高差がある。閉塞石は仰向けに倒れたままの状態を検出した。飾縁も崩落が激しくわずかに痕跡が確認されるだけである。



第35図 北友田横穴墓群 4-3・4号墓実測図（1/60）

羨門部は、ほぼ16°の角度で立ち上がり、上部幅は不明であるが底面幅は約1.2mを測る。羨門は縦長の台形で壁の中央に穿れ、羨門高は0.7m、幅は0.5mを測る。すでに開口していて床面は南に下る。

②羨道、玄室（第35図）

規模・構造

羨道の立面は台形、平面形はバチ形を呈しており、全長約0.9m、玄門幅0.9m、玄門高0.9mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ1.1m、幅は奥壁付近で最大となり1.8m、高さは中央付近が最大で約1.9mを測る。平面形は平入隅丸方形で、天井部はアーチ型よりも平型に近い。玄室内には屍床は有せず、川原石の円礫を敷く。床面はほぼフラットであり、羨道部で供献土器である土師質土器を検出した。

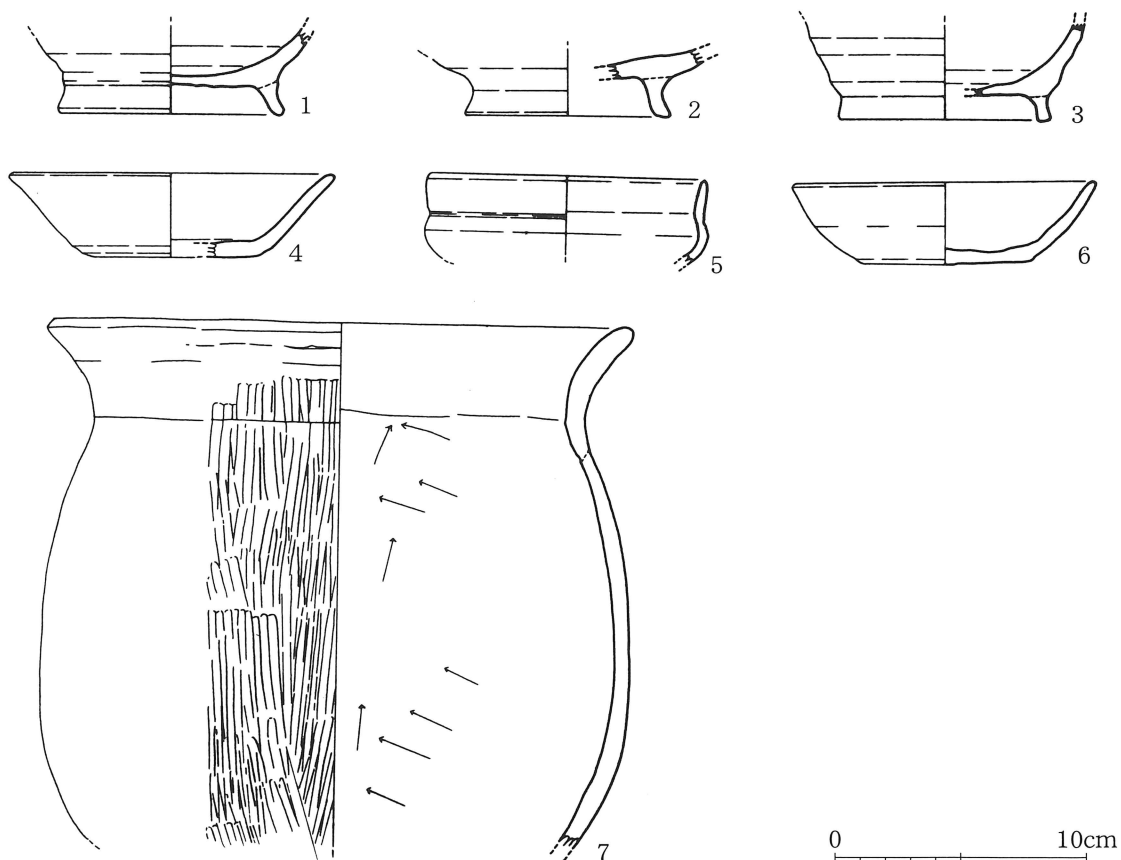
③出土遺物（第36図）

前庭部

前庭部には、閉塞石が倒れ、円礫が散乱していた。この円礫は3号の玄室内のものではない。量が多い点および4号墓内に円礫が確認できないことから、4号墓のものをここに廃棄したものであろう。遺物はその円礫の下から出土した。1～3は須恵器である。いずれも高台付坏で、高台が底部端に付くことから8世紀後半～9世紀前半にかけてのものであろう。4～6は土師質土器で、坏である。4・6はヘラ切り離しの箱型の坏で、9世紀台のものであろう。5は壙形坏である。1～4・7についてはほぼ同時期であり、1号墓でも同時期の供献土器が確認されているので、墓前祭祀に伴う供献土器の可能性が高い。7は流れ込みの古墳時代の甕であろうか。

玄室内

人骨は確認できなかったが、玄門で土師質土器の坏を検出した。6は玄室内で出土した土師質土器である。ヘラ切り離しの坏である。ミガキは認められないことから9世紀前半頃のものであろう。



第36図 4-3号墓出土遺物実測図（1/3）

4号墓

①前庭部 (第35図)

4基の中で最大の規模を有す。両側の前庭部との境には段差が認められ、最高位に位置することからこの横穴墓を中心にこの支群が形成されたと思われる。単独する前庭部は、現状で長さ約2m、最大幅が約3.5mを測る。飾縁も崩落が激しくわずかに痕跡が確認されるだけである。羨門部は、ほぼ16°の角度で立ち上がるが、西側部分が調査区外へ続き、また崩落のため旧状をとどめておらず規模は不明である。羨門は壁の中央に穿たれ、隅丸方形を呈すが、一部改変されており、現状で羨門高は0.7m、幅は0.8mを測る。すでに開口しており閉塞石は確認できなかった。前庭部先端には、排水溝が穿たれる。床面はほぼフラットである。

②羨道、玄室 (第35図)

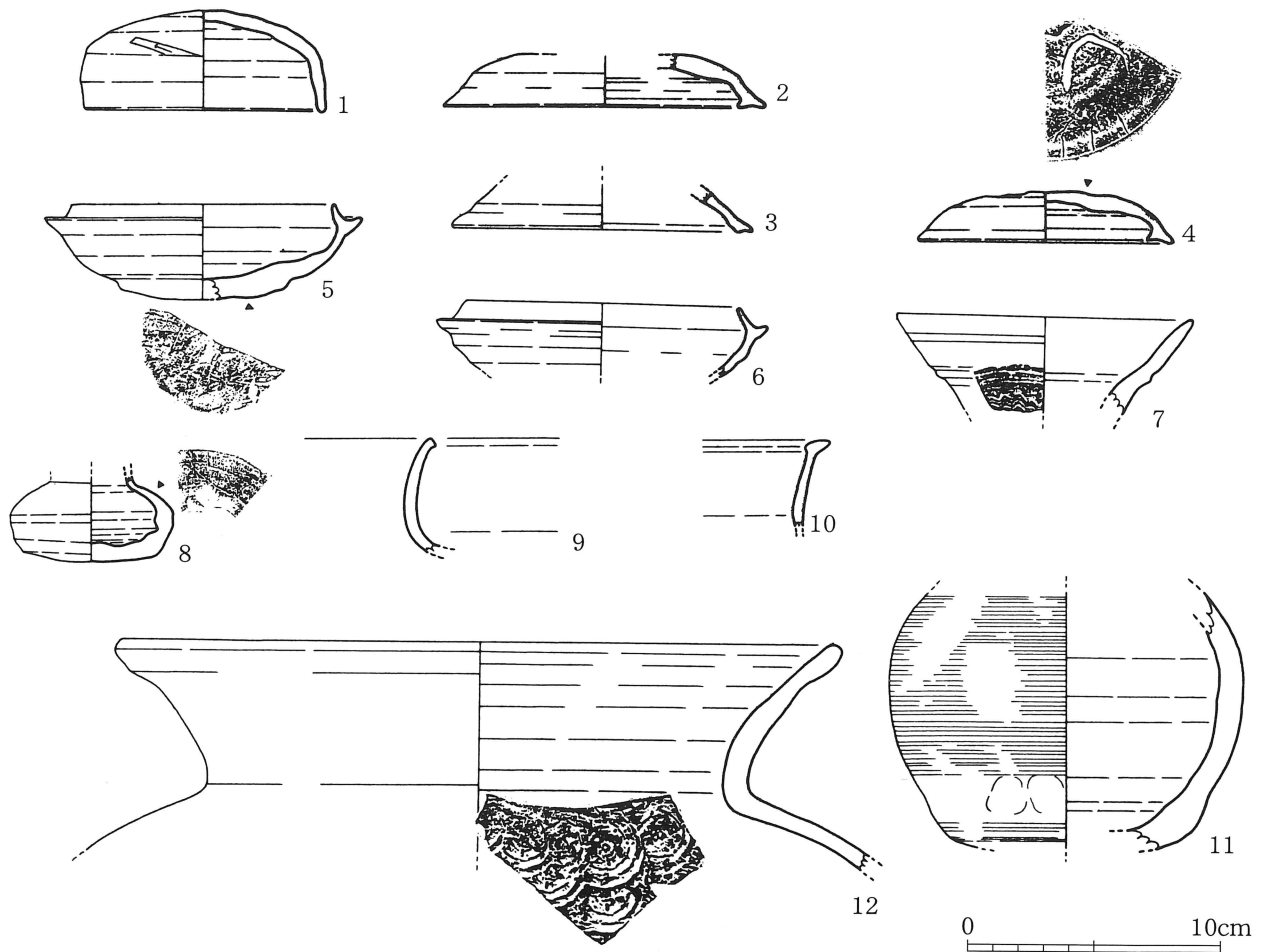
規模・構造

羨道の立面は台形、平面形はバチ形を呈しており、全長約0.83m、玄門幅1.28m、玄門高1.0mを測り、玄室に向かってわずかに上る。玄室は長さ2.44m、幅は奥壁付近で最大となり2.4m、高さは中央付近が最大で約1.7mを測る。平面形は妻入逆台形で、天井は寄棟形であり、棟は長さ約1.15m、幅約0.64mを測る。天井部はアーチ型よりも平型に近い。玄室内には削りだしのベッド状の段が存在するが、玄室内も改変されているため明確に屍床であると判断できない。前庭部には円礫が散乱していたことから、床面には円礫を敷いていた可能性が高い。玄室と羨道部の境には段差が認められる。

③遺出土物 (第37・38図)

前庭部

前庭部には、川原石はあまり散乱しておらず、崩落した土砂が堆積していた。しかしすでに攪乱を受けており、プライマリーな状態での遺物の出土は認められなかった。1～12は須恵器で、1の端部内面には返りは付かず、外面にはヘラケズリが残る。2～4には端部内面に返りが付く。5～6の受部は内傾して短く伸びる。これらの坏は、口径も小さいことから6

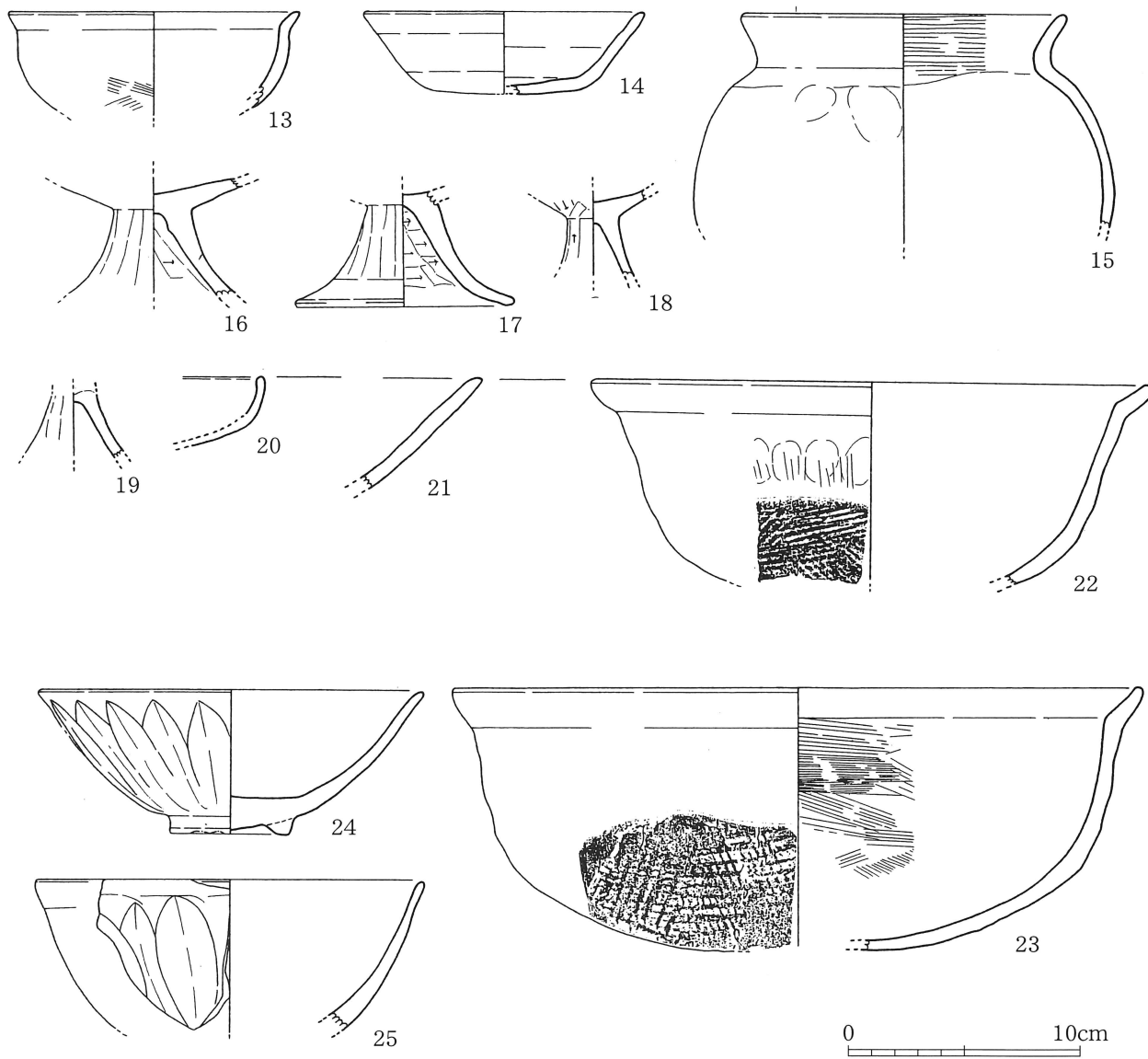


第37図 4-4号墓出土遺物実測図1 (1/3)

世紀末～7世紀前半（TK209～TK217段階）のものであろう。7・8は甗である。7は口縁部で8は胴部に当たる。9～11は壺で、9・10は口縁部、11は胴部である。12は甕の口縁部で内面に同心円の当て具痕が残る。13～23は土師質土器である。13は碗か。口縁端部が外反する。14はヘラ切り離しの坏で9世紀頃のものであろう。15は壺であり、16～21は高坏である。16から19は脚部で、いずれも縦方向のケズリが施される。20・21は口縁部片である。

玄室内

天井部付近まで土砂が流入しており、遺物は出土したものの玄室に本来伴うものかは不明である。なお、床面付近で若干の人骨片を確認した。22～25は玄室内で出土した遺物である。22・23は土鍋であり、25・26は鎬連弁の青磁碗である。13～14世紀のものであろう。

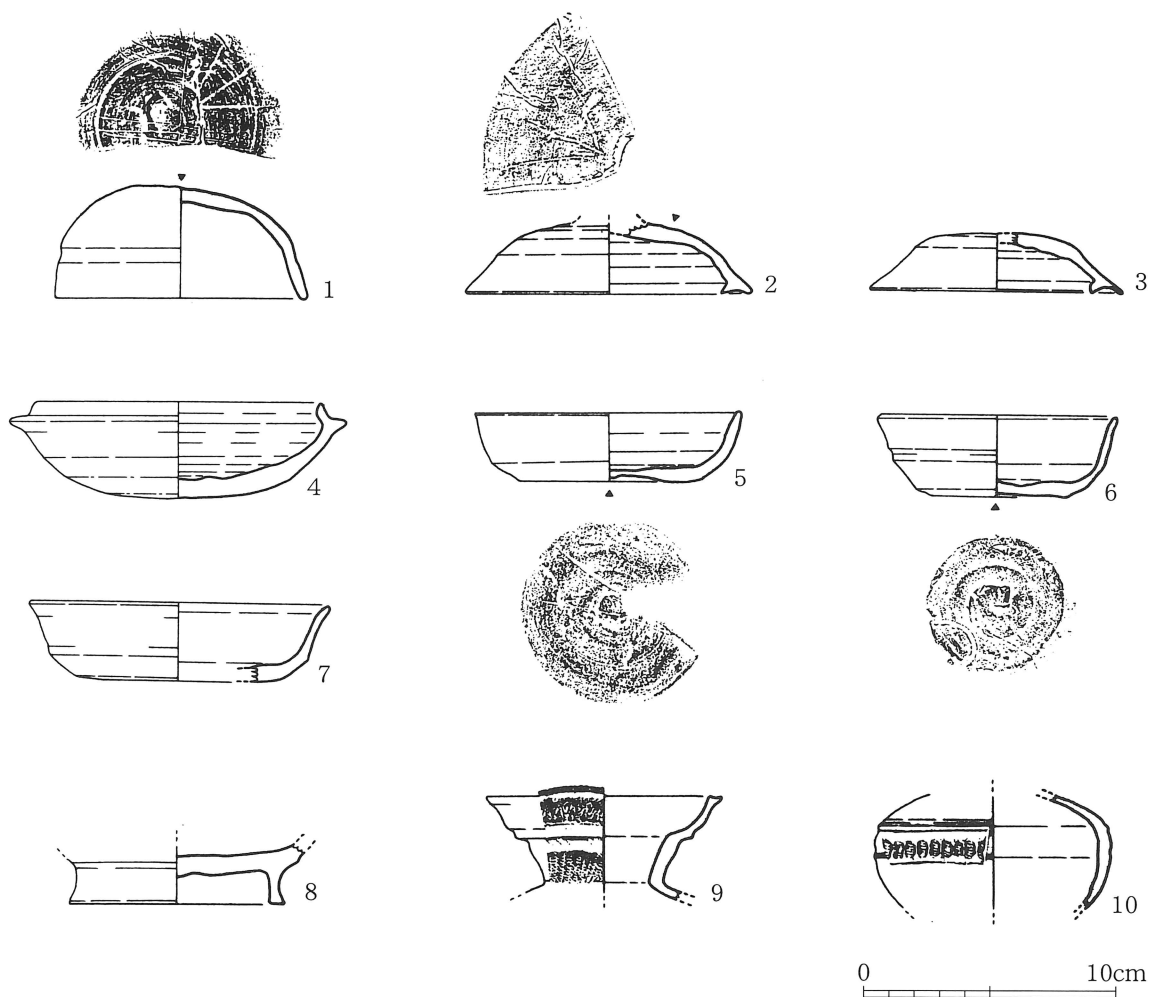


第38図 4-4号墓出土遺物実測図2 (1/3)

第4支群西側前庭部出土の遺物（第39図）

4群西側の横穴墓は調査区外へ続くため調査は実施できなかったが、工事にかかる前庭部については調査を実施した。他の前庭部同様に攪乱を受けており、プライマリーな状態の遺物の出土は認められなかった。

第39図は4群の前庭部西側で出土した遺物である。1～3は坏蓋で4～8は坏身である。1の肩部には沈線が巡り、2・3の口縁端部内面には返りが付くが、1は埴の可能性もある。4の受け部は内傾して短く伸びるが5～7には受け部が消滅する。8は高台付坏の底部である。これらの坏は6世紀末～7世紀前半（TK209～TK217段階）のものであろう。9・10は甗である。9は口縁部であるが、大きく開かないことから古相を呈している。



第39図 北友田横穴墓群第4支群西側前庭部出土遺物実測図（1／3）

第4章 まとめ

急傾斜地崩壊対策事業に伴う北友田横穴墓群調査は、平成14・15年度の2年次にわたって調査を実施した。調査区は北友田横穴墓群の西端部にあたり、平成14年度には片山第1地区で小型を含む5基の横穴墓を、平成15年度には12基の横穴墓を検出し、前庭部等から多量の須恵器を検出することができた。また、これらの横穴墓は、共有するテラスを持つ支群にグルーピングできるが、片山第2地区の4-1号墓を除くとすべて開口したものであり、すでに玄室内が改変されているものや、前庭部の攪乱が激しくプライマリーな状況は認められないもの、また、すでに消滅しているものなど、その保存状況はあまりいい状態ではなかった。しかし、本文で述べたように、前庭部の攪乱のため個々の横穴墓の年代は決定できないものの、各支群の造墓年代については前庭部から出土した遺物からある程度把握することができた(別表)。なお、3群については、同形態の横穴墓が平成5年(1993)の調査でも検出されており、時期を比定する際に参考にした(註1)。これらの横穴墓の規模は、全長(玄室+羨道部)で最大4.1m、最小0.75mを測り、玄室の平面形は、羽子板状、長方形、隅丸方形、巾着型・逆台形など、天井部も、アーチ形、寄棟形、切妻形など多様である。いずれも床面に川原石を敷く。各支群においては、1群のように中央に高さや面積が他を圧倒する大型の横穴墓を配置し、支群を形成する傾向が認められる。このような状況は、同じ朝日台地の北西に位置する小迫横穴墓群でも看取できる(註2)。これは明らかに、支群内にも墳墓の階級的構造差が存在することを示している。

支群	須恵器分類(坏)	造墓年代
1号	T K43~T K217	6世紀末~7世紀初頭
2号	?	?
3号	?	6世紀末
4号	T K209~	7世紀初頭

次に出土遺物についてであるが、前庭部では3群を除くと、坏身、坏蓋、長頸・短頸壺、甕、甗、平瓶などの須恵器や土師器の高坏などが出土しているが、攪乱等の二次的変化をかなり受けており、プライマリーな一括埋置の状況は認められなかった。しかし、1-1号で部分的ではあるが羨門部西側に坏身が重ねられた状態で、1-3号墓の前庭部では、大甕を破碎散布した状況で出土し、前庭部における食物供献儀礼の「ヨモツヘグイ」や「コトドワタシ」などの墓前祭祀が行われたことが認められた。玄室内については、古墳時代の遺物は確認できなかったが、9世紀代の坏が4-1号墓や4-3号墓で、玄門付近で検出した。正位に置かれおり、最終閉塞に伴うものであろう。また、4-1号墓の閉塞石前にも9世紀の土師質土器の坏身が検出されており、この時期にも前庭部や玄室内で墓前祭祀行為が行われたことが看取できるのである。この様な祭祀儀礼が7世紀以降も続いた例としては、玖珠町四日市上ノ原横穴墓群7-29号墓で8世紀前半まで確認できているが(註3)、今回の例が古墳時代後期から続く追葬もしくは祖霊祭祀に伴うものだとすれば県内では初めてのケースとなる。いずれにしても出土人骨の分析等を待たねば結論が出せぬが、閉塞行為を行っている以上、二次利用に伴う可能性は低く、古代の墓制を検討するうえ重要な例となるであろう。

最後に中世墓の問題であるが、本文で触れたように1-1、1-2、4-4号墓では玄室内から中世の遺物が出土し、中世墓として転用された状況が認められた。このような状況は同じ日田市の小迫横穴墓群や夕田横穴墓群(註4)でも窺えるが、これらの横穴墓をみると、羨道部が大きく、そして玄室内も部分的に改変されている。倉庫として利用する際に改変した可能性も残されるが、改変された4-4号墓と同じく埋没していた4群に属す他の横穴墓が改変されていない状況からみても、大規模な改変は中世墓に転用する際に行われた可能性が高いと思われる。また、4-4号墓玄室内の土砂からは五輪塔の火輪が出土するなど、連続する中世墓はまさに「やぐら」といった状況が展開していた可能性が考えられ、その関係が注目される。

以上、今回の調査結果についてまとめたが、今回の調査は、100基を優に超える北友田横穴墓群の西端に存在する17基の横穴墓を調査したに過ぎず、横穴墓群としての全体的な様相や、造墓時期や群集形態などについて言及するには至らなかった。しかし、個々の横穴墓についてその造墓時期は比定できなかったが、支群として造墓時期は明確にできたこと、また、この横穴墓群において9世紀まで横穴墓の造営が続いたこと、中世墓として転用された状況を明らかにできたことは大きな成果であるといえる。特に古代・中世における状況は、「やぐら」の問題を含め、今後、日田地域における古代・中世の墓制を考える上で重要な成果であったといえよう。北友田横穴墓群の全容を解明するには、まだまだ今後の資料の蓄積が必要である。今後の調査に期待するところである。

(註1) 玉永光洋編 1993 「北友田横穴墓群」『大分県日田市所在遺跡発掘調査報告』大分県教育委員会

(註2) 小柳和宏編 1995 「小迫横穴墓群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書3』大分県教育委員会

(註3) 友岡信彦他 2000 「四日市上ノ原横穴墓群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書16』大分県教育委員会

(註4) 友岡信彦編 1999 「夕田遺跡群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書14』大分県教育委員会

石川健・田中良之

九州大学大学院比較社会文化研究院

1. はじめに

大分県日田市北友田横穴墓から保存が比較的良好な人骨が出土した。調査にあたった大分県教育委員会から田中に人骨調査の依頼があり、田中・石川が現地に赴いて人骨の観察・実測・取り上げを行った。その後人骨は、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座へと搬入され、同講座において整理・分析を行った。以下に、これらの人骨についてその結果を記載する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類資料室に保管されている。

2. 出土状態

2-1. 3号横穴墓

3号横穴からは、人骨の小片が出土している。人骨の残存状況が非常に悪いことから、詳細な出土状況については不明である。

2-2. 8号横穴墓

8号横穴墓からは数体分と考えられる人骨が、全て関節が外れた状態で出土している。玄室内には土砂が落下あるいは流入しており、大部分の人骨はこれらの土砂中に含まれていた。ただし一部敷石数cm上位に接した状態で出土するものもみられる。

人骨は、玄室内奥壁中央から西側にかけてと、玄門付近中央から東側にかけて散乱状態で出土した。奥壁側の出土状態は、奥壁に最も近接する位置より同一個体と思われる頭蓋骨がやや散乱した状態で出土し、このほかに大腿骨や寛骨などが出土している。これらの人骨群よりやや玄門近くの西側からは、脛骨及び下顎骨が出土している。脛骨は左右それぞれ2本出土しており、2個体分の脛骨である可能性が高い。その南側の位置からは同一個体と考えられる左右大腿骨が出土している。上記2組の脛骨と近接した位置から出土していることから、そのいずれかと同一個体の可能性が高いが、関節状態にはない。

玄室中央からは、大腿骨や上腕骨、尺骨などが出土した。上腕骨には左右がみられ、また右上腕骨に近接して右尺骨が出土している。これらの玄室中央から出土した人骨群のやや東南側から、頭蓋骨が頭頂部を下にした状態で出土している。また、この頭蓋骨に近接して別個体の上顎骨が出土している。

玄門寄り東側の部分からは、四肢骨を中心とした長管骨が多く出土している。なかでも玄室中央付近から大腿骨及び脛骨が長軸を北西-東南に向けた状態で出土し、これらの南側から、大腿骨及び上肢骨と思われる長管骨が長軸をほぼ同じくして出土している。これらの人骨の東側からも、同様に大腿骨や上肢骨がややまとまって出土しており、長軸方向をおおよそ北東-南西にとる状態である。最も北側からは頭蓋骨が出土し、その南側からは大腿骨が他の人骨群とはやや離れた位置から出土している。これらの頭蓋骨と大腿骨の南側からは、大腿骨や上腕骨などが比較的まとまって出土している。このように入口に最

も近い部分からは四肢骨を中心とした人骨が多数出土しているが、奥壁寄りの部分と同様に関節状態にあるものはほとんど認められない。

以上のように、玄室内の流入あるいは落下した土砂との位置関係や、出土人骨にほとんど関節状態を保持したものが認められないことから、土砂が玄室内にある程度堆積した状態で、軟部組織の腐朽した遺体の関節を外す儀礼を行ったものと考えられる。また、このような儀礼行為との時間的先後関係については不明であるが、堆積土中より須恵器や土師器の小片が多数出土しており、また玄門付近からは土師器碗が出土していることから、土師器の破砕散布や供献などの儀礼的行為も行われた可能性が考えられる。

2-3. 11号横穴墓

人骨は、11号横穴内玄門付近右側から出土している。大腿骨及び人骨片が少量出土している。大腿骨は骨体部のみの出土であり、脛骨あるいは寛骨などは周辺から出土していない。

3. 人骨所見

3-1. 3号横穴墓出土人骨

【保存状況】 人骨の残存状況は良くないことから、部位など詳細の特定が不能である。

【性別・年齢】 性別及び年齢を推定できる部位が残存しないことから、判定不能である。

3-2. 8号横穴墓出土人骨

人骨の出土状況において述べたように、本横穴からは関節状態にない人骨が多数出土していることから、出土人骨の個体識別が困難な状況であり、同一個体に属すると判定された人骨はごく一部に限られる。そのため、以下では頭蓋骨を中心に人骨の保存状況等について報告することとする。

【保存状況】

①頭蓋骨

• 頭蓋骨 1 (取上番号34、35)

人骨の保存状態はあまり良くない。左前頭骨から左側頭骨及び後頭骨ラムダ縫合にかけての部分が残存する。眼窩上隆起は発達している。頭蓋主縫合は、冠状縫合内板が閉鎖し外板は一部閉鎖している。ラムダ縫合は内板・外板ともに開放している。

• 頭蓋骨 2 (取上番号16)

人骨の保存状態はやや良好である。顔面部及び左右の側頭骨、頭蓋底をのぞき、頭蓋冠がほぼ残存する。眼窩上隆起、外後頭隆起ともに発達している。頭蓋主縫合は、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合全てにおいて内・外板とも開放している。

• 頭蓋骨 3 (取上番号32)

人骨の保存状態はあまり良くない。右側頭骨鱗状縫合付近及び後頭骨片が残存する。頭蓋主縫合の癒合状態などについては不明である。

• 上顎骨 1 (取上番号34下、37)

人骨の保存状態はあまり良くない。右上顎骨と左上顎骨が残存する。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

/	/	M1	△	P1	C	I ²	×	○	○	C	P ¹	△	M ¹	M ²	/
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

歯牙咬耗度は栃原の2° a～3°である(栃原1957)。

• 上顎骨2 (取上番号19)

人骨の保存状況はあまり良くない。左中切歯から第1大臼歯にかけての部分が遺存する。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

/	/	○	×	P ¹	C	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

歯牙咬耗度は栃原の1° a～3°である(栃原1957)。

• 下顎骨1 (取上番号10)

人骨の保存状況はあまり良くない。下顎骨オトガイ孔付近が遺存する。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
×	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	○	○	○	○	○	P ₁	P ₂	×	×	×
	.	.											.		

歯牙咬耗度は栃原の1° c～2° aである(栃原1957)。

【個体識別】 頭蓋骨は上記のように、最低3体分出土している。これらの頭蓋骨と、上、下顎骨の個体識別については、頭蓋骨1と上顎骨1は、玄室内奥壁側中央部から近接して出土していることから、同一個体の可能性が高いものと考えられる。一方、下顎骨1は、頭蓋骨1や上顎骨1と同様に玄室内の奥壁よりから出土しているが、若干これらの頭蓋骨・上顎骨からは離れた場所に位置し、歯牙咬耗度も異なることから、別個体のものと考えられる。頭蓋骨2と上顎骨2も近接した位置より出土しているが、頭蓋骨2はサイズも小さく頭蓋主縫合がいずれも開放しており、上顎骨2の歯牙咬耗の進行具合からみた年齢と大きく異なることから別個体のものと考えられる。

【性別・年齢】 頭蓋骨1及び上顎骨1を上記のように同一個体と考えると、この個体の性別は、眼窩上隆起が発達していることから男性と判定される。年齢は、歯牙咬耗度がかなり進んでおり、頭蓋主縫合もラムダ状縫合以外では閉鎖していること等から、熟年と推定される。

頭蓋骨2については、性別は眼窩上隆起及び外後頭隆起が発達していることから男性と判定される。年齢は、頭蓋主縫合が全て開放していることから若年から成年前半と推定される。

頭蓋骨3については、性別・年齢ともに判定可能な部位が残存していないことから不明である。

上顎2については、第1小臼歯の歯牙咬耗度がかなり進んでいることから、熟年以上

と推定される。

下顎骨1は、上記の頭蓋骨のうちいずれと同一個体になるか判断することはできないが、年齢については、歯牙咬耗度から成年後半と推定される。

②四肢骨

四肢骨の保存状態は、玄室内奥壁寄りの位置から出土したものに関しては比較的良好であり、個体識別に耐えうる状態であった。一方玄門付近から出土した一群の四肢骨に関しては、保存状況があまりよくないことから左右や性別の判別が困難であった。本横穴出土の四肢骨の部位別個体数は表1の通りである。これらの四肢骨で粗線や筋線の未発達なものは認められないことから、若年前半の個体が含まれている可能性はきわめて低いと考えられる。また、一部の四肢骨は部分的に計測が可能であり、表2に示すとおりである。

表1 北友田8号横穴墓出土四肢骨の部位別個体数

部位 左右	成人								未成人	合計
	男性		女性		不明					
	右	左	右	左	右	左	不明			
上腕骨	2	1	0	0	0	0	0	0	0	3
尺骨	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
橈骨	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
骨盤	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2
大腿骨	3	4	0	0	0	1	1	1	0	9
脛骨	2	2	0	0	0	0	0	0	0	4
腓骨	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1
最大個体数	3	4	0	1	0	1	1	1	0	

【被葬者数と性別・年齢構成】

以上のように、8号横穴墓からは、複数体の人骨が出土したが、そのほとんどにおいて関節が外れた状態であった。個体識別は頭蓋骨、上肢骨、下肢骨等の各部位ごとに一部行うことができた。被葬者数については、最も多く出土した左大腿骨から最低5体と考えられる。これらの下肢骨と頭蓋骨や寛骨における性別判定から、5体のうち大腿骨粗面が発達していた4体は男性、寛骨大坐骨切痕角が大きい個体は女性と考えられる。また、これらの下肢骨とどのような組み合わせになるかは不明であるが、頭蓋骨では男性2体が認められた。

年齢については、頭蓋骨及び上・下顎骨の観察結果から次のように推定される。上記の男性と判定された頭蓋骨2体は、若年から成年前半の男性と熟年男性と推定される。また、性別は不明であるが、上顎及び下顎骨の歯牙咬耗度から熟年個体と成年後半の個体が含まれるものと推定される。

【特記事項】

下肢骨を中心として、骨体部に齧歯類によると思われる噛み跡が複数の骨で認められた。また、堆積土中より須恵器や土師器の小片が多数出土した。

3-3. 11号横穴墓出土人骨

【保存状況】 人骨の遺存状況はよくない。大腿骨は骨体部小転子近くが残存する。粗面の発達は弱い。

【性別・年齢】 性別は、大腿骨粗面の発達が弱いことから、女性と判定される。年齢については、推定可能な部位が残存しないことから不明であるが、骨体部の太さや厚さから成

人の可能性が高いと推定される。

4. まとめ

北友田横穴墓からは、3号・8号・11号横穴の合計3基から人骨が出土した。最も人骨の残存状況が良かった8号横穴墓からは最低5体の人骨が出土したが、人骨の保存状況が余りよくないことなどから、計測が可能な個体はほとんどなく、形質の比較を行うことはできなかった。

また、北友田横穴墓群では8号横穴墓において、遺体を用いた儀礼行為と考えられる所見が得られた。本横穴墓から出土した人骨は複数体に及ぶが、それら全てにおいてほとんどの場合関節が外れた状態であった。このような遺体の意図的移動は、玄室床面から数cmほど土砂が流入ないしは堆積した段階で行われているものと考えられる。全ての遺体が一度にごかされたものであるかどうかについては不明であるが、全ての人骨において上記のような堆積状況が認められることから、さほど大きな時間的間隔を置かずして遺体の移動が行われているものと考えられる。

このように8号横穴墓では、本来の埋葬状態を保つ人骨は1体も認められず、全体的に関節が外れており、散乱した印象すら受ける。追葬時に片づけを行ったとしても、当然のことながら最終埋葬の被葬者は全身が関節状態で保全されるはずである。これらの横穴墓には十分なスペースがあり、人骨が個体ごとにまとまっておらず散乱に近い状態であることなどを考慮すると、他の場所に埋葬して骨化した後に改葬した可能性は考えがたい。したがって、これらの横穴墓においては、最終埋葬を終えて10年ほど経過した後に再開口し、最終的にはすべての被葬者の関節のほとんどを外してしまうという行為を行っていると考えられるのである。

本横穴墓にみられる人骨の出土状況のように、遺体が関節状態を保持せず、人為的に遺体を動かしたと考えられる事例は、大分県直入郡の長湯横穴墓においても認められている(甲斐2004)。なかでも3号横穴墓や7号横穴墓においては複数体の遺体が、軟部組織がある程度腐朽した後に、人為的に関節が外されたものと考えられている(石川他2004)。

これらの事例のようにほぼ全身の関節を外すといった儀礼行為については、5世紀後半から認められるようになる遺体の脚部を意図的に乱す儀礼に通じるものと考えられる。このような遺体の脚部を意図的に乱す行為は、埋葬後10年ほど経過してから再開口して遺体の足を乱すが、その際にヒョウタンなど飲食物を供献した例があることから、黄泉戸喫と関連した再生阻止儀礼であると考えている(田中・村上1994)。

上記のような被葬者の全身の関節を外すという行為について、個々の被葬者の関節外しが、順次行われたのか、それとも最終埋葬後に一括して行われたのかは明らかではない。しかし、上に紹介したような上ノ原横穴墓や長湯横穴墓において報告されている足を乱す行為に通じると考えられることから、死後の再生阻止儀礼が、当初は脚部に行われていたものが、次第にエスカレートしていき、全身に及んだと考えられるのである(田中・村上1994)。このような儀礼は、大分県や九州に限定されることなく、今日では関東まで事例が得られており(群馬県埋蔵文化財調査事業団2004)、古墳時代後期に広く行われた儀礼行為であると考えられる。大分県の山間部に位置する本横穴墓群においても、この儀礼行為が確認されたことは、古墳時代後期における葬送儀礼の波及を考察する上で重要であり、

今後のさらなる事例増加が期待される。

謝辞 北友田横穴墓出土人骨を調査・研究するにあたって、さまざまなご教示、ご助力をいただいた大分県教育委員会の甲斐寿義氏ならびに関係諸氏に感謝申し上げたい。また、現地における人骨調査にあたっては九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座の小田裕樹氏のご助力を賜った。さらに、大学院比較社会文化学府基層構造講座の諸氏には人骨の整理等で協力頂いた。記して謝意を表したい。

文献

- 石川健・舟橋京子・渡邊誠・原田智也・田中良之，2004：長湯横穴墓出土人骨について。長湯横穴墓群 桑畑遺跡－主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－。文化財調査報告書大171輯。大分県教育委員会。
- 甲斐寿義，2004：長湯横穴墓群 桑畑遺跡－主要地方道庄内久住線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－。文化財調査報告書大171輯。大分県教育委員会。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団，2004：多田山古墳群：今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡。群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告，第328集。
- 田中良之，1995：古墳時代親族構造の研究。柏書房，東京。
- 田中良之・村上久和，1994：墓室内飲食物供献と死の認定。九州文化史研究所紀要，38。
- 枋原博，1957：日本人歯牙咬耗に関する研究。熊本医学会雑誌，31，補冊4。

表2 8号横穴墓出土四肢骨計測値

(mm)			(mm)				
【上腕骨】	④	24(右)	【大腿骨】	①(左)	②(右)	33(左)	23(右)
M1	—	—	M1	—	—	—	—
M2	—	—	M2	—	—	—	—
M5	—	22.3	M6	26.4	24.6	30.4	29.5
M6	—	19.1	M7	23.0	25.5	27.0	28.8
M7	57.0	—	M8	80.0	80.0	90.0	90.0
M7a	—	68.0	M9	—	33.7	—	—
			M10	—	—	—	—

(mm)			
【脛骨】	⑧(右)	29(左)	21(左)
M1	—	—	—
M1a	—	—	—
M8	30.0	31.6	(27.4)
M8a	(33.0)	—	(31.8)
M9	17.2	19.3	16.6
M9a	18.0	—	17.0
M10	80.0	83.0	73.0
M10a	(84.0)	—	(82.0)
M10b	69.0	—	68.0

大分県日田市 北友田横穴墓出土人骨の分析

三原正三, 小池裕子 (九州大学大学院 比較社会文化研究院)

1. 試料

遺跡名：北友田横穴墓

試料：8号横穴出土人骨 (九州大 lab. No.04HM02)

仮11号横穴出土人骨-1 (九州大 lab. No.04HM03)

仮11号横穴出土人骨-2 (九州大 lab. No.04HM04)

2. 試料調製と ANCA-mass 測定

上記試料の¹⁴C年代測定のため、骨中のコラーゲンの抽出をおこなった。試料の調整法は三原ら (2002) に述べたとおりである。

- (1) 骨試料の中から、可能な限り保存状態の良いものを選び、デンタルドリルで試料表面の汚れを除去した。内部に汚染が浸透している場合は割って内部の汚染部分も除去した。蒸留水で3分間の超音波洗浄を繰り返し、表面の細かな汚れを除去した。大きな試料は適度の大きさに砕いて超音波洗浄をおこなった。これを凍結乾燥した後、ステンレス製の乳鉢で粉砕した。
- (2) 土に埋もれている間に混入したフミン酸などの土壌由来の有機物を除去するため、試料粉末を15mlの遠心チューブに移して0.1NのNaOH水溶液を加え、遠心して上澄みを除去するという操作を2回繰り返し、アルカリ処理をおこなった。
- (3) 0.1NのHCl水溶液を加えてローテータで30分ほど攪拌し、(2)と同様の操作によって脱灰し、コラーゲン抽出をおこなった。
- (4) 脱灰後、0.01N未満のNaOH水溶液に変え、(2)と同様の操作で再度アルカリ処理をおこない、コラーゲンに混入したアルカリ可溶成分を除去した。
- (5) 蒸留水でコラーゲンを洗浄し、0.1NのHCl水溶液を数滴加えて溶液を中和し、再度蒸留水で洗浄後、約24時間凍結乾燥し、試料をスクリー管瓶に入れて保存した。

得られたコラーゲンを約0.8mg秤量して錫製のカプセルに詰め、標準試料のグリシンとともにANCA-mass (Automated Nitrogen and Carbon Analysis mass spectrometry, Europa Scientific社)を用いて分析をおこなった。分析結果のうち、炭素、窒素含有率からC/N比を算出し、コラーゲンの保存状態を確認した。

3. 測定結果

試料調整の結果および ANCA-mass による測定結果を表 1 に示す。通常、骨中には20%程度のコラーゲンが含まれており、遺跡出土試料ではその含有率が低くなる。本試料ではコラーゲンの回収率は0.3~0.6%であった。骨試料の風化が進んでおり、コラーゲンの劣化が進んでいたものと思われる。人骨コラーゲンの精製状況を確認するのに炭素と窒素の含有率、およびその比である C/N 比を用いた。標準的なコラーゲンの炭素含有率(%C)は40~45%、窒素含有率(%N)は15~18%であるのに対し、測定した3試料の炭素含有率は15~30%、窒素含有率は3~5%であった。特に04HM02(8号人骨)に関しては無機物の残渣(CaO?)が多く含まれていたと考えられる。また、標準的なコラーゲンの C/N 比は 3.2 ± 0.5 であり(Hare and von Endt, 1990)、現生の象牙試料から得られたコラーゲンの C/N 比の平均値は2.8(Ishibashi et al., 1999)となっている。これに対し、本試料 C/N 比は4.6~7.0と高く、良質なコラーゲンが得られているとは考えにくい。特に04HM03と04HM04(ともに仮11号人骨)に関しては前処理によって除去しきれない外部由来の炭素の混入が多い。従って、 ^{14}C 年代測定の試料としては問題があるため、年代測定に関しては考慮すべきであると考えた。

表 1 北友田横穴遺跡出土人骨の分析結果

Labo No.	遺構	使用量 (mg)	コラーゲン量 (mg)	回収率 (%)	% C	% N	C/N 比
04HM02	8号横穴	1003	6.2	0.6	14.6	3.2	4.6
04HM03	仮11号横穴①	1024	2.7	0.3	21.1	3.0	7.0
04HM04	仮11号横穴②	1053	4.4	0.4	29.6	4.4	6.7

引用文献

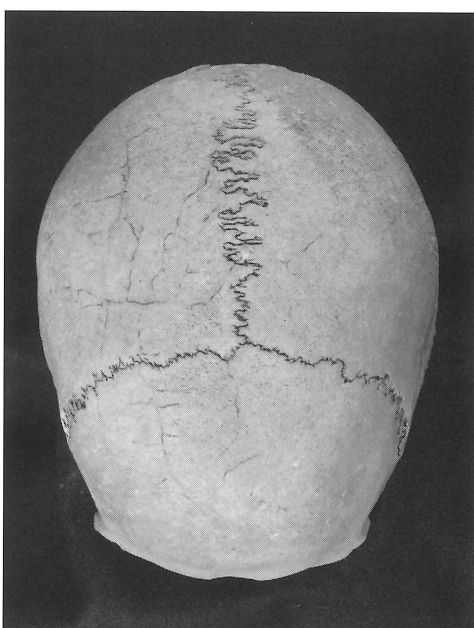
Hare, P. E. and von Endt, D. (1990) Variable Preservation of Organic Matter in Fossil Bone. *Annual Report of Director of the Geophysical Laboratory Carnegie Institute, Washington, 1889-1990, Geophysical Laboratory, Washington D. C.*; 115-118.

Ishibashi, H., Takeuchi, T., White, I. and Koike, H. (1999) „ ^{15}N and „ ^{13}C measurements from the African elephant, *Loxodonta africana*, used for ivory sourcing. *Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University*, 5: 1-8.

三原正三, 奥野充, 小川英文, 田中和彦, 中村俊夫, 小池裕子. (2002) フィリピン、ラロ貝塚群出土遺物の AMS ^{14}C 年代と出土人骨の食性分析. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XIII); 82-104.



8号横穴墓出土頭蓋骨2（正面觀）



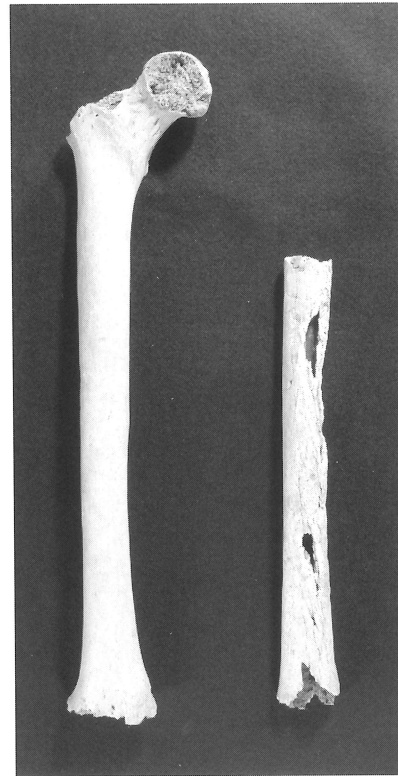
8号横穴墓出土頭蓋骨2（上面觀）



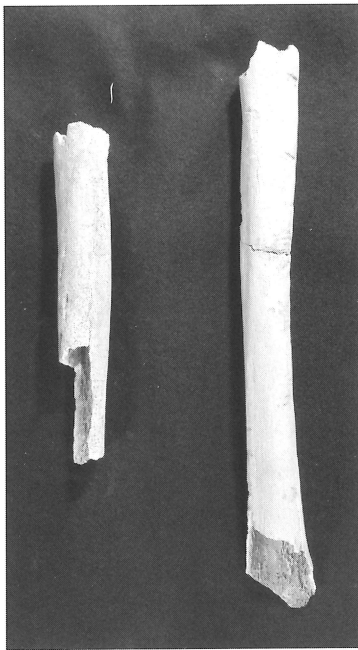
8号横穴墓出土頭蓋骨2（側面觀）



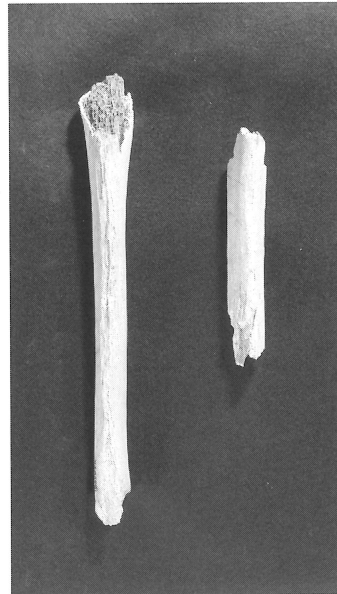
8号横穴墓出土上肢骨
(左より右尺骨・右上腕・右上腕)



8号横穴墓出土大腿骨 1



8号横穴墓出土大腿骨 2



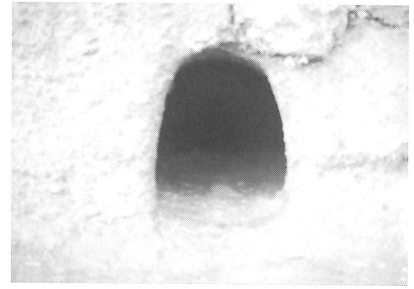
8号横穴墓出土脛骨

写真図版 1

片山第1地区



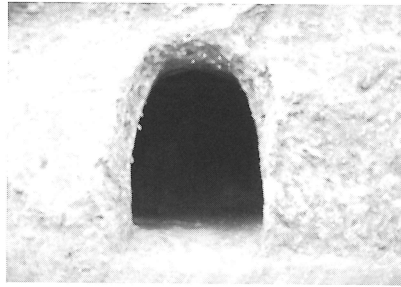
全 景



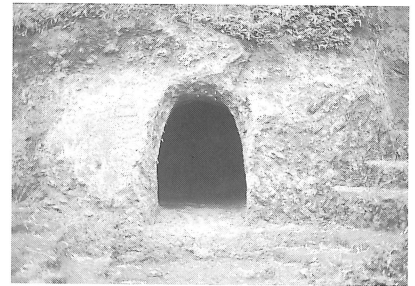
1号墓羨門



2号墓羨門



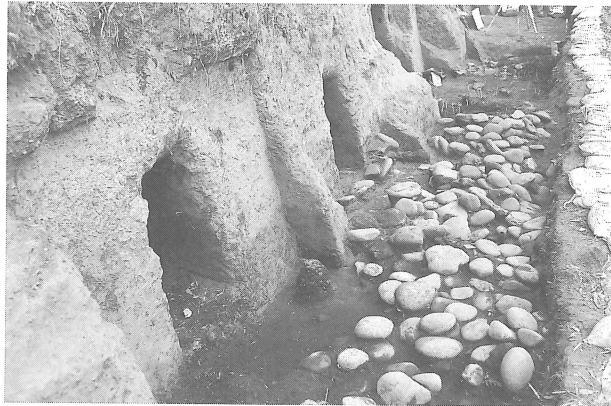
3号墓羨門



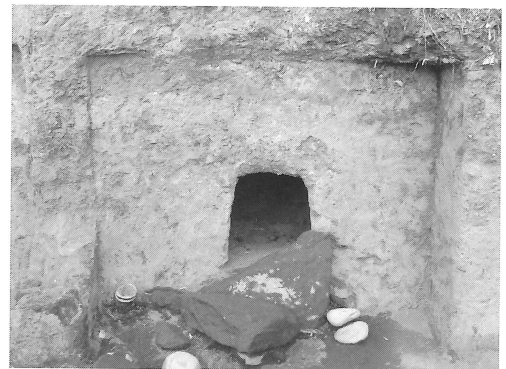
4号墓羨門

片山第2地区

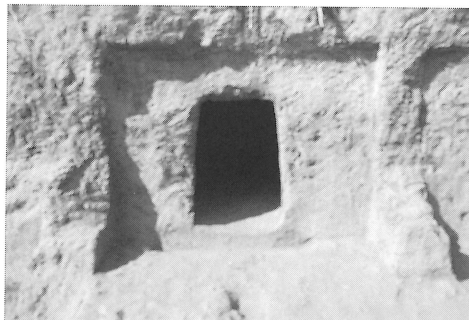
第1支群



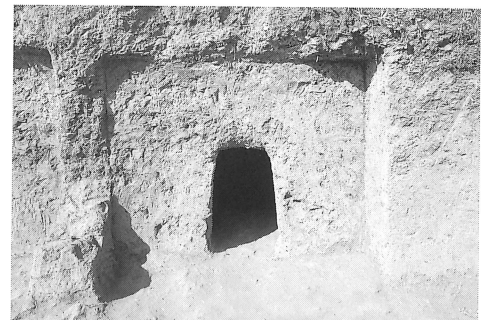
円礫出土状況



1号墓閉塞状況



2号墓羨門



1号墓羨門



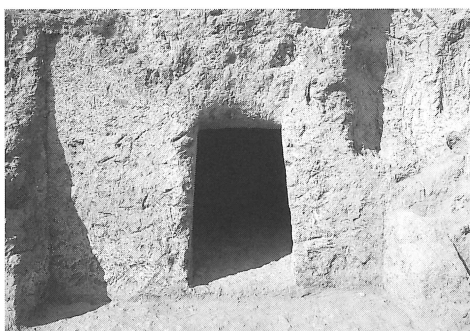
3号墓前庭部遺物出土状況



2号墓遺物出土状況



3号墓羨門

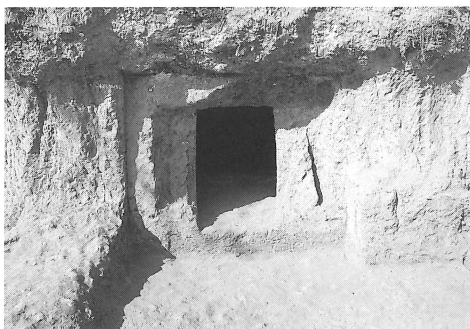


4号墓羨門

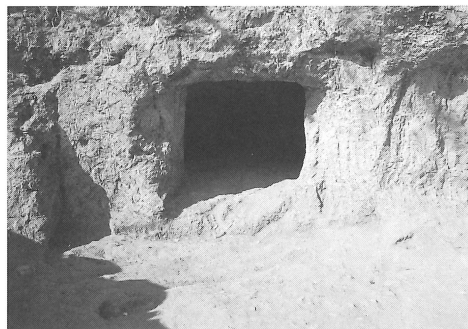


5号墓羨門

第2支群



1号墓羨門

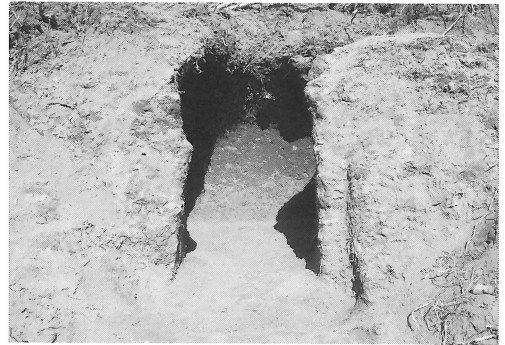


2号墓羨門

第 3 支群



1号墓



1号墓羨門

第 4 支群



第 4 支群



1号墓閉塞状況



1号墓人骨出土状況



2号墓羨門



3号墓羨門



5号墓



3号墓遺物出土状況



4号墓羨門



1-1号墓前庭部出土 須恵器坏



1-3号墓前庭部出土 須恵器



1-2号墓前庭部出土 須恵器坏



1-2号墓玄室内出土 青白磁



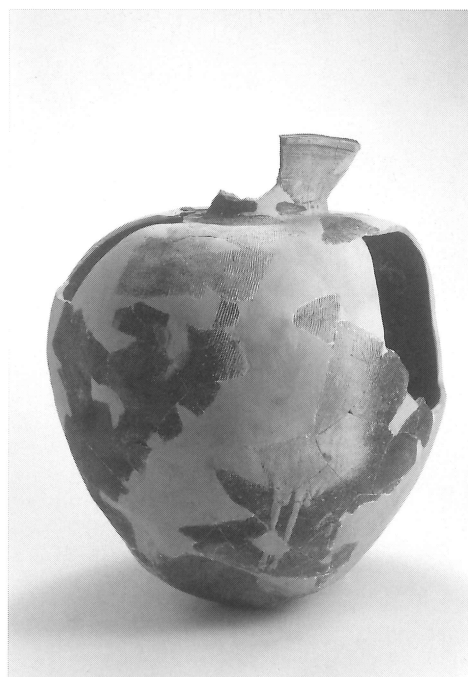
1-3号墓前庭部出土 須恵器平瓶



1-2号墓玄室内出土 白磁



1-3号墓前庭部出土 須恵器壺



1-3号墓前庭部出土 須恵器甕

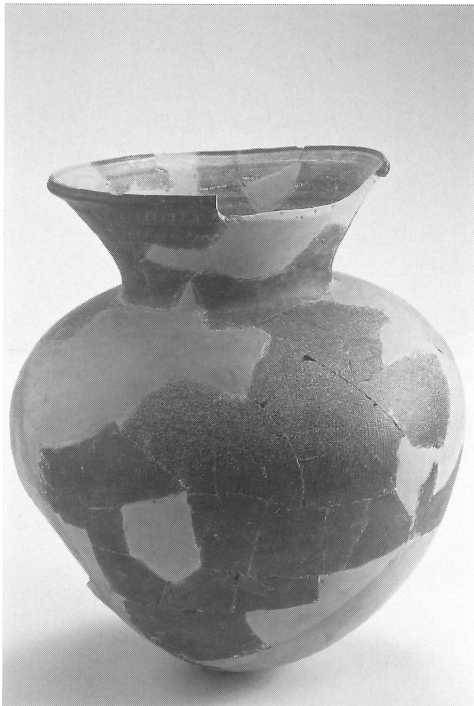
写真図版 5



1-1号墓前庭部出土 須恵器甕



1-3号墓前庭部出土 須恵器甕



1-3号墓前庭部出土 須恵器甕



4-1号墓玄室内出土 土師器高台杯



4-1号墓玄室内出土 石器



4-3号墓玄室内出土 土師器杯



4-4号墓前庭部出土 須恵器類

報告書抄録

フリガナ	キタトモダヨコアナボグン
書名	北友田横穴墓群
副書名	片山地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う関係埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	
編著者	甲斐寿義
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
発行年月日	2005年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	ショザイチ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
キタトモダヨコアナ 北友田横穴 ボグン 墓群	ヒタシオオアガキタトモダ 日田市大字北友田 アザカタヤマ 字片山	65	1091	36°05'15"	136°57'51"	20020426 ～20030508 20030226 ～20030228 200301218 ～20040207	100 100 200	急傾斜地 崩壊対策 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北友田横穴墓群	横穴墓	古墳～中世	横穴墓 16基	須恵器、土師器、古代の 土師質土器、中世の貿易 陶磁器等	人骨4体

要約	<p>北友田横穴墓群は、日田市北部を流れる花月川右岸の吹上原台地から朝日台地の南斜面に約1.5kmにわたりいくつかのグループで構成される。この横穴墓群については、昭和48年(1973)と昭和52年(1977)及び平成5年に急傾斜地対策事業に伴い調査が実施されている。</p> <p>今回の調査は、片山地区急傾斜地崩壊対策事業に伴うもので、平成14年度・15年度の2年にわたって本調査を実施した。平成14年度の調査(片山第1地区)では開口した5基の横穴墓と工事中に発見された小型の横穴墓1基を、平成15年度の調査(片山第2地区)では未開口の横穴墓1基を含む12基の横穴墓を確認した。平成15年度の調査では、前庭部や玄室内から、人骨や古墳時代後期～中世にかけての遺物を検出しており、古墳時代後期から中世にかけての埋葬形態を明らかにすることができた。</p>
----	--

北友田横穴墓群

一片山地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—
大分県教育庁埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第5集

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL (097) 597-5675

印刷 有限会社 元屋印刷
〒876-0811
佐伯市鶴谷町3丁目1番9号
TEL (0972) 24-0900
